
わたし@アウトサイド

mitiida

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたし@アウトサイド

【Nコード】

N41120

【作者名】

mittida

【あらすじ】

親愛なる恋人・ヨウコさんの謎の死。
それは自殺だった。

身も心も打ちひしがれた、私。

そんな中、死んだはずのヨウコさんからのメール。

掲示板に書かれた中傷などが、私に降りかかってくる。

そして、恋人・ヨウコさんの親友の失踪。

事件は思わぬ方向に進んでいく。
偶然出あった謎の少年、サンタは事件の真相を探るべく行動を開始する。

私と、サンタは真相にたどり着けるのか？
現実とネット、そして、この世界の存在する意味、人間が生きる意味、そんな事が交錯していく中、私は恋人の死の謎を追い続けていく。

複雑に絡み合った運命の糸。それは、私の想像を遥かに超えるものだった。

プロローグ

ヨウコさんの死に顔は、穏やかに笑っていた。

永遠の微笑だ。

ヨウコさんと過ごした思い出が、私の頭の中に、次々と浮んで消えた。

突然、こんな日が来るなんて、思ってもいなかった。

永遠の別れだ。

涙が止まらない。

私は手で涙をぬぐって、ヨウコさんの顔を脳裏に焼き付けようと、必死になった。

それから。

それから、私は何をしたのだろう。

ふと気づくと、総合病院の入り口に立っていた。

タクシーが病院のロータリーに横付けされて、診察が終わった人々が乗り込んでいく。

空を見ると、よく晴れていて、青く澄み渡り、雲ひとつなかった。初夏の風が病院の近くにある林の木々の匂いを運んでくる。生命にあふれた若々しい匂いが、恨めしく感じた。

何なんだろう。

どうしてこんなことになってしまったのだろう。

ヨウコさんとの楽しかった日々が、私の心の奥の方から、滲むように浮かんでは消える。消えては浮かぶ。

私は病院の入り口に立ったまま、しばらく呆けていた。

どれくらい時間が経ったのだろう。

ヨウコさんとの思い出の日々も、もう何も浮かばなくなった。

私は空っぽになってしまった。

本当に、空っぽになってしまった。

深い深い、真っ暗な穴に、自分の心が、静かに、音もなく、沈ん

でいくのを感じた。

脳裏に焼き付けたはずのヨウコさんの微笑も思い出せなかった。もう一度、空を見てみた。

病院の近くの林の木々を見てみた。

空の青さも、木々の緑も、なくなっていた。

ヨウコさんがいなくなつて、景色は色を失い、まるで古い映画のようにぼんやりと霞んでいた。

私はふらふらと歩いた。涙あふれるままに、ふらふらと、行くあてもなく、ただ歩いた。

ヨウコさんのいない世界で、自分が生きる意味があるのだろうか。誰かに問いたい。

私はこれからどうすればいいのだろうか？
誰かにすがりたい。

私はこれからどう生きていけばいいのだろうか？

駅から大学まで、だらだらとした坂道をあがっていく。私はいつの間にか、先生のいる大学に向かっていった。初夏の太陽が私の沈んだ心に容赦なくふりそそぐ。

しかし、全く暑さを感じない。色のない太陽がただ私の頭上にある。

私はやっとの思いで、先生のいる研究室にたどり着いた。

軽くノックして扉を開けると、先生は机に向かって、難しそうな本を読んでいた。私に気づくと、先生は無表情なその顔を私の方に向けた。

白髪

度の強い眼鏡。

そして、その顔は彫りが深く、整っており、欧米の映画スターのようだ。

先生は私を見ると、読んでいた本を閉じて、ずり落ちた眼鏡を上げて、私に言う。

「おや、ミツヤ君、今日はなんだか元気がない。何かあったのかね

？」

先生はいつものように無表情だったが、どこか温かかった。

「先生」

「先生、生きる意味を教えてください。どうせいつかは死ぬのに、なぜ人は生きようとするのでしょうか？」

私は溢れてくる涙を抑えて、やっとの思いでそう言った。答えなどないことは解っていたが、先生ならどう答えるのだろうか？

先生はきよんとした顔をしていた。何を今さら　というような表情に見えた。

「あらゆる生命体は種の存続のため、子孫を残すために生きる。それだけじゃ」

私は納得できなかった。

「それでは、生殖活動を行わない人間は生きる意味がないということですか？」

先生は言う。

「人間を種として考えれば、そうなる。より強いオスがたくさん生殖活動をすれば、種の存続の可能性は高まる」

私ははつと気づいた。そして次の質問を先生に投げかけた。

「先生、種は、人間は、何故存続しようとするのでしょうか？何故絶滅してはいけないのでしょうか？」

先生はしばらく目を閉じてじっとしていた。そしてゆっくりと話を始めた。

「それは　、わたしには解らん。光速が何故秒速三十万Km/hなのか？という問いと同じだ。そういう仕組みになっているとしか言えない」

「先生、それでは先生は何のために生きているのですか？」

先生は目を細めて口元を緩ませ、そして、言った。

「人間個人は何かのために生きなくてはいけないのか？わたしは研究ができれば、それで幸せじゃ。他には何もいらん」

私にはわけが解からなかった。

人は何かのために生きなくてもいい。
先生はそう言った。答えにはなっていないかもしれない。
しかし、何となく気持ちが楽になったような気がした。
幸せとは何かは解からない。
しかし、ヨウコさんのいない世界にも、幸せはあるかもしれない
と思った。

先生、ありがとうございます。

葬儀場で悲しみにくれていた

葬儀場は小高い丘の上にあつて、駐車場から階段を上っていく。二階建ての葬儀場の建物の方から、生温かい湿った風がふいていて、私の額がわずかに汗ばむ。

ヨウコさんの葬儀は、淡々と、シナリオ通りに進められた。

棺桶の中のヨウコさんは、微笑を浮かべていた。こんなに綺麗な死に顔があるのだろうか？今にも目を開きそうで、私は合掌しながら、涙が頬を伝っていくのを感じた。すすり泣く声、声にならない嗚咽が、静まった葬儀場にあふれていた。私はこんなに悲しい葬儀に出席するのは初めてだった。

初めて見るヨウコさんの両親は、疲れ切つて、涙もかれ果てていた。

父親は眼鏡をかけた背の高い男で、おそらく普段は精悍で、てきぱきとした仕事ができる男なのだろう。母親の方は、ヨウコさんに似たつややかな黒髪が印象的だった。

しかし、二人とも、終止無言で、うつむいていて、生気が全く感じられなかった。

愛する娘が、突然この世の中からいなくなったのだ。私の悲しみより、はるかに重く、深い悲しみが二人を包み込んでいるのだろう。

私はもう一度、ヨウコさんの死に顔を見た。もう涙はでなかった。心にぽっかりと開いた穴は、もう埋めることはできないだろう、永遠に。

私はヨウコさんに向かって合掌した。もう永遠にこの笑顔を見ることはないのだ。悲しいことだが、しかたがない。死は誰にも必ず訪れる。これは避けられないことなのだ。私は自分にそう言いきかせて、ヨウコさんの棺の前を離れた。

駐車場に戻ると、アスファルトからの熱気で、葬儀場がゆらゆら

と陽炎のように見えた。

私は考える。

何故。

おとといの夜だ。ヨウコさんは大量の睡眠薬、精神安定剤、アルコールを飲んで意識を失った。

明け方、母親が気づいた時は既に遅かった。ヨウコさんはそのまま意識を回復することなく、逝ってしまった。

私は昨日、ヨウコさんの親友のトモミさんからそのことを聞いた。トモミさんは声にならない声でやっと話してくれた。

何故。

今のところ遺書らしきものはないらしい。

信じられない。ヨウコさんと最後に会ったのは一週間前。自殺の前兆はまったく感じられなかった。

「今年の夏はどこか涼しいところに行きたいね」

私の頭の中にヨウコさんの声が蘇る。ちよつと鼻にかかった声。

ああ、あなたは。解からない。

私にはまったく解からない。私の知らない何か深刻な理由があったのだろうか。

私はヨウコさんのすべてを知っているわけではないが、私に相談できないことがあるとは思えない。

午後から会社へ行く予定だったが、仕事などできないだろう。私は会社へ電話して、休むことを告げた。

車に乗り込んで、エンジンをかける。

ヨウコさんの好きだったaikoが流れる。もう助手席にヨウコさんが乗ることはない。

かれ果てたはずだと思っていた涙が、また流れてくる。

もうあの悪戯っぽい笑顔は永遠に見られないのだ。

先ほど、死は避けられないから。

人間は必ず死ぬのだから。

しかたがないのだ、と自分に言いきかせた。

頭では解かっているつもりだ。そう、解っているつもりなのに、悲しい。切ない。

いっそのこと、もうすべて忘れたい。ヨウコさんの記憶をすべて消し去りたい。そう思ったりもした。

でも、浮かんでくるのだ。

ヨウコさんとの日々。

初めて会ったあの夜のこと。

初めてお酒を飲んだあの夜のこと。

まるで子供のようににはしゃいでいたヨウコさん。

ミツヤさんじゃないとだめなの。

そう言ったのだ。

いや、言わなかったかもしれない。でも感じた。ヨウコさんの心を感じた。

動物園にも行ったっけ。

ヨウコさんは動物が大好きだった。ウサギを抱きながら、ヨウコさんは笑っていた。

水族館でイルカのショーを見た。

ヨウコさんはやはり笑っていた。

ヨウコさんの悲しい顔を見たことはほとんどない。

でもいつか映画館で、悲しい映画を見たときは、涙を流していた。でもその時も悲しい表情ではなかった。うまく言えないが、本当に

悲しそうな顔は見たことがなかった。

ヨウコさんの怒った顔を見たことはほとんどない。

ヨウコさんは私の中では、いつでも笑顔で、無邪気で、子供のよ
うな純真さを持った、すばらしい女性だった。

ふと、昨日研究室で会った先生の顔が浮かんだ。

先生の言葉は幾分救われた。

しかし。

先生、つらいです。

私はそんなに弱い人間ではないつもりでしたが、もう壊れそうです。

やるせない思い。。。
言葉にできない切なさ。。。

今、ヨウコさんの記憶とともに、そんなものが私に襲いかかってくる。

葬儀が終わって、もう三十分以上もたち、駐車場にほとんど車も見えなくなった。

私はウインドウを開けて、空を見てみた。

今日の空も青く、雲ひとつない。ヨウコさんの死とは関係なく、空は青い。

私はゆっくりと、車を走らせた。今日は何もできない。ヨウコさん以外のことは、何も考えたくない。三十分ほどで、車は自宅のアパートに着いた。

サイトのこと

初夏の太陽をさけるため、私は迷路のような名古屋の地下街へ入った。地下街は冷房が効いていて、汗ばんだ肌が、すうつと冷えていくのがわかる。

トモミさんからメールをもらったのは、今日の午後だった。

トモミさんはヨウコさんと同じ職場で働いていた。年齢も近く、気があっていたようだ。

私もヨウコさんからトモミさんの話をよく聞いた。

私に話したいことがある。

メールは短文で、何か冷たい感じがした。トモミさんは私と同じ会社に勤めている。話したいことがあるのなら、会社で話すことは可能だ。

しかし、トモミさんは、会社どころか、会社のあるK市から電車で三十分以上もかかる、名古屋の喫茶店で会おうという。

私は一瞬戸惑った。何か会社では話せないことなのだろうか？

トモミさんがそこまでして話す内容というのは、ヨウコさんのことに違いない。

そしてそれは、かなり深刻な話なのだ。

喫茶店が近くなった。私は地下街から地上に出て、目的の喫茶店を探した。Googleマップで調べておいたため、喫茶店はすぐに見つかった。

建物は黒を基調とした無機質な感じがしたが、オープンテラスのある洒落た感じの店だった。

店に入って中を見ると、入り口のテーブル席にトモミさんがいた。私が入ってくるのに気付くと、軽く頭を下げた。私はトモミさんの前の席に座り、アイスコーヒーを注文した。

外はようやく暮れかけてきたが、梅雨入りしたばかりの湿気を帯びた空気は、まだねっとり私の体にまとわりついていた。

「こんにちは。わざわざこんなところまで来ていただいて、本当にすみません」

トモミさんは私が座ると、まずそう話した。

「いや、いいんだよ。最近名古屋の方に来る機会がなくて、たまには行ってみようかと思っていていたんだ」

「本当にすみません」

トモミさんはまた謝った。

「もう、一週間か」

私はぽつりと言った。ヨウコさんが死んでから今日で一週間が経った。

トモミさんはしばらく下を向いていたが、私の声で、頭を起こして話を始めた。

「ヨウコのことなんですけど、ミツヤさん、どこまで知っていますか？」

「どこまでって、どういうこと？」

「ヨウコが何故自殺なんかしたのか？その理由です」

それは私が聞きたいくらいだ。私は全く知らないのだ。

「ぼくは何も知らない。少なくともぼくの前では、そんな素振りは全くなかった。何かに悩んでいるなんていう感じは全くなかった」

「そうですか。ミツヤさんは何も知らないんですか」

トモミさんは小さな声で自分に言い聞かせるように言った。

「トモミさん、あなたは何か知っているの？であれば、教えてくれ。ぼくには全く解からないんだ」

私の声はだんだんと大きくなった。右隣のテーブルに座っていた若い男がこちらをチラッと見た。

トモミさんは、男を一瞥して、私の目を見ながら話す。

「私もあまり詳しくは解からないんです。もつと、ヨウコと話していれば、もしかしたら救ってあげることができたかもしれないのに」

「ヨウコは会社で、非難や中傷を受けていたみたいなのです」

「会社の中で？でもトモミさんもヨウコさんと同じ職場だろう。職

場でいじめがあったの？何故詳しく解からないの？」

私の嵐のような質問に、トモミさんはしばらく黙っていたが、ようやく重い口を開いた。

「裏サイトというのがあります」

「裏サイト？」

「ネットの掲示板みたいなものです。会社とは全く関係ないサイトです。そこで、そこで、私たちが働いている総務部のことがいろいろ書かれていたみたいです」

「みたいですから、トモミさんは見たことないの？」

「ちらつと、見たことがあります。でも、怖くて」

「怖い？」

「とてもひどいことが書いてあって。でも誰が書いているか、解らないんです」

「ヨウコさんはその掲示板を見ていたのか」

「そうみたいです。かなりひどいことが書かれていたみたいです。でも、私は気にしないでって言って」

トモミさんの声が嗚咽に変わる。

「言って、もっと言ってあげていれば」

トモミさんはハンカチを取り出して涙を拭いた。

右隣のテーブルの男がちらちらとこちらを見る。

「ありがとう、トモミさん。トモミさんのせいじゃないよ。そもそもそんな掲示板が原因かどうかもわからないし。トモミさんに気にすることじゃないよ」

私は泣いているトモミさんに優しく言った。

そうか、そんな裏サイトがあるのか。それでトモミさんは会社で会つのではなく、わざわざ遠く離れた場所を指定してきた。トモミさんは私と会っているところを見られて、掲示板にひどいことを書かれるのを恐れた。

私はトモミさんに裏サイトのアドレスを携帯に送ってもらおうよう頼んだ。

私とトモミさんは名古屋駅で別れた。トモミさんはI市なので、K市に住んでいる私とは電車の方向が逆だ。

私は考えていた。

裏サイト？

そんなものでいろいろ言われたくらいで、ヨウコさんが自殺するだろうか？

とにかく、その「裏サイト」を見てみよう。

トモミさんからメールが入ったのは、私がアパートに着く少し前だった。

私はアパートに帰り、エアコンを入れ、ビール飲みながら、しばらくテレビを見ていた。

なかなかサイトを見る気がしない。

まるでパンドラの箱を開けるような心境だ。

箱を開けてしまうとさまざまな災いが飛び出してきて、私は絶望を味わうのだろうか？

テレビを見てはいるが、まったく頭に入ってこない。

私は意を決して、携帯を持つと、トモミさんのメールに記されたサイトにアクセスした。

ブラウザが立ち上がり、通信が始まる。

しかし、表示されたのは、エラーメッセージだった。

「『ID：XXXXXXXX』は二〇〇八年六月XX日を持ちまして閉鎖いたしました」

トモミさんは知っていたのだろうか？

私はトモミさんにサイトが閉鎖されていることを伝えるメールを打った。

しばらくしてトモミさんから返信があった。

トモミさんはサイトが閉鎖されていることは知らなかった。

私はそれ以上詮索をやめた。

もう一度トモミさんに会い、確かめてみよう。

パンドラの箱は開かなかった。いや、開くことができなかった。
私は、ほっとした思いと、知りたいという好奇心が入り交じった
複雑な心境のまま、とりあえず、今日は眠ることにした。

いないひとからのメール

今年は空梅雨だった。

六月も後半になり、気温は上昇して、蒸し暑い日が続いたが、雨が降ることはなかった。

トモミさんと会った次の日、私は会社でやっかないな仕事をようやく片付けて、自分の席で、大きく伸びをした。

机の上を片付け、ウィンドウズをログオフして、ノートパソコンの画面を閉じた。

時刻は夜八時を過ぎていて、まわりの席の社員は既に帰社していた。

私は席を立ち、帰宅する。私のいる品質管理部の部屋のとなりにはヨウコさんのいた総務部の部屋があった。帰る時に、ヨウコさんの席の後ろを通る。

ヨウコさんの席は、まだそのままになっていた。ヨウコさんの使っていたパソコンもそのまま机の上に置いてある。

おそらくそのうち誰かがヨウコさんの荷物を整理するのだろう。私はやるせない気分になった。

会社の重厚な門を通り、駐車場に向かう。私は車に乗り込み、エアコンをつけた。

あたりは暗くなり始めていたが、アスファルトからの熱気はさめない。車内はむっとするような空気で充満されていた。

会社から自宅までは車で三十分程度だ。ようやくエアコンが効きだし、体の汗がひいたところ、自宅のアパートに着く。

真っ暗な部屋に入ると、またむっとした熱気に包まれる。私は今度部屋のエアコンをつける。

私はそんなに暑さに弱いというわけではないが、都会では、夏のエアコンは必須だ。都市全体が熱気に包まれている。熱気を冷やすために冷房が入れられ、冷房装置が熱気を発する。悪循環だ。

ただ、私にはどうしようもない。私は私の快適のためにエネルギーを使う。一度快適な生活を手に入れた人間はそれを手放すことはできない。

私は冷蔵庫から缶ビールを取り出し、PCの前に座り、プルタブを開けた。

ビールを飲みながら、メールをチェックする。

一瞬、手に持っていた缶ビールを落としそうになった。

受信箱に二通のメッセージが届いていた。その一通は、なんとヨウコさんからだった。送信日時は六月十七日、今日の朝だ。

ミツヤくんへ

最近、忙しくてなかなか会えないね。

携帯でメールしようかと思ったけど、長くなりそうなので、パソコンへ送ります。

本当は会って話したいのだけど、まず、メールを書きます。

わたしは今ちょっと悩んでいます。

まあたいしたことではないんだけど、なんて言うかな、ネットの掲示板があつて、会社のことがそこに書かれています。

書いてあることは、ほとんどが悪口。

書いた人は解かりませんが会社の人だと思えます。だって会社の人が知らないことが書いてあるんだもの。

わたしがそれを知ったのは、ある人から、あんなことが書いてあるよつて言われたから。

見てみて、驚きました。あることないこと無茶苦茶です。

普段普通に仕事しているまわりの人が、ネットにそんなことを書いているなんて、人間が信じられなくなりました。

詳しくは今度会ったときお話しします。今年の夏休みは

メールはそこで途切れていた。

いったいどういうことだ。ヨウコさんは一〇日前に死んだはずではなかったのか。

私は呆然として、しばらくパソコンの液晶画面を見つめていた。

ヨウコさんが死んでから、一〇日後に届いたメール。

何故？そんなことがありえるのか。

一瞬、ヨウコさんはまだ生きているのではないかと思ってしまうた。

いや、そんなはずはない。ヨウコさんの葬儀で最後の別れをしたばかりではないか。もう永遠に会えないと自分に言いきかせたではないか。

考えられることは、ヨウコさんがメールを送信してから、何らかの理由で、メールが途中で止まっていた、つまりメールサーバなどのトラブルなどが考えられる。

もうひとつは、プログラムなどを組み込み、今日の朝、メールを送信するようにした場合。こういうことができるのか？

まだある。考えたくはないが誰かがヨウコさんを装って、私にメールを送信した。

しかし、どの場合にしてもメールの文章が途中で終わっているとということが、気になる。

それになぜそんなことをする必要があるのか？

時刻は午後九時になるうとしていた。

私は迷惑を覚悟で、トモミさんの携帯に電話をすることにした。とにかくこの事態を伝えたい。

トモミさんは三コールくらいで、電話に出た。

「あ、トモミさん、僕、ミツヤだけど」

「はい、何か」

突然の私からの電話で、トモミさんの声がうわずっていた。

私からトモミさんに電話するのは初めてのこともかもしれない。

「実は、今朝、ヨウコさんから、メールがきた。パソコンのメールだ」

「今朝？」

トモミさんは私の言っていることが理解できなかったようだ。

「そう、今朝きたんだ。トモミさんの方にはきていない？」

「」

トモミさんからの答えはない。しばらくの沈黙の後、トモミさんは叫ぶような声を出した。

「でも、でも、ヨウコは」

「そうなんだ。おかしい。こんなことはおかしい」

「私の方にはきていない。でも本当に？そんなことが？メールには何が書いてあったんですか？」

トモミさんはかなりシヨックを受けているようだった。

「メールの内容はやはり裏サイトのことが書いてあり、ヨウコさんも少し悩んでいるようだった。だけど書きかけなんだ。途中で終わっている」

トモミさんからの応答はない。

「とにかくメールについて、僕はもう少し調べてみる。本当にヨウコさんからのメールなのか？誰かがいたずらでこんなことをするんだったら、僕は、そいつを許せない」

最後の方は少し言葉が強くなってしまった。

しかし、どうして調べよう。私のもとについた一通のメール。これからどんなことが解かるのか？私には皆目検討がつかなかった。

駅から大学までは、だらだらとした坂道を上がっていく。

私はナップサックを肩にかけ、とぼとぼと歩き出した。

良く晴れた土曜日の午後。駅の北口にはほとんど人がいない。

気温は三十度を少し越えている。

大学構内には、講師等の関係者以外の車は基本的に駐車することはできない。私は先生に会いに行くときは電車を使うことにしてい

た。

歩きながら、昨日受信したヨウコさんからのメールのことを考えていた。

あのメールに対してどのような解釈が可能なのだろうか。いくつかの解はある。しかし、その解に対しての理由付けができない。

私は先生に会って、その理由を見つけようと思い、やってきたのだ。

大学に行くころには、私のシャツは汗でびっしょりと濡れていた。ハンカチで汗を拭いながら、私は先生のいる研究室に向かった。

研究室のある建物に入り、先生の部屋のドアをノックする。返事はなかった。私はドアを開け、中に入る。

先生は不在だった。先生の机にある液晶モニタにはスクリーンセイバーが映っていた。

エアコンが効いている。先生は少しの間、席を外したただけだろう。私は研究室のパイプ椅子に座って、少しの間待つことにした。

数分すると、ノックもなしに、乱暴にドアが開けられた。

「先生、あら、いないのか」

そこには、金髪で黒いサングラスをかけ、黒いシャツを着た男が立っていた。

金色のネックレス。右耳にはシルバーのピアスが光っていた。

とても先生の研究室の学生だとは思えなかった。

「ところで、あんた、誰？」

男はしばらく研究室の入り口に立っていた。

背丈はそれほど高くないが、がっちりとした胸板が黒いシャツの上からも解かる。

サングラスのため表情はよく解からないが、彫りの深い顔立ちをしている。先ほど彼が日本語を話さなかったら、私は欧米人だと思っていたかもしれない。彼は私の応答を待っているようだ。

私はパイプ椅子から立ち上がって言った。

「僕は先生の友人で、今日はちょっと話があつてきたのだが、先生

は留守のようなので、ここで待たせてもらっています。君は先生の研究室の学生？」

男は何も言わずに研究室に入ってきた。そして先生の机の前に立ちこついった。

「俺は学生じゃないよ。先生の親戚」

男が私に近づくと、甘い香りがした。何か香水でもつけているのだろう。

「サンタっていう名前なんだ。たまに遊びにくる」

そう言うとサンタは先生の椅子に腰かけて、私の方を向いた。

私はあらためて、サンタの顔を見た。

短く刈った短髪は白髪に近い金髪。

黒いサングラスの下には形のよい鼻。薄い唇。ハーフだろうか？

一〇代のようにも見えるが、堂々とした態度と落ち着いた話し方から、もっと歳を取っているようにも思える。

「で、あんたは何ていう名前？」

サンタがぶつきらぼうに言う。

「ああ、僕はミツヤといいます。時々先生と話したくて、休日に研究室に来るんだ」

「先生は学食に行ったから、しばらく帰ってこないよ」

そう言うとサンタは先生のデスクトップのマウスを動かした。いくつかのウィンドウが表示されていた。

サンタはキーボードに向かい、何か入力しはじめた。まるでピアノでも弾くような、滑らかかキータッチに一瞬、私は見とれた。

「俺は先生に頼まれて、やっかいなウイルスを駆除しにきたんだ」

サンタがエンターキーを押すたびに、ウィンドウの中をメッセージが流れる。サンタは一瞬動きを止めて、そのメッセージを見て、別のウィンドウにまたコマンドを打ち込む。

次々とウィンドウが消えて、現れる。まるで花火を見ているかのようにだった。こんなに優雅にコンピュータを操作する人を見たことがない。

私はしばらく見とれていた。

「大学のコンピュータに新種のウイルスが新入したのは昨日の朝。先生のUnixに感染したのは、おそらく昨日の二時二十分三秒。このウイルスはまったくの新種。駆除方法はまだ確立されていないんだ」

サンタはキーボードを操作しながら話を続けた。

「先生から昨日電話をもらったけど、ネットから遮断しているんでリモートでは何もできなかったんだ。で、今日こうしてやってきて退治してるんだけど、結構上手く作ってあるよ。このウイルス。そもそもUnixに入り込むだけでも大変なんだ。セキュリティホールは少ないからね」

私はコンピュータウイルスについては、あまりよく解からないが、このような男が解決できる問題なのだろうか？

「君は、その。コンピュータ関係の仕事をしているのか？」

サンタは液晶ディスプレイを見ながら、カチャカチャとキーボードを叩いている。

「まあ、たまにはそんなこともするけど、専門じゃないな。えーと、これで削除完了。他に転移は ないな」

そういうと、ディスプレイのウィンドウがすべて閉じていく。やがて画面は真っ暗になった。

「一応リブートして、問題がなければ終わりだな。削除プログラムも作ったし」

サンタは椅子をくるりとまわして、私の方を見て、ニツコリと笑った。

「今回のやつは、少し凝っていて予想以上に時間がかかった。こいつを作ったやつ、結構センスあるな。そういうセンスを何故ウイルスなんかに使うのか、さっぱり解からん」

サンタはそう言うのと立ち上がり、研究室の隅にある冷蔵庫へ向かい、缶ビールを二本取り出して、私に一本渡した。

「ひと仕事したので、喉が渴いた。ミツヤさんもどうぞ」

私はサンタが差し出したビールを受け取った。サンタはビールを開け、ゴクゴクと喉を鳴らして飲み出した。

そもそも先生の部屋に冷蔵庫なんてあったのか？私は全然気づかなかった。それに先生はビールなんて飲まない。このサンタという男が持ち込んだのか？

「ミツヤさん、シャツがびっしょりだよ。汗かいて喉渴いているんじゃない。遠慮なくどうぞ」

私はしかたなくビールを開け、一口飲んだ。

「ミツヤさんは、先生に何の話をしにきたの？」

黒いサングラスの奥から、サンタの瞳が見えたような気がした。

私は彼に吸い込まれていくような不思議な感覚を覚えた。先生はまだ来ていない。

次の瞬間私は思いもしなかった言葉を発していた。

「サンタ君、君はネットワークとか電子メールのことに詳しいの？」

サンタは、何も言わなかった。

「いや、ちよつとそんなことで先生に相談しようと思って
何でもない。やっぱり先生が来るまで待つよ」

「ミツヤさん、先生にインターネットの接続の仕方とか、メールの設定を聞くつもり？」

あきれたようにサンタが言った。

「いや、そんなことじゃないんだ。ちよつと不思議なことがあったから」

サンタは言う。

「ミツヤさん、あんた仕事何やってるの？」

「仕事？普通のサラリーマンだよ」

「サラリーマンは仕事じゃないでしょ。会社で何の仕事をしているの？」

「ああ、会社では品質管理の仕事をしている。パソコンは使っているがそんなに詳しくないんだ」

「ふーん、その不思議なことって、どんなの？」

「いや、いいんだ。また今度先生がいるときに話しくるよ」
サンタは立ち上がって言った。

「俺さ、不思議なことって言われると、ちょっと聞いてみたくなるんだ。先生が来るまでに俺に話してみないか？おそらく、俺に話せば、不思議なことは不思議でなくなるよ」

その自信はどこからやってくるのだろう。今日初めて会ったばかりで、まだほとんど会話もしていない。確かに先ほどコンピュータ操作する姿は専門的に思えた。

しかし、ついさつき会ったばかりなのだ。ヨウコさんのことは、ついさつき会ったばかりの、この奇妙な風貌の男に話すような内容ではない。

サンタはサングラス越しに私を見つめているようだった。私はまた彼の中に吸い込まれていくような不思議な感覚を覚えた。

私は何かに取り付かれたようになり、パイプ椅子をサンタの前に置き、ビールを飲みながら、この不思議な男にヨウコさんからのメールの話始めた。

私はヨウコさんが自殺したこと、裏サイトのこと、そして昨日届いたヨウコさんからのメールのことを淡々と、この不思議な男に話した。

サンタはビールを飲みながら、無言で私の話を聞いていた。私は時々サンタの顔を見ながら話していたが、サンタはほとんど表情を変えなかった。

話し終えると、サンタはしばらくうつむいてじっとしていた。

「サンタ君、そういうことなんだ。死んだはずのヨウコさんからメールが届いた。これはどういうことなんだろう。もしかして、もしかして彼女は、まだ生きているのか？それとも」

「それとも、天国からメールが届いたとも言っつもの？」

サンタは立ち上がり、冷蔵庫に向かった。

「ミツヤさんも飲む？」

サンタは冷蔵庫から二本ビールを取り出し、先生の席に座って、

私にビールを手渡した。

「ミツヤさん、ヨウコさんからのメールのヘッダ、見た？」

「ヘッダ？」

「ヘッダ知らないの？」

「ああ、メールの最初につけられている？」

「そう、電子メールにはヘッダが必ず付く。それを見ればそのメールがどういう経路を辿って届いたのか大体解かる」

「いや、それは、見ていない」

「メールソフトは通常ヘッダをすべて表示していない。見えるのは件名、差出人、あて先くらいだよ。だから偽装されていても解からない」

私は何も言えなかった。

「だからすべてのヘッダを見てみて。特にReceivedっていうヘッダ。これがヨウコさんの生きているころ来たメールと違っていたら偽装されているかもしれない」

「その、偽装なんてできるのか？」

「まあ、やろうと思えばできるよ。結構簡単にね」

サントは淡々と言った。

「でも、誰が？」

「ミツヤさん、まだ偽装と決まったわけじゃないよ。おそらくそのメールは偽装なんかじゃない。ヨウコさんのパソコンから発信されている。ただ発信者はヨウコさんじゃない」

「どういうこと？」

「おそらくヨウコさんはパソコン、たぶんWindowsだと思うけど、を起動時にメールソフトを起動する設定をしていた。メールソフトは起動すると送受信を自動的に行うようになっていた。家族の誰かがヨウコさんのパソコンの電源を入れたんじゃないかな。ミツヤさんに送る予定だった書きかけのメールが見送信のまま保存されていて、それが送信された。おそらくメールの謎の答えはこれだ」

私はあっけにとられた。サンタの話には説得力があった。それが真実だと思えた。

「俺の話は想像だよ。真実はヨウコさんのパソコンを見なければ解からない」

サンタは私の心を見透かしている。まるで超能力者のようだ。

「俺にはそのメールより、裏サイトの方が気になる。最近、ネットいじめなんて陰湿なものもあるからね」

サンタは二本目のビールを飲み干した。

「ヨウコさんのパソコンがあればほとんど解決するのだけど、それはちょっと無理かな。ミツヤさん、その裏サイトのアドレス教えてよ」

「解決つて。何が解決するんだ。君に何が解かるんだ」

私はサンタがあまりにも淡々と、まるで推理小説に出てくる名探偵のように話すのにちよつと苛々していた。

ヨウコさんの死は現実だ。この男はまるで小説かドラマのようにヨウコさんのことを話す。

「ミツヤさん、すべてだよ。すべてが解かるんだ。ヨウコさんが何故死んだのか？何故死ななければならなかったのか。それが解かる。私は携帯を取り出して、トモミさんからのメールに記された裏サイトのアドレスを見せた。

サンタはしばらく私の携帯の画面を見ていた。

その時、私の後のドアが開いた。

「サンタ、おまえ、ここで何をしておる」

振り向くと、先生が立っていた。

「やあ、先生」

サンタは先生を見ると、明るくそう言った。

先生はつかつかとサンタの前に歩いてきた。そしてビールの空き缶を手にとって目の前に持ってきてこう言った。

「アルコール分五%。アルコールが脳細胞を破壊することが解からんのか。まったくこんなものを飲みおつて」

先生はサンタの飲んだ缶ビールを乱暴に机の上に置いた。

「まあまあ、先生、たまにはいいでしょ」

「おまえはいつも飲んでおる。それにおまえは未成年だろうが」

先生は厳しい口調で言った。

サンタは未成年だったのか。私は少なくとも二十代後半に見えた。

私はその会話を聞いていて、少し気まずくなった。

「おや、ミツヤ君。来ていたのか」

ようやく先生が私に気づいて言った。

「はあ、どうもすみません。おじやましています」

先生は私が手にしている缶ビールを見ながら言う。

「サンタが勧めたのじゃろうが、アルコールは脳によくない。程々にしておくべきだ」

「はあ、すみません」

私は手に持った缶ビールを机の上に置いた。

「サンタ、そこをどかんか。いつまでわしの席に座っておる」

サンタは何かぶつぶつ言いながら、先生の席からたった。先生は自分の席にどっしりと座った。

「先生、元々は先生がコンピュータがおかしいって言うんで来てやったんだぜ。ここで何をしておるってのはないんじゃない？」

「で、コンピュータは回復したのじゃろう。だから何故いつまでもここにおるんじゃない」

「いや、帰ろうとしていた時に、この人、えーとミツヤさんだっけ、といるいと深刻な話をしていたんだ。そうだよね、ミツヤさん」

サンタはいきなり私に話題を振ってきた。私はどきまぎしながら答えた。

「ええ、ちょっと込み入った話がありました、このサンタ君に聞いてもらったところですよ」

「ほう、それはどのような話だ？」

先生が私に聞く。

私が話そうとすると、サンタが割り込んだ。

「先生、ミツヤさんの話は、俺が聞いてほとんど解決したよ。だからもう先生に話すことはないと思うんだ」

先生はサンタの方を、一瞥して言った。

「このサンタという男はまだ人間的に未熟だ。まだ物事の本質がまったく解かっていない。だから過度な期待はしない方がよい」

先生はサンタの方を見ながらそう言った。

サンタはまた何かぶつぶつ言っていた。

「じゃあ、俺はこれで帰りますよ。先生セキュリティにはもう少し気をつけた方がいいよ」

そう言ってサンタはドアの方に向かった。

私はこのサンタとう男に興味を涌いた。いったい先生とはどういう関係なんだろう。

「先生、私は今日はこれで失礼します。またあらためてお伺いします」

そう言って、私はサンタと一緒に先生の研究室を後にした。

暴走する少年

私はサンタの後に続いて薄暗い廊下を歩いた。

先生の研究室がある建物から外に出ると、初夏の日差しがまぶしい。

サンタは何かぶつぶつ言いながら私の前を歩いていた。私が声をかけようとした時、サンタが振り向いて言った。

「ミツヤさん、場所変えてさっきの話の続きをしようか？」

「うん、いいけど」

私が返答すると同時にサンタは言った。

「じゃあ、決定だ。どこか涼しくてビールが飲める所へ行こう」

サンタはスタスタと駐車場の方へ歩き出した。私も慌てて後に続いた。

大学の駐車場は思ったより広く、その端はゆらめいていて見えにくい。サンタは自分の車を止めた場所を思い出せないらしい。

「おつかしいなあ。このあたりに止めたはず、ああ、あった」

見ると真紅の車高の低い車があった。私は車にはそれほど詳しくはないが、めったに見ることのない車種だ。

「そうそう、今日はこれで来たんだ」

カタツとドアのロックが解除された音がした。

「ミツヤさん乗ってよ。あれ、これ左ハンドルだった」

サンタは左側の運転席のドアを開けた。

「サンタ君、これって……。なんかすごい車だね」

「そう？車のことはよく解からないんだ」

助手席のドアを開けると、本皮の匂いがした。私は腰をかがめて、この低い車に乗り込んだ。

サンタがキーをひねると、背後から心臓をえぐられるような音がした。

「ちょっと煩いけど、我慢してね」

そう言うと、サンタは車を発進させた。
クオーンという甲高いエンジンの音とともに、私はシートに押し付けられた。

「ちよ、ちよっと」

私は慌ててシートベルトをしめた。

あつという間に車は駐車場を出て、大学の前の国道を突っ走っていた。

サンタがシフトアップする。

背後のエンジンが振動し、また甲高い音が響く。

景色が猛スピードで流れる。

ウインカーの音がかすかに聞こえた。その瞬間、今度はフロントガラスに頭を突っ込みそうになるくらい、車は減速した。

吉野家のオレンジ色の看板が目前に迫ってくる。

「ちよ、ちよっと」

私は息ができない。車のリアが少し滑ったような感じで左折した。私はここまで来て、ある重要なことに気づいた。

本当は車に乗る前に気づかなければいけなかったことだ。

「サンタ君、君、さっきビール飲んだよね」

サンタはとぼけたように言う。

「飲んだよ」

「飲酒運転だろ、これ。まずいよ。とにかくどこかに車止めてよ」

「そうか。そうだな。じゃあ次のパーキングに止めよう」

また、車が加速する。爆音を響かせ街中に入っていく。

「だから、だめだって。そんなスピード」

この男はまったく解かっていないようだ。私は心拍数が上がっていくのを感じていた。事故でも起こしたら、とんでもないことになる。

「ああ、あそこに駐車場があった」

車のスピードが落ちて、ようやく普通に呼吸ができるようになった。

サンタは無造作に真紅のスポーツカーを駐車場に止めた。おそらくサンタの車は何千万もする高級な車だろうが、まるで営業用の軽自動車のような扱い方をした。

「さて、居酒屋でも行きますか？」

先生はサンタは未成年だと言った。私は厳格な人間ではないが、この男に深入りするのが少し怖くなった。しかし、一方ではこの男に何か不思議な魅力を感じた。

少し迷ったが、ここまで来てしまっただけではしかたがない。私は結局サンタと一緒に歩き出した。

時間は午後四時を少し過ぎたころだと思う。

初夏の太陽はまだ高く、街は生温かい空気に包まれていた。

サンタが車を止めた駐車場は、街のはずれにあり、周りには住宅が多く、ビールを飲める店が見つからない。我々は歩いて街中に向かっていった。

「もう少し、街中まで車で行けばよかつたな」

歩きながら、サンタがポツリと言った。この男は飲酒運転のことをまるつきり反省していない。本来、大学から歩くべきだったのだ。私は先ほどの暴走とも言えるサンタの運転の恐怖からようやく開放され、ほっとしていた。この男はいつもあんな運転をしているのだろうか？

サンタの顔を見る。サングラスをしているので、目立たないかもしれないが、顔色は正常だ。酔っているとは思えない。サンタの足取りは軽やかで、これも酔っているとは思えない。

「サンタ君、君、酔っているの？」

私は横を歩くサンタに聞いてみた。

「は？」

サンタは立ち止まって言った。

「酔ってるって？俺が？ビール二本で？」

サンタはニヤニヤと笑っていた。

「ミツヤさん、悪いけど、俺、ウイスキーボトル一本あけても、血

中アルコール濃度はほとんど変化しないんだよ。そういう体質なんだ」

真偽は解からないが、サンタはそう言い切った。私は自信満々に言うサンタを見て、世の中にはそういう体質もあるのか、とってしまった。

「じゃあ、君は、いつもあんな運転をするのか？」

「あんな運転って？」

「いや、だから、すごいスピード出したでしょ。出しすぎだよ。こんな狭い道で」

「そうでしたか。そうかな？」

サンタは納得いかないらしく、何かぶつぶつ言っていた。

三十分くらい歩いただろうか？ようやく我々は街の繁華街に入っ

た。しかし、まだ時間が早く、居酒屋、焼鳥屋などの店はあいていない。

「焼き鳥食いたいけど、歩くのも疲れたな」

そう言うサンタの意見を尊重して、我々は生ビールの飲めるイタリアンレストランに入ることにした。

そのレストランは街の中心部からやや離れたデパートの地下にあった。

西に傾いた太陽が、ようやく夕暮れを演出しはじめたころ、我々は冷房の効いたレストランに入った。

そのイタリアンレストランは五十名くらい収容できるキャパシテイがあつたが、お客は我々を含めて、二、三組くらいだろうか。まだ時間が早いためか、空いていた。

私とサンタは入り口のテーブル席に座り、ビールと適当につまむものを頼んだ。

サンタがメニューを見ながら、あれこれとウェイターに注文していた。

デパートの地下には、食材を売る売り場があつて、我々のテーブ

ルの窓越しに、その景色が見えた。ちょっと洒落た感じの売り場を歩き回っている人がわずかに見えた。

私がぼんやりとそんな風景を見てみると、ウェイターがビールを運んできた。

グラスに注がれたビールはわずかばかり泡立っていた。

「本当はジョッキがいいんだけどね」

サンタはそう言って、サングラスを外し、グラスを私の方に向けた。

サングラスを外したサンタの顔は欧米人のように彫が深く、瞳はやや薄い茶色だった。

誰かに似ているな。

私は一瞬そう思った。が、それが誰なのかは解からなかった。

私はビールのグラスを手にとって、サンタのグラスに合わせた。

カチリと硬質な音がした。

サンタは喉を鳴らしながら、半分ほど飲んだ。私もそれに続いて、グラスに口をつけた。

私はサンタとヨウコさんの話をする前に聞いておこうと思っていた。サンタがグラスをテーブルに置くと、まず私から話し出した。

「サンタ君、君はいつたい何者なんだ？」

そう、ついさっき、サンタと出会ってから、ずっと感じていた疑問、それを率直にぶつけた。

サンタは茶色の瞳で、私の方を見て言った。

「先生の親戚」

私はすかさずに言う。

「いや、だから、そうじゃなくて、君は、学生なのか？」

「学生じゃないよ。学校には行っていない」

「それじゃサラリーマンか？」

「サラリーマンじゃないな。会社には行っていない」

サンタはニヤニヤしながら答える。

「じゃあ、君は普段何をやって生活しているんだ」

サンタは相変わらずニヤニヤしている。

「ミツヤさん、人間は学生とサラリーマンだけではないよ。俺は俺なんだ。もうそんな話どうでもいいじゃん」

サンタがめんどくさそうに言った。

「いや、僕は今日、先生が人を叱るのを初めて見た。先生は自分の研究室の学生にもあんな接し方はしないんだ。君は」

私ははっとしていた。

そっだ、サンタは先生に似ているんだ。

先生を若くしたら、サンタのような顔になる。サンタがさっきまでサングラスをしていて、私はまったくそれに気づかなかった。

「先生の親戚って、まさか、君は先生の子供か？」

私の真剣な問いかけにサンタは笑いながら言った。

「違うよ、ミツヤさん。先生は独身で子供はいないよ」

そっか、そっだな。

しかし、サンタは先生によく似ている。

「よく似ているって言われるけど、息子じゃないよ。孫でもない。

俺は俺なんだ」

サンタは繰り返して言った。

「俺は俺で、何もやっていない。家が大金持ちなんだ。だから何もやらないでも困らない。以前、先生の論文を読んで、ちょっと興味を持って、いろいろとメールで質問してみたら、いつの間にか先生と仲良くなっていた。そんな関係だよ。自己紹介はこれでいい？」

サンタは私の方を見ながらニコニコしていた。

「もうひとつ、聞いておきたい。君は今何歳だ？」

私は最後の質問をサンタにした。

「そっだな、そっいえば先月十五歳になった」

サンタはポツリと言った。

十五歳だと。

私はあきれて、しばらく口を開けたまま、サンタを見つめていた。サンタがグラスビールをあけたところ、ウェイタが食べるものを運

んできた。

ちよつと豪華なピッツア、パスタ、ウインナーなどの皿がテーブルに並んだ。

サンタは二杯目のグラスビールを注文していた。私のグラスにはまだ半分くらいビールが残っていた。

私は先ほど、サンタの年齢を聞いて、しばらく沈黙していた。しかし、サンタが二杯目のビールを頼んでいるのを、特に止める気はしなかった。彼が見た目とても十五歳には思えなく、また、この男に何を言っても無駄のような気がした。

少なくとも、この男は私の常識の範囲外、異質な存在だ。大人びているなどという範疇を完全に超越している。私はサンタの話聞くまで、少なくとも彼の言動、振る舞いは二十代後半に見えた。もう彼のことを詮索するのをあきらめていた。

サンタは二杯目のビールを口に含み、ピッツアを頬張り、パスタにフォークを伸ばしていた。

私も、ピッツアを一切れ食べた。とろりとしたチーズの濃厚な味覚とベーコンこんがりとしたカリカリした食感。味は私の好みだった。

ひととおり、つまみを食べた後、サンタはポケットから、手のひらより少し大きな機械を取り出した。それは私が持っている携帯電話より、少し大きなサイズのシルバーの、電子辞書みたいなものだった。

サンタがと端末のふたを開けると、中には液晶ディスプレイと、小さなキーボードがあった。サンタはその小さなキーボードを器用に操作して、何かを入力した。そしてしばらく液晶のディスプレイを見ていた。

「ふうん、ページは見つからないね。掲示板はなくなっている。でもサーバ自体はまだ、生きているようだ」

サンタは独り言のように言った。

「サンタ君、その、機械って、携帯なの？」

私はサンタに聞いた。

「いや、携帯より、ちよつと高級なマシン。モバイルPCだとちよつと大きくて持つのかさばるから、このようなPDAを使っているんだ。日本じゃあまりメジャーじゃないけど、ちよつとインターネットにアクセスするには、結構重宝してるんだ」

そう言つと、サンタは小さなキーボードにまた何か打ち込んだ。

サンタはしばらく無言で、かちやかちやとその小さなキーボードを操作していた。

「このサイトにはいろんな掲示板を無料で作成できるようになっている。レンタル掲示板だ。ミツヤさんにさつき教えてもらった裏サイト、誰かが作った掲示板んだけど、削除されていて見られない。この無料掲示板を作成できるサイトは『コスモス』っていう会社かな、いや個人かもしれないけど、そのコスモスっていうところが運営している」

「でも、掲示板が削除されてしまっているのだから、もう中身の確かめようがないよね？」

「いや、コスモスのサーバにはログが残っていると思う。おそらく完全には削除されていなくて、なんらかのデータはコスモスのサーバの中にあると思うんだ」

「じゃあ、コスモスの管理人に聞けば、教えてくれるの？」

サンタは私の方に微笑を浮かべながら言った。

「いや、それはたぶん無理だろうね。このコスモスつてのが、そもそも何者なのか解からない。極端な話、管理人が日本人とは限らないし、サイト自体、日本にあるのか、アメリカにあるのか、インドにあるのか、解からない」

私はそれを聞いて、ため息を吐いた。しかしサンタはすかさずこつ言つた。

「まあ、ちよつと見たけど、このサイトのセキュリティはたいしたことはない。このPDAじゃ無理だけど、ちよつと工夫すれば、サーバに侵入して、中を見るくらいならすぐにできそうだ」

「そんなことができるの？でもそれって犯罪じゃないのか？」

私は小声でサンタに言った。

「見つければ犯罪になるかもしれないね。でも世の中には何の侵入の痕跡も残さず、企業や国家のホームページを改竄するやつもたくさんいる。俺がやってもいいけど、めんどくさいから、知り合いのハッカーに頼むよ。おそらく一週間もすれば結果が解かるよ」

サンタは平然とそう言った。

「それよりも、前提知識として、ヨウコさんの職場環境、とくに周りの人間について聞いておきたい」

サンタは今度は真剣な表情で、私の目を見ながらそう言って、二杯目のビールを飲み干した。

「どこから話せばいいのかな」

そう言っつて、私はしばらくテーブルの上にある、ビールのグラスを見つめていた。

この少年は会社というものがどのようなものなのか、サラリーマンとはどのような人種なのか解かっているのだろうか？

私はサンタに聞いてみた。

「サンタ君、君は会社に勤めるということがどういうことなのか、解かるのかい？」

サンタは一瞬きよとした顔をしたが、すぐに笑顔になっつてこ

う言っつた。
「ミツヤさん、酷いな。いくら俺でもそんなこと解かるよ。会社に勤めたことはないけど、一般常識は持ち合わせているつもりだよ」
先ほどのサンタの行動を見ると、この男の一般常識はあ

てにならない。
「要するに、会社というのは学校と違うんっだつて、言いたいんでしょ。仕事は企業の利益のためにやるわけで、勉強じゃない。サラリーマンはその労働の対価として給料をもらう。そのへんの一般常識は解かっているよ」

さらにサンタは言っつ。

「企業の職場の雰囲気は、職種によって違うかもしれないけど、テレビのドラマや映画で見たことがあるし、何となく想像はつくよ」「そうか、それなら、話そう」

私はサンタに向かって、私の会社とヨウコさんの職場について話し始めた。

私の勤めている会社はトミタ自動車に関連会社になる。

従業員は一人弱で、自動車部品の製造企業では、まあ大きな方だ。私が入社したのはちょうどバブル景気が終わるころなので、もう十五年くらい前のことだ。

私は入社以来、品質管理の仕事をしてきた。不具合や不良を管理する、そして、それらを未然に防ぐための方法を考え、現場に適用する。そういったことをやってきた。今は一線を退き、品質管理の社内教育の担当となっている。

ヨウコさんは私より五、六年後の入社だと思う。最初は秘書室に配属されていたと記憶している。五年くらい前に私の働く品質管理部のとなりにある総務部へ転部した。

私の会社の総務部は、従業員のためのサポートをする部署だ。例えば、社員の使う社用車の管理、会議室の管理、備品の管理などを行う。

雑用係なんていう人もいるが、会社にはなくてはならない組織だと思っ。

総務部は五十人くらいの総勢組織で、ヨウコさんは総務一グループにいた。

総務一グループでは本社の備品の管理なんかをやっていたと思う。ヨウコさんはパソコンに少し詳しくだったので部内のパソコンの管理もやっていた。

総務グループの課長はハヤシという四十代の男性。元々は技術部で設計をやっていたらしい。ちょっと神経質で気難しいところがあるって、ヨウコさんから聞いたことがある。

グループのメンバーは、ヨウコさんを含めて五人いた。

まず、最年長が、トキタという四十歳の係長。この男はあまり評判がよくない。とにかく自分のやりたくない仕事はまったくやらない。それでいつもヨウコさんは苦勞していたらしい。

次が、三十歳半ばのコマツという男性。最近結婚したらしい。仕事はそれなりにこなして、解からないことはよく教えてくれると、ヨウコさんがいつか言っていた。

後は、トモミさんとヨウコさん、そして今年入った新入社員のみやもとという男性。このみやもとはちょっとオタクっぽいと、ヨウコさんは話していた。

「僕も時々となりの部屋を見たことがあるけど、普通の雰圍気だよ。みんな普通に仕事していた。まあ、普通っているのが君には解からないかもしれないけど」

私はグラスに残ったビールを飲み干し、サンタに言った。

初めての夜のこと

私がヨウコさんと初めて話したのは、四、五年前、春の雨が冷たく降る夜だった。

そのころ、私は会社の重要なプロジェクトに参加していた。全社の製品の品質を向上させるため、大規模なIT化を推進するプロジェクトだった。

私の職場に新しいリーダーが配属されてきた。社内ではかなり仕事ができるという噂の人物だった。私はそのリーダーのもと、業務プロセスを根本的に見直すということをしていった。

「革新的でなければならぬ。普通じゃだめなんだ。考え方を変えろ」

リーダーは毎日のように言っていた。私は毎日、夜遅くまで新たな業務プロセスを考えた。昼はプロジェクトメンバーとの協議、会議ばかりが続いた。

しかし、プロジェクトは思うように進んでいなかった。

私は日常の業務プロセスを変えることに抵抗を感じていた。IT化を実施すれば、本当に業務が効率化するのだろうか？本当に品質が向上するのだろうか？

私は中々IT化に賛成できずにいた。リーダーはそんな私にいらしていった。

「何故、そんな答えが出てくるんだ」

「言われたことくらいやってくれよ」

「まだできないのか。もういいよ」

それ以外にも、私の人格を否定するような罵声を浴びせられる日々が続いていた。

プロジェクトでは何も決まらず、半年が過ぎた。

毎日、夜遅くまで、残業が続いた。休日も十分に休めなかった。

私は疲れていた。

その日、夜遅くまで、プレゼンテーション資料を作成し、部屋の戸締りをして、会社の外に出ると、冷たい雨が私の額に当たった。雨は容赦なく、私の心の中まで濡らす。

ちよつと飲んで帰るか。

私は疲れていて、すぐにでも眠りたかったのだが、久しぶりの休日前で、ちよつと息抜きがしたかった。

歩いて、駅の近くの焼鳥屋でひとりビールを飲んだ。

その日もリーダーから、ねちねちと説教されて、私の気分はどん底だった。ビールを急ピッチであけた。

思うのは仕事のことばかりだった。

私は仕事ができないのだろうか？

精一杯やっているつもりだ。

これ以上、どうしろというのだ。

愚痴ばかりが頭をめぐる。

リーダーの考えていることが解からない。確かに頭の回転は速いと思う。しかし彼はリーダーには向かない。事実メンバーはいつも愚痴ばかりではないか。過酷な仕事を押し付け、ひとり入院している。

私はいつの間にかかなりの量のビールを飲んでいた。

焼鳥屋を出て、駅までの道をふらふら歩いた。

駅に着くと終電が出たところだった。私のアパートまでは駅二つの距離があり、歩いて帰るのは少し辛い。冷たい雨はまだやまない。私はしかたなく、タクシー乗り場に向かった。金曜日の終電後のタクシー乗り場にはタクシーを待つ人の列ができていた。私は十番目くらいに並んだ。

タクシーは中々やってこなかった。十分に一台くるか、こないかそんなペースだった。

ふと後ろを見ると、黒いコートを着たスラリとした女性が並ぼうとしていた。肩までの髪はストレートでつやつやしていたのが印象に残っている。

その女性は私の後ろで列の前方の方を見たり、道路の方を見たり、きよろきよろして、落ち着きがなかった。

誰かを探しているのだろうか。

そう思った時、その女性が話しかけてきた。

「すみません。タクシーを待っているのですか？」

女性の目は大きく、鼻筋が通っていた。顔は透き通るように白かった。

私が唖然としてみると、女性はもう一度言った。

「すみません。タクシーを待っているのですか？」

それがヨウコさんだった。

ヨウコさんは私の目を見ながら、わずかに微笑んでいた。

その笑顔は今でもよく覚えている。

あれ、どこかで見たことがあるな。

私は一瞬、そう思った。

ええ、そうです、タクシーを待っているのです、と私は答えた。

「すごい、混んでいますね」

ヨウコさんは驚いたように、そう言った。

考えてみると、タクシー乗り場の前から行列は続いているので、並んでいるのはタクシーを待つ人だということは、当たり前のことだ。後から聞いた話だが、ヨウコさんは、夜、タクシーに乗ったことがなかったらしい。

私は相当酔っていて、少し勘違いした。

この女性は、何故当たり前のことを聞いてくるのだろうか。

私に何かを期待しているのだろうか？

普段の素面の状態なら、決してそんな思いはしない。そう、私は酔っていたのだ。

「タクシーは中々来ないみたいだね。君、家はどこなの？」

私はヨウコさんにそう話していた。

話しかけられたヨウコさんも意外だったようで、えっ？という少し驚いた表情を見せた。

しばらく沈黙が流れた。

「わたしはK市の方だけど」

ヨウコさんは小声でそう言った。

私のアパートもK市の方だった。それで思わず言葉を発していた。

「K市のどの辺？」

「はずれの方、A市に近いかも」

ヨウコさんの答えを聞いた時、私の頭にある考えが浮かんだ。今考えると、何故そんな思いが頭をめぐったのか、解からない。

私はその日、車で出勤していた。車は会社の駐車場にある。ここから歩いて五十分くらいだ。ヨウコさんが酔っていないければ、私の車を運転してもらって、一緒に帰ることができるのではないか？

気づくと私はヨウコさんに聞いていた。

「君、車の運転できる？」

ヨウコさんは一瞬戸惑いを見せた。

しかし、次の瞬間、何かを思い出したような、明るい表情になった。

「あら、もしかして、ミツヤさん？」

今度は私が戸惑う。

私のことを知っているのか？

私は改めてヨウコさんの顔を見た。そしてようやく気づいた。

この女性は私の会社の総務部のヨウコさんだ。

私はヨウコさんの顔を見ながら、しばらく沈黙してしまった。

「わたしのこと知ってる？総務部のヨウコです。品質管理部のミツヤさんですよね？」

ヨウコさんは小さい子供の隠し事を見つけたような、いたずらっぽう顔を向けた。

私は小声で答えた。

「知っています。隣の部屋のヨウコさんですよ。偶然ですね」「私はどきまぎしてしまって、一瞬自分を見失った。」

「オートマの右ハンドルなら、たぶん、運転できると思うけど」

ヨウコさんは少し笑いながら、そう言った。

私はえっ！と声を上げてしまった。先ほどの私のやや下心のある問いがまだ生きていた。

「いい考えだと思う。タクシー代も浮くし。全然知らない人じゃないし」

ヨウコさんは、運転できるかという問いかけだけで、私の提案を理解していた。しかし、私はただタクシー代を節約したいだけで、ヨウコさんに声をかけたわけではない。

私の車は国産のありふれたセダンだった。もちろんオートマティックだった。

「僕の車は普通のセダンなので、ヨウコさんなら運転できると思う

」

私はつぶやくようにそう言った。

「じゃあ決まりですね。わたしがミツヤさんに乗つけて運転して、ミツヤさんをアパートまで送って、車はわたしの家に置いておきます。明日ミツヤさんが歩いて車をわたしの家まで取りに来る」

今考えると、この時のヨウコさんの言葉は不自然だった。私のアパートがヨウコさんの家から歩いて行ける距離にあることが前提となっている。事実そうだが、この時二人はほぼ初対面で、普通ならそんなことは知るはずもないのだ。

しかし、その時は、私はまるで魔法にかかったように、ヨウコさんの言葉に操られ、二人でタクシー乗り場を後にして、私の車のある会社の駐車場に向かったのだった。

ヨウコさんは私の車の運転席に乗り込むと、シートを前後に動かし、足を伸ばしてブレーキの位置を確認した。その後、背もたれを若干前に倒した。

私は助手席に座り、駐車場のわずかな明かりに照らされたヨウコさんの白い横顔を見ていた。

「じゃあ、出発します」

そう言うと、ヨウコさんはサイドブレーキを下げた。

車はゆっくりと走り出した。

会社の駐車場の周りの細い道を出て県道に入ると、街の街灯であったりが少し明るくなった。

ヨウコさんは何も言わず、運転に集中しているようだった。私は何か話そうかと思ったが、適当な話題が見つからない。沈黙の中、車は私のアパートのあるK市のはずれを目指していた。

「ミツヤさん、わたしのこと、知ってた？」
突然ヨウコさんが言った。

私はヨウコさんの質問の意味がよく理解できなくて、えっ？と言ったまま、しばらく黙ってしまった。

「だから、ミツヤさん、わたしのこと、どれくらい知っているの？」
ヨウコさんが、また聞く。

「えっと、元々秘書部ですよ。去年、総務部に転部してきて、一番奥の席に座っていて」

私は自分でも何を言っているのか、よく解からない。
「転部したのは去年じゃなくて今年の一月。まだ二ヶ月なので、総務部のこともよく解からないのです」

ヨウコさんは私の言葉をさえぎるように言った。しかし、顔は笑っていて、私の記憶違いに腹を立てている様子はない。

「そう、そうだ、今年になってからだったね」
私は慌てて、そう言い直した。

「ミツヤさんでも、酔ったりするんですね」
ヨウコさんは言う。

「時々、廊下ですれ違ったり、ロビーでよく打ち合わせをしているミツヤさんを見たけど、すごく真面目で、不器用で、融通性がなくて、不思議な人だと思っていました」

私はまた黙っている。このヨウコさんの発言はどうとらえたらいいのだろうか？

車は私のアパートの近所の細い道を走っていた。私のアパートが見えた。

「ああ、あそこだ。僕のアパートが見えた。この辺で」
しかし、ヨウコさんは車を止めようとしな。車は私のアパートを通り過ぎてしまった。

「ミツヤさんを見るたび、とても不思議な感じがしたんです。それで、いつかお話できたら素敵だなあと思っていましたんです」

ああ、こんなことがあるのか？

ついさっきまで、仕事のこと、上司のことで、気分はどん底だった。

ああ、神がいるのか？

どこからか天使が私に舞い降りた。

私は酔って夢を見ているのだろうか？

こんな素敵なお天使が、私のとなりになにかの間にいる。

運転しているヨウコさんの横顔を見ると、私は仕事のことなんかどうでもよくなった。

ただ、この素敵なお時間が続くことを願った。

しかし、神はもっと素敵なおプレゼントを私のために用意していたのだった。

車は、公園の脇の細い道に入って、しばらく走り、人気のない住宅街で停止した。

ヨウコさんは私の方を向いてこう言った。

「ここ、わたしの家なんです。ちょっとお茶でも出すので」

ヨウコさんがそう言いかけた時、私は慌てて言った。

「いや、そんな、こんな夜遅くに、悪いですよ。僕帰ります」

「今日は両親が旅行に出してしまって、誰もいないんですよ。ちょっと散らかっているけど、お茶でも飲んでいってください」

ヨウコさんは、そう言うと、エンジンを止めて車を降りた。

公園の街灯がヨウコさんのすらりとした姿をおぼろげに映し出していた。

私はどうしたらいいのか、しばらく迷った。こんな経験がないので、どのように振舞えばいいのか解からない。

お茶だけか。

それならいいか。ちょうど喉も渴いている。

せつかくヨウコさんが言ってくれたのだ。無下に断るのもどうかと思う。

お茶だけ、お茶だけ、私はそう思う一方で、それ以上のことを期待している自分に気づいた。

私は車を降りると、ヨウコさんに続いて、家の門に入った。ヨウコさんの家は、薄緑色をした四角い二階建ての家だった。まだ新しく、木の香りがした。

ヨウコさんが玄関の扉を開けて、ライトを点けた。玄関はそれほど広くなかったが、よく整理されていて、清潔な感じがした。どうぞ。

ヨウコさんは自分の脱いだヒールを並べながら、私の顔を見てにっこりと笑った。

「ごめんなさい。ちょっとリビングが散らかっているけど、座ってください」

十畳ほどのリビングには白いソファとテーブルがあった。私は失礼しますといいながら、ソファに腰を下ろした。

ヨウコさんはキッチンの方に行って、ブランデーとグラスを二つ持ってきた。

私はえつと言って、ヨウコさんの顔を見た。ヨウコさんは微笑みながらこう言った。

「ちよつと飲みたいんです」

ヨウコさんは二つのグラスに少しずつブランデーを入れた。

「氷、入れます？」

私はこれ以上ヨウコさんに動いてもらうのが申し訳なくなり、いえ、このままでと言って、グラスを合わせた。

コウコさんは優しくグラスに口をつけ、半分ほど飲んだ。私もそれを見ながら半分飲む。喉が熱くなった。

「わたし、あまりお酒のことは解からないんです。いつも父が飲ん

でいるの。時々わたしも少しだけ飲むんです」

ヨウコさんはちよっと鼻にかかった声で、そう言った。気のせい
かヨウコさんの白い顔が少し赤く感じた。それはまるで桜の花びら
のような色だった。

「ミツヤさん、今日はひとりで飲んでいたの？」

ヨウコさんはグラスをテーブルに置いて、髪をかき上げながら、
私の目を見て言った。その仕草は驚くほど艶かしく、私は理性を忘
れそうになる。

「ええ、ちよっと、なんか飲みたい気分だったんで」

私は答えるが、答えになっていない。心拍数は確実に上がってい
るだろう。

「うふふ、わたしも今日は飲みたい気分なんです」

「そう、じゃ、もう少し飲もうか」

私はブランデーのボトルを持って、ヨウコさんのグラスに注いだ。
リビングの窓の外から、雨音が微かに聞こえていた。

「わたしはね」

ヨウコさんが一口飲んで言う。

「待っていたの」

私は黙っている。

「待っていたの。ずっとずっと、こんな時が来ないかかって」

私は黙っている。

「でもね。願っていたわけじゃないの。必ずいつかはこんな時が来
るのは解かっていたから」

私はヨウコさんの顔を見た。ヨウコさんも私の顔を見つめている。
視線が絡まって、一瞬、あたりの景色がなくなり、ヨウコさんだけ
が存在した。

ごく自然な動きだった。しかし今考えるとその動きには無駄がな
かった。

いつの間にかヨウコさんの顔が私のすぐ近くにあり、私はその桜
色の唇に自分の唇を重ねた。

ヨウコさんの甘い香りと、ブランドーの香りが溶けあう。

ヨウコさんは私の頬を両手でそっと撫せて、小さく唇を開き、ゆっくりと舌を入れる。私もおそろのおそろ舌を絡める。

気づくと、私はソファーに仰向けになり、ヨウコさんは私の上に覆いかぶさるような体勢になっていた。

私はその後、どのような手順を踏んだのか覚えていない。気づくと私もヨウコさんもすべての衣服を脱ぎ捨てていた。

ヨウコさんは、私を握りしめ、私はヨウコさんを優しくさわった。ヨウコさんは驚くほど潤っていて、私はまるでヨウコさんに操られるかのようにその中に入った。

ヨウコさんはそれまでずっと目を閉じていたが、私が中に入ると、しっかりと目を開いて、私を見た。

私は夢中でヨウコさんにキスして、抱きしめた。

ヨウコさんの意識が、私の中に入ってくるのを感じた。

これは、ヨウコさんの心？

そう、わたしの心。

ヨウコさんの心がそう言った。

ひとつになった。

そう感じた。

私の中にヨウコさんがいた。ヨウコさんの中にも私がいた。

ひとつになった。

そう感じた。

リビングのエアコンの音が微かに聞こえた。

ヨウコさんは私のとなりで目を閉じていた。

私はヨウコさんの家のリビングの四角い天井を見ていた。

ミツヤさん。

ヨウコさんが小さい声でささやく。

ずっとずっと前から、

わたしがミツヤさんを知るずっと前から、

ミツヤさんに出会って、

こんなふうにはひとつになるって感じていたの。

今、感じたでしょ。

ひとつになったのよ。

ミツヤさんじゃないとだめなの。

ヨウコさんの言葉が、直接私の頭の中に入ってくる。

しかし、私は何故かそれがとても自然なことのように感じた。

夕暮れの街角で

レストランには仕事帰りと思われるカップルが多く目に付いた。男同士の組み合わせのテーブルは少ない。

私たちのテーブルの上に置かれたつまみはほとんどなくなっていた。

私は三杯目のグラスビールを飲みながら、ヨウコさんとの初めての夜のことを思い出していた。

サンタにはヨウコさんと出会ったいきさつを話した。ただ、あの夜結ばれたことは黙っていた。これまで誰にも言ったことはないし、そもそも十五歳の少年に言うのもどうかと思った。

サンタはヨウコさんの職場の話は熱心に聞いていたが、私とヨウコさんの劇的な出会いにはまるで興味がないうだった。

「ヨウコさんとトモミさんは、同じ職場になる前から友達なの？」
サンタはPDAを操作しながら、そう聞いた。

「さあ、どうだったかな」

私はヨウコさん交わした数々の会話を思い出したが、トモミさんとヨウコさんがどのように知り合ったかは解からなかった。

「たぶん、同じ職場になってから、仲良くなったんじゃないかな」
私は適当に言った。

「ふうん。ヨウコさんの職場の新社員のミヤモトって人、大学ではどんなことをやっていたのかな」

サンタは最後に残ったピッツアを皿から取り、顔を上に向けて、口に放り込んだ。

「いや、そこまでは僕も知らない。ミヤモトがどうかしたのか？」

「いや、言ってみただけ。まあ、いいや」

サンタはそう言つと、PDAを閉じて、ポケットに入れた。

「さあて、ビールも飲んだし、腹も膨れたし、そろそろ帰りましょ
うか」

「ああ、そつだな」

私が腕時計を確認すると、午後七時を回ったところだった。

私がテーブルの上に置かれた伝票を取ろうとすると、サンタが素早くそれを奪い取った。

「おい、サンタ君」

私が言うと、サンタは笑いながら言った。

「今日は俺が誘ったんだから、払いますよ。歳がどうのこうのっていうのはなしね」

私があっけに取られていると、サンタはサングラスをして、伝票を持ってレジに向かっていた。私は慌ててサンタを追いかけた。いくらなんでも十五歳の少年におごってもらうわけにはいかない。

サンタは財布を取り出し、支払いをすることだった。

「あら、財布ないや」

サンタは自分の服のあらゆるポケットを探っていた。

「やっぱり、ないな」

店員は心配そうな顔をしながらサンタを見つめていた。

「ははは、俺、金もってないや。ミツヤさん、悪いけど、払っていただけますか？」

サンタは私の方を見て笑いながらそう言った。

私は財布を出して、会計を済ませた。

「俺、今度払います。おつかしいなあ」

そう言っつて、サンタはまだポケットを探っていた。

「いや、いいよ。ここは僕が払っておくよ」

私はこのませた少年に、少しでも大人の自分を見せたくて、あくまでもさりげなく装った。

店を出ると辺りは暗くなり始めていた。街灯が歩く人々の顔を優しく照らしている。暑さは幾分やわらいで、どこからか涼しい風がふいていた。

私は歩道をサンタと歩いた。サンタは珍しそうに街の景色を見ていた。きよろきよろとしていて、落ち着かない。見た目は大人だが、

どこかにまだ少年の心が残っているのだろうか？

「サンタ君」

私は少し先を歩いているサンタに呼びかけた。サンタは向かいのちよつと不思議な形をしたビルを見ていたが、私の声に気づいて振り返った。

「サンタ君、君は本当に十五歳なのか？」

サンタは立ち止まり、私の方を向く。

「十五歳だと思うよ。さつきそう言ったでしょ」

「十五歳といえば、中学生だ。君は学校へは行っていないっていったけど、義務教育っていうのがある。親は何も言わないのか？」

私は説教をしようとは思わなかったが、この不思議な少年のことが気になって、ついそう言ってしまった。

サンタは私の方を見たまま、しばらく黙っていた。街灯の光がサンタの黒いサングラスを照らしていた。

「うん、いや、実は時々行っているんだ。全然行っていないわけではないよ。ちよつと特別な学校だけだね」

サングラスでサンタの目を見ることはできないが、どこか遠くを見つめているような気がした。私はもつとこの少年のことを聞きたかったが、口うるさいおじさんだと思われるかと思い、それ以上聞くのをやめた。

「サンタ君、君、車はダメだよ。飲酒運転どころじゃない。そもそも、免許がないじゃないか」

「ははは、そうだよ。今日はタクシーで帰ろうかな」

サンタは明るくそう言った。

「君の家はどこなんだ？」

「今は市内のマンションに住んでるんだ。ここからすぐ。だから車は置いていくよ」

私はポケットから財布を取り出して、五千円札をサンタに手渡した。サンタはお札を手に持ったまま固まったように動かない。

「ミツヤさん、このお金」

「君、財布がないんだろう。お金がなくなっちゃタクシーにも乗れないよ」

私は笑いながらそう言った。サンタは、ああ、そうかと頷いていた。この男は大人なのか、子供なのか解からない。

その後、私とサンタは無言で駅まで歩いた。近くの駅まで、歩いて五分くらいだった。

駅の入り口に着くと、サンタは私の方を向いて言った。

「じゃあ、ミツヤさん、今日は興味深い話が聞けて楽しかったよ。掲示板のこと、何か解かったらメールするから」

「ああ、何か解かったら、よろしく」

車で帰るんじゃないぞ　という言葉を読み込んだ。私は少年と話すことなどめったにない。この場合、もう一度注意しておくべきだろうか？

サンタはそんな私の心を見透かしたように、わずかばかり口元を動かし、言った。

「大丈夫だよ。ミツヤさん。タクシーで帰るから。タクシー乗り場はあっちだったよね」

サンタは左手を指差した。

「何なら、ミツヤさん、俺の車乗って帰ってもいいよ」
「とんでもないことを言う。」

私は苦笑いしながら、軽く手を振って、切符売り場を目指し歩き出した。

掲示板のロケ

ヨウコさんが死んでから、もう三週間がたった。

私は未だに何故彼女が自殺することになったのか、さっぱり解からなかった。

しかし、幾分気分も落ち着いてきて、ようやく仕事もまともにできるようになった。

今日、ヨウコさんの職場を見てみた。ヨウコさんの座っていた机にはまだノートパソコンが置かれていた。カレンダーと小さなメモ用紙があった。机の上はまだ彼女が生きていたころのままだった。

私はしばらくヨウコさんの机の前に立って、ぼんやりとヨウコさんの顔を思い浮かべていた。

何、ぼうつとしているの、ミツヤ君！

そんな声が今にも聞こえてきそうだった。私は心の奥から涙がやってくるのを感じて、ヨウコさんの席から離れた。

会社ではヨウコさんの死について、自殺であるとは報告されなかった。ヨウコさんの死因は急性心不全ということになっていた。もっとも、これはヨウコさんの場合だけではなく、会社は自殺ということを表立って公表することはない。

私はヨウコさんの席から離れて、ヨウコさんの職場を見ていた。

それはいたって普段どおりだった。まるでヨウコさんなんか最初からいなかったかのように平穏な風景だった。

人は人の死をいつまでも悔やんではいけけない。

人は必ず死ぬのだから。

人は人の死に必ず直面するのだから。

普段と変わらないヨウコさんの職場が私にそう訴えているように感じた。

ふと、総務部の入り口から、トモミさんが入ってきた。トモミさんは私を見つけると、軽く会釈した。私も会釈を返し、自分の職場

に戻った。

職場に戻って、出張旅費の清算をしようかと思っ
ている時だった。私の携帯にメールが入った。それは先週会
った、あのサンタからだ。

- - - - -

ミツヤさん、お元気？

裏サイトが見つかったよ。

テキストに落としたからPCの方に送るよ。

アドレス教えて

私は定時で会社を上がり、家路を急いだ。サンタには私の家のパソコンのメールアドレスを教えていた。おそらく、私のアドレスにサンタからのメールが届いているだろう。

いよいよパンドラの箱が開かれるのだ。

いったいサイトにはどのようなことが書かれていたのだろうか？

また、それがヨウコさんを自殺に追い込んだのだろうか？

サンタからのメールは私のそのような疑問を解決するものだろうか？

帰り道は渋滞していて、私はもどかしく感じていた。

夕暮れの町並みはどこかぼやけていて、生ぬるい空気が街を包んでいる。私はヨウコさんの葬儀の日のことを思い出していた。あの日もこんな天気だった。

あせる心を抑えて、私は慎重に運転した。いつもの通勤経路がとも長く感じた。

アパートの駐車場に車を止める。

ポケットからキーホルダーを取り出し、ドアの鍵を開ける。鍵穴に鍵を差し込む作業ももどかしく感じる。

ようやく、アパートに入り、私はスーツ姿のままパソコンの前に座り、メールソフトを起動させた。

サンタからのメールが届いていた。
私は我を忘れて、メールを見た。

- - - - -
ミツヤさん

掲示板を管理しているサイトからログが取れました。
しかし、古いものは削除されていて、取れたのは一部だけ。
添付しておきます。
読んだら連絡して

- - - - -
メールの本文にはそれだけ書かれていて、テキストファイルが添
付されていた。

私は一瞬ためらったが、覚悟を決めてそのファイルを開いた。
それは酷い内容だった。

518 名前：名無しさん@総務 : 2008/04/07 (月)
18:21:23 ID:n+/CNiLX0
ハシ課長、また切れた。まるで子供

519 名前：名無しさん@総務 : 2008/04/07 (月)
18:21:26 ID:FGdtgbbp6
やつはキチガイだからな

5 2 0 名前：名無しさん@総務 : 2008/04/07 (月)

1 8 : 3 0 : 4 5 ID : F G d t g b p 6

それにしてもヨ コは昨日やりまくったね

セクス依存症でしょう

5 2 1 名前：名無しさん@総務 : 2008/04/07 (月)

1 8 : 3 2 : 1 1 ID : n + / C N i L X 0

彼氏、今日燃え尽きてた(笑)

5 2 2 名前：ヨウコ@総務 : 2008/04/07 (月)

1 8 : 3 2 : 2 2 ID : t Y M 3 1 f x 6

7回しますた

5 2 3 名前：名無しさん@総務 : 2008/04/07 (月)

1 9 : 0 2 : 1 1 ID : n + / C N i L X 0

キタ (。(。!!

5 2 4 名前：名無しさん@総務 : 2008/04/07 (月)

1 9 : 0 5 : 3 5 ID : F G d t g b p 6

<<522

本人登場

5 2 5 名前：名無しさん@総務 : 2008/04/07 (月)

1 9 : 3 0 : 2 1 ID : F G d t g b p 6

おまえ、誰だ

5 2 6 名前：名無しさん@総務 : 2008/04/07 (月)

1 9 : 3 2 : 3 3 ID : H i q Q w r u l 0

トキタといいます

527 名前：名無しさん@総務 : 2008/04/07 (月)
19:43:37 ID:FGdtgbbp6
うそ

528 名前：名無しさん@総務 : 2008/04/07 (月)
19:50:55 ID:Hlqqwru10
昔トモミの彼をヨウコが食った
それ以来ふたりは仲悪い

529 名前：名無しさん@総務 : 2008/04/07 (月)
19:55:41 ID:FGdtgbbp6
だから伏字使えよ、キチガイ

530 名前：うふうん@総務 : 2008/04/07 (月)
20:11:34 ID:UEK+OKXjO
うふうん

531 名前：名無しさん@総務 : 2008/04/07 (月)
20:14:04 ID:VONgpftAO
<<522
本人どこ行った？

532 名前：ヨウコ@総務 : 2008/04/07 (月)
20:32:56 ID:tYM31fx6
セクスしています。
ああ、いいわあ

533 名前：名無しさん@総務 : 2008/04/10 (木)
23:12:56 ID:cbGOS8jpo
キモオタト 夕死ね

534 名前：名無しさん@総務 : 2008/04/10 (木)
23:45:13 ID:9R+Ib0VC0
新人君入ったね。ちよつとキモ

535 名前：名無しさん@総務 : 2008/04/10 (木)
23:48:33 ID:WW3jh1VW0
ヨ コばあさんがねらってる

536 名前：名無しさん@総務 : 2008/04/10 (木)
23:49:18 ID:9R+Ib0VC0
やめろよ、ばあさん
新人はキモイ

537 名前：名無しさん@総務 : 2008/04/11 (金)
01:12:41 ID:c b G O S 8 j p O
ばあさん
ばあさん
ばあさん
若い子が好きなの

538 名前：名無しさん@総務 : 2008/04/11 (金)
01:30:26 ID:9R+Ib0VC0
<<537
ばあさんだけどエロい感じがなんかいいね
今日はト タと話してたけど、めずらしいね。

539 名前：名無しさん@総務 : 2008/04/11 (金)
02:46:09 ID:c b G O S 8 j p O
<<528

あの二人は仲悪いからな。
っていうか、あそこの課はみんな仲悪いからな

540 名前：名無しさん@総務 : 2008/04/11 (金)

02:50:56 ID:Ht+vrqybO

ここに書いてるやつ、いいかげんにしろよ

誰だか解かってるよ

541 名前：名無しさん@総務 : 2008/04/11 (金)

03:20:23 ID:cbGOS8jpo

だーれだ？

667 名前：名無しさん@総務 : 2008/05/09 (金)

08:31:43 ID:ZiNvvWplO

死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ
死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ
死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ
死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ
死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ
死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ
死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ
死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ

668 名前：名無しさん@総務 : 2008/05/10 (土)

08:42:22 ID:ZiNvvWplO

ヨウコ生きている価値なし

死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ
死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ
死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ
死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ
死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ
死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ
死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ
死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ
死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ
死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ

ぶつww ご見てなかったら意味ないじゃん

674 名前：名無しさん@総務 : 2008/05/12(月)

21:30:01 ID:ld7b3EKKO

あのばあさんは見てますよw

死なないまでもやめてくれないかな

やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ

舞い降りた悪魔

私はサンタからのメールに添付されていた裏サイトの掲示板の記録を何度も読み返した。

読むたびに目玉の奥の方に鈍痛を感じた。

読むたびに頭の中に火花が散って、焦げ臭いような匂いを感じた。

三度目に読んだ時は、軽い眩暈がした。

これはいつたい。

ばあさん。

死ね。

ゴキブリ。

これはいつたい何なんだ。ばあさんとはヨウコさんのことなのか？

死ねとはヨウコさんへの言葉なのか？

いつたい誰なんだ。

こんなことを書いて許されるだろうか？

気づくと私は微かに震えていた。目を閉じるとヨウコさんの笑顔が浮かんだ。とても澄んだ無邪気な笑顔だった。

それなのに。

何故ヨウコさんがこんな言われ方をしなければならぬのか？
いたい彼女が何をしたというのか？

私の目に涙がやってきた。

悲しいのか？

悔しいのか？

またヨウコさんの無邪気な笑顔が浮かんで、ただ私は泣いた。

涙がキーボードを濡らす。マウスを持つ手が震える。

こらえきれなくなり、嗚咽がもれる。

ヨウコさん、悲しかっただろう。悔しかっただろう。

いつも職場で明るく振舞っていたヨウコさんの姿が目には浮かんだ。

こんなサイトがあるのに、彼女はいつも明るく、気さくに振舞っていた。私は何も知らなかった自分がとても哀れに思えた。

私は何をしていたのだろう。彼女に何もしてやれなかった。相談に乗れなかった。

彼女は苦しんでいたのだ。

そう、おそらく相当、彼女は苦しんでいたのだ。

涙はやまない。悲しみ、悔しさ、愛おしさ、憤り、怒り、あらゆる感情が私を責めた。

そして。

そして、怒りが残った。

ハヤシ。

トキタ。

コマツ。

ミヤモト。

ヨウコさんの職場の男の顔が目には浮かんだ。

こいつらだ。

こいつらが掲示板に書き込んだのだ。職場ではそ知らぬ顔で仕事をして、裏では酷いことをしている。

コイツラガ、カキコンダノダ。

コイツラガ、ヨウコサンヲコロシタノダ。

誰かが私の頭の中で叫んでいる。

私の中で何かが弾けた。私は右拳を握り締め、パソコンデスクに叩きつけた。キーボードとマウスがデスクから落ち、ディスプレイは倒れた。

こいつらまだ会社に居るのか？

私は車のキーを握り締め、アパートを出て、駐車場に向かった。外は夕焼けで街が赤く染まっていた。私は乱暴に車のドアを閉めて、エンジンを始動させた。二、三回アクセルをおおると駐車場の近くの公園で遊んでいた子供が私の車の方を見た。

私の頭の奥でまだ何かが騒いでいる。

私はエンジンの回転を上げて、セレクトタをドライブに入れた。車は軽くホイールスピンをしながら、発進した。公園の脇を歩いていた老夫婦が何ごとかと、立ち止まり、驚いた視線を私の方に向けていた。

私はそんなことを気にしている精神状態ではなかった。

悪魔が私に取り憑いた。

私はアパートの近所の狭い道をアクセルを目一杯踏み込み、一時停止を無視して、かなりのスピードで車を走らせた。

事故を起こす危険など、意識の中から消え去っていた。

大通りに強引に出る。後を走っていた車が急ブレーキをかけて、クラクションを鳴らすが、私は気にすることなく、全速力で飛ばす。とにかく会社に行つて、やつらに問いただすのだ。卑劣で最低な人間を許すわけにはいかない。

夕暮れの街の建物が赤く、まるで血に染まっているようだった。私の心の奥の押さえつけられない怒りが、血の臭いを増幅させる。もう、私は自分をコントロールできていない。自分がこんなふうになるのを初めて感じた。

ヤツラヲユルシテハイケナイ

国道から吉野家のある交差点をタイヤを鳴らしながら左折し、細い脇道に入り、ようやく会社の駐車場が見えた。

刹那、私の車の右側を何かが通り過ぎた。

私は一瞬、何が起こったのか、解からなかった。その物体は私の車を追い越して、直前で停止した。私はとっさにブレーキを踏み、何とか止まった。

それは黄色のおかしな形をした車だった。なんと形容してよいのだろうか。とにかく平べったいヒラメのような変な形だ。私があっけにとられていると、その車の左側の羽のようなものが上に上がった。それはどうやらドアのようだった。中から人が降りてきて、私の方に向かって歩いてきた。近づくにつれて、その輪郭がはっきりと解かるようになった。

胸元の開いた黒いシャツとスリムなジーンズを履いた男だった。その男が私の車の横まで歩いてきて、私はようやくその男がサンタだと気づいた。

サンタの表情はとても重苦しく、その鋭い眼孔はしっかりと私に向けられていた。

サンタは私の車のサイドウィンドウを、コンコンとノックした。私は慌ててウィンドウを開けた。

サンタは私の顔を見ると、急に表情を崩し、笑顔になって、こう言った。

「ミツヤさん、速すぎ。何を急いでいるの。あのファイル見たら俺に連絡するようにメールに書いておいたでしょ」

サンタのその言葉と笑顔を見て、私に取り憑いた悪魔が消え、私は正気に戻った気がした。

「サンタ君、何故、君が」

私は車の中からサンタの顔を見ながら言った。サンタは笑いながら、まあとりあえず落ち着こうよと言って、私の会社の駐車場を指差した。私とサンタは会社の駐車場に車を止めた。

オレンジ色の夕日が西の空に沈もうとしていた。

車から出ると、駐車場のアスファルトからの熱気がもうもうと溢れ、私の体を包んだ。

私はついさっきまで暑さを忘れていた。頭の中は燃えるように熱かったが、体はまったく汗をかいていなかった。

駐車場をサンタに続いて歩いて出た。駐車場から少し歩くと、喫茶店があり、サンタと私はその店の扉を開けた。冷房の効いた店内の一番奥の席にサンタは座った。私もサンタの後に続いて、テーブルについた。

喫茶店の名前は「マルボロ」だった。私は何回か会社帰りに立ち寄ったことがある。店内は薄暗く暗く、ジャズが流れていた。

ウェイターがおしぼりと水を持ってきて、サンタは私に確認もしないで、アイスコーヒーを二つ頼んだ。

私はまるでいたずらを見つけた子供のようにおとなしく、サンタの顔色を伺っていた。

私は何から話そうかと迷っていると、サンタが言った。

「さて、ミツヤさん、もう落ち着いたかな？」

さっきまでの笑顔は消えて、サンタは無表情だった。

私はたまっていた思いをぶちまけた。

「いや、落ち着けないよ、サンタ君。君が送ってきたメール、あの掲示板のログ。それを見たんだ」

私は一口水を飲み、続ける。

「あれは、何だ。酷い。書いてあるのはヨウコさんの職場の人しか知らないことだ。それで、総務課のやつらに真相を問いただしに来

た。書いたのはやつらなんだ」

「酷い。人間として最低だ。僕は許せない」

そう言うと、忘れていた怒りが、またこみ上げてくる。喫茶店なんかにいる場合じゃないという気になる。

「ちよつと、解かったから、落ち着こうよ、ミツヤさん」

サンタは、無表情のまま、右手を出して、私を押さえつけるような仕草をした。

立ち上がるうとしていた私は、また椅子に座った。

ふと、サンタはズボンのポケットから銀色の小さなケースを取り出した。ケースを開けると中には煙草が入っていた。サンタは一本取り出し、私の方に差し出した。

「いや、ぼくは煙草は吸わない」

私が拒否すると、サンタはいいから、いいからといって、煙草を強引に私に持たせた。

私はかっとなっていて、思わずその煙草を受け取ってしまった。

すかさずサンタがライターを取り出し、火をつけた。私はしかたなく煙草を口にくわえて、一息吸い込んだ。

何ともいえない変な味がした。私はむせ返った。よく見るとフィルタがついていない。私がせきをしていると、サンタはニヤニヤしながら、自分もその煙草をくわえて、火をつけた。

私は以前煙草を吸っていたが、この煙草はそれらのどの煙草よりも強い。頭がくらくらし、眩暈がした。

「サンタ君、これ、何だ？」

サンタはニヤニヤしながら言う。

「慣れれば、落ち着くよ。それにしてもミツヤさんがこんなに熱くなる人だったとは思わなかった」

サンタのくれた煙草をふかしていると、最初は凄く強いと思ったが、段々と気分が落ち着いてきた。

「サンタ君、僕の愛したたったひとりの人が死んだんだ。自殺したんだ。その原因かもしれないんだ。君には今の僕の気持ちが解から

ないのか？」

「ごめん、俺には解からないよ。人を愛したことなんてないし」

サンタは遠い目をして言った。この少年には愛というものはまだ理解できないかもしれない。

「いや、それでもいい。僕はとにかくやつらが許せない」

その時、ウェイターがアイスコーヒーを運んできた。私はかなり大声で話していたため、少し気まずくなったが、ウェイターは私たちの会話にはまったく興味がないのか、無愛想で形式的にアイスコーヒーをテーブルに置いて立ち去った。

「ミツヤさん、ごめん」

サンタがまた謝った。

「ミツヤさん、2ちゃんねるとかのインターネットの掲示板見たことある？」

私はサンタが何を言っているのか解からなかった。

「2ちゃんねるって？」

「そうなんだ。ミツヤさんは免疫ができていないんだ。インターネットの掲示板ではああいっただ酷いこと、いや、もっともつと残酷なことが書かれている。誹謗、中傷なんて、そこらへんに溢れているんだ」

だからー。

だから何だ。

関係ない。

「だからいいのか？サンタ君、それは関係ない。ヨウコさんは、ヨウコさんは、おそらく傷ついたんだ。深く深く、傷ついたんだ」

私はゆっくりとサンタの顔を見ながら言った。

「そうだとして、ミツヤさん、総務部の人に問いただして、どうするつもりだったの？」

はっとしていた。私はその後のことを何も考えていなかった。私はどうするつもりだったのだろう。

「俺はミツヤさんにメールを送った後、気づいたんだ。もしかして、

ミツヤさんは、ネットの掲示板をまったく見たことがなくて、誹謗中傷でブログが炎上したりするのをまったく知らない人だったら、この内容を見たらキレルかなって」

サンタは煙草を灰皿でもみ消した。私はそれを見て、自分の煙草を消した。

「それで、携帯に何回か電話したけど、ミツヤさん出なかった。これはもう自分の家で俺のメール見て、キレて、車で会社に行ったんじゃないかと思った。ミツヤさんのアパートに行く途中、暴走している車とすれ違った。ああ、これだと思った。それで追いかけて、呼び止めたんだ」

私は慌てて自分の携帯を取り出した。着信を示すランプが点いていた。私は携帯の着信にも気づかないくらい頭が熱くなっていたのだろう。サンタが急に私の前に現れたのはこういうことだったのかと納得すると同時に、私はもしサンタが呼び止めてくれなかったら、いったい何をしていたのだろうと想像した。

私はどうしたらいいのだろう。しばらく考えていたら、サンタが言い出した。

「ミツヤさん、裏サイトのウェブサーバのログには、書き込み内容だけでなく、書き込んだ人の情報も保存されていたんだ。俺が思うに、これは単なるネットのいじめなんかじゃないよ。ヨウコさんの死の理由はもつと深い所にある」

サンタの茶色の瞳がきらりと光ったような気がした。

サンタはアイスコーヒーを一口飲んで、話を続けた。

「ミツヤさん、ブラウザでインターネットにアクセスすると、いろんな情報がログに残るんだ。例えば、IPアドレス。何の細工もしてない限り、このIPアドレスからISPが解かる」

私はサンタの言っている内容が半分くらい解からなかった。

「そのISPってのは何？」

サンタは私の初歩的な質問にも嫌な顔をしないで答えた。

「インターネット・サービス・プロバイダ。ミツヤさんもどこかの

プロバイダと契約してインターネットに接続しているでしょ」

「そういえば、私はNTTのそういつたサービスに契約していた。」

「よって、その掲示板にアクセスしてきたパソコンがどのプロバイダから来たってことが、ログから解かる」

私はこれまでそんなことはまったく意識したことがなかった。

「携帯ではキャリアや固体識別番号も解かる。何気なくインターネットを利用していても、実はいろんな情報がログに残っているんだ。他には使っているブラウザの種類とか、OSのバージョンとか、結構いろんなことが解かる」

私はそんなことはまったく知らなかった。インターネットは基本的に匿名ではなかったのか。

「それじゃあ、アクセスしたのが、誰なのか、特定できるのか？」
私は驚いてサンタに聞いた。

「いや、そこまでは、中々難しいんだ。そもそもIPアドレスってのは普通、プロバイダが割り振っていて、個人の特定まではできない。まあ、プロバイダに問い合わせれば解かるけど、普通の素人は解からない。さらに携帯の固体識別番号が解かったとしても、キャリアで調べなければ、個人の特定はできない」

サンタはそういうと、遠い目をして、ため息を吐いた。

「俺の知り合いのハッカーでも、ISPや携帯のキャリアの情報までは、取れない。リスクが大きすぎるから。でもここからが重要なんだけど、細工をすればIPアドレスは隠せるんだ」

私は息を飲んでサンタの次の言葉を待った。

「世の中にはプロキシサーバってのがあって、ブラウザでこれを指定することによって、プロキシサーバ経由でサイトにアクセスできるようになるんだ。プロキシってのは代理っていう意味があって、自分のパソコンに変わってサイトにアクセスする。これによってサイトのログにはプロキシサーバのIPが残ることになって、自分のIPは隠蔽される」

サンタはまたアイスコーヒーを飲む。

「例のサイトの掲示板は、プロキシ経由で書かれている。すべてプロキシ経由なんだ。だからこのプロバイダから来たのか解からない。もちろんプロキシサーバにもログがあるはずだから、それを調べれば解かるんだけど、こういった無料のプロキシってのは、すぐに消滅してしまって、ログをハッキングすることができなかった」

私は専門用語が多くて、サンタの話の半分以上は理解できなかった。ただひとつ理解できたのは、結局書いた人を特定できないということだった。

「でも、ミツヤさん、おかしいと思わない？」

サンタが問う。

「サイトから採取できたログは一部だけど、すべてがプロキシ経由でアクセスされている。これはどういうこと？このサイトの掲示板は携帯でも投稿できるし、そもそも、ミツヤさんから聞いた総務課の人全員がプロキシ経由でアクセスしてるのって、おかしくない？」

私はヨウコさんの職場の人を思い浮かべた。彼らがそんなにパソコンとかネットワークに詳しいとは思えなかった。

「これは俺の想像だけど、このサイトの掲示板はすべて一人が書き込んでいるのだと思う。自作自演。掲示板ではよくあることだ。プロキシサーバってのはいくつもあるから、書き込むたびに変えていたかもしれない」

すべてひとりが書き込んでいる。

そのひとりがヨウコさんを恨んでいたのか？

サンタの話はまだ続く。

「で、もうひとつ不思議なことがある。ヨウコさんからミツヤさんに最後にきたメール。俺が前に言ったけど、ヘッダ情報確認した？」

私はサンタと初めてあった先生の研究室での会話を思い出した。

「うん、それは確認した。確かにそれ以前にもらったヨウコさんのメールのヘッダと同じだった」

「で、そのメールの内容だけど、俺には、ヨウコさんが、このサイトの掲示板のことを、そんなに思いつめていたとは思わないんだ。」

だから、それがヨウコさんの死につながるとは思えない」

確かにヨウコさんからの最後のメールには深刻さはなかった。

「さらにもうひとつ、ヨウコさんの死因。睡眠薬とアルコールによる自殺。これが不思議なんだ。最近の睡眠薬ってのは、普通の人か思っている以上に安全なんだ。少なくとも病院で処方される薬は相応な量を飲まなければ、死に至らない。アルコールをどれだけ飲んだのか、解からないけど、ほとんどの場合、死ねない。死に至る場合は、睡眠薬を飲みすぎて、吐き出した時器官に詰まったことによる窒息死だと思う」

私はサンタの話を聞いて、私は自分の無知を思い知らされた。

そういえばヨウコさんの死の要因はトモミさんから聞いただけで、詳しいことは知らない。実際にはサンタの言うような要因だったのだろうか。

「ミツヤさん、だからこれはもつと深い」

サンタは茶色の瞳で私の顔を直視しながら言った。

私の中になんだか先の見えない霧に包まれた道路を走っているような不安が湧き上がってくる。

「サンタ君、僕はヨウコさんが死んだ本当の理由が知りたい。でもこれ以上、何かできることがあるのか？」

ふと、私の頭にある思いがよぎった。

警察はヨウコさんの死をどのようにとらえているのだろうか？自殺であれば検死が行われているはずである。

「サンタ君、これは一度、警察に事情を聞いてみたらどうだろうか」

私はサンタにそう提案した。サンタは二本目の煙草を取り出し、洒落たライターで火をつけて、こう言った。

「それも、ありかな」

警察の人たち

次の日の朝、私はいつもより三十分早く会社に出勤した。

特別な仕事があったわけではない。サンタから聞いたサイトの口グのことが気になり、よく寝付けなくて、朝早く目が覚めてしまったのだ。

会社の重厚な門を通り、本社の建物に入り、品質管理部の部屋を目指す。品質管理部の自分の席に行くためには、必ずヨウコさんのいた総務部の部屋を通らなければならない。

まだ、早い時間のせいか、部屋にはほとんど人がいなかった。私は総務部の島を避けるようにして、自分の席を目指した。

横目で総務部の席を見ると、トキタが出社していた。パソコンに向かつて何か仕事をしている。

サンタの話では同一人物があ掲示板に書き込んでいたのだという。

それはトキタである可能性もなくはない。

私の中に、トキタに掲示板のこと、ヨウコさんのことを問いただそうという衝動が溢れてくる。しかし今のところ何の証拠もないのだ。私は衝動を抑えて、横目でトキタの後姿を見ながら、自分の席に着いた。

その日はほとんど仕事に手が付かなかった。ただ、特に急ぎでやるべき仕事もなく、私はパソコンに向かったまま、昨日のサンタの話を思いだしていた。掲示板に書いた個人の特定は、サンタやサンタの知り合いのハッカーでも難しいという。やはり、そういうことをやるのには警察に頼むしかないのだろうか？

午前中は、ほとんど仕事をしないで、ただ時間だけが無常過ぎていった。

ふと、サンタの言葉が頭の中に蘇った。

病院で処方される睡眠薬では、相当な量を飲まなければ、死に至

らないという話である。私の中に、ヨウコさんは本当に睡眠薬とアルコールで死に至ったのか？という素朴な疑問が浮かんだ。

トモミさんならその原因を多少は詳しく知っているかもしれない。私は自分の席を立って、総務部の島を目指した。時刻は午前十一時を過ぎたところだった。総務部の社員もほとんど出社しているだろう。

総務部の島には、トモミさんの姿が見えなかった。総務部は出張なんてほとんどないし、打ち合わせでもしているのだろう。私はしかたなく自分の席に戻って、仕事をしているふりを続けた。

正午を告げるチャイムがなると、そこから一時間の昼休みになる。社員はほとんど社員食堂に向かう。私はすぐに席を立って、総務部のトモミさんの席に行った。トモミさんはいなかった。机の上のノートパソコンも閉じられていて、使用した形跡がない。

私は思い切って、トモミさんの隣に座っているミヤモトという男に聞いてみた。

「すみません。トモミさんは今日はお休みなのですか？」

言葉を発するのには、少し勇気が必要で、妙にうわずってしまっ

た。

ミヤモトは不思議そうな顔をして、私の方を見つめていた。何故、この男、ミツヤがトモミさんのことを聞くのだろう、という疑問が、ミヤモトの眉間にしわを作っていた。

それでもミヤモトは真顔に戻ってこう言った。

「なんか、トモミさん、突発で休んでいるようですよ。トモミさんに何か用事でもあるんですか？」

ミヤモトの最後の言葉は、まるで私をからかっているように感じて、ちよつと腹立たしかった。

それでも私は心を落ち着けて、こう言った。

「いや、それならいいんだ」

ミヤモトの前から立ち去り、自分の席に向かった。

トモミさんは休んでいるのか。

その時は、風邪かなんかで体調でも悪かったのかと思い、あまり気にとめなかった。

午後になり、私の前にある電話が鳴った。

私が取ろうとすると、今年入った新入社員がなかば強引に受話器を取った。新入社員は積極的に電話応対をするように教育されているらしい、

「はあ、ミツヤですか。失礼ですがあなたは」

新入社員は応対に苦戦しているようだった。しばらく問答をした後、受話器を私の方に向けて言った。

「サカキバラっていう人なんですけど、会社名言わないんですよ。何か怪しいですけど、ミツヤさん、出てもらっていいですか？」

私はサカキバラという人物に心当たりはなかった。会社にはいろんな企業からの売り込みやアンケートなどの怪しい電話もある。新入社員はそれらの対処の仕方をまだ身につけていなかった。

「しかたないな」

そう言っ、私は受話器を受け取った。

電話の向こうでサカキバラが話す。

「あ、品質管理部のミツヤさんですか？」

「そうですね、あなたは」

と、言いかけた時、サカキバラがさえぎった。

「すみません。私愛知県警のサカキバラといます。先日、お亡くなりになった、そちらの会社のヨウコさんのことで、ちょっと聞きたいことがあります」

私はその言葉を聞いて、体の緊張が高まっていくのを感じた。私のこれまでの人生で、警察からこのようなことを聞かれるのは初めてのことだった。しばらく言葉を発することができなかった。

「もしもし、ミツヤさん、聞いてますか？ちょっと話を聞きたいだけなんで、時間作れますか？」

サカキバラは明るい口調でそう言った。

「私は愛知県警の刑事課のサカキバラといます。先日、お亡くな

りになった、ヨウコさんのことで、ちょっと聞きたいことがあるんですが、今日、会えませんか？」

サカキバラは一方的にそう言った。

私は、はあ　と言ったまま、しばらく黙ってしまった。

「ミツヤさんの会社の近くまで行きますんで、喫茶店でちょっと話を聞かせてください」

「あの、サカキバラさん、いったいどういったことを」

私はヨウコさんの死に何か不審な点でもあるのですか？という言葉を寸前で飲み込んだ。私の隣の席の新人社員が訝しげな顔をしている。

「いや、ちょっと形式的なことです。ミツヤさんがヨウコさんとお付き合いしていたということを知りましたんで」

サカキバラという刑事の言葉はまるで古い友人か、メーカーの営業のように明るく、刑事といえば気難しく、厳しいものだという私の想像とは異なっていた。結局、サカキバラとは会社が終わった後、近くの喫茶店で会う約束をした。

「ミツヤさん、誰だったんですか？」

電話を取った新人社員が不思議そうな顔をしながら、私に尋ねた。「いや、昔付き合いのあった得意先の営業だよ。何か転職したらしいけど、ちょっと売り込みにくるみたいだ」

私はとっさにうそをついた。私はうそをつくのは上手くない。

しかし新人社員は、そうですね　と言ったまま、パソコンに向かって仕事を始めた。あまり興味がないらしい。

会社は基本的に五時で終わる。残業はない。私は会社が終わるまで、いったい警察は私に何を聞きたいのだろうと想像していた。

ヨウコさんの自殺の理由。

遺書はなかったはずだ。

あるいは、裏サイトのことを警察も感づいて、調査を始めたのだろうか？

さらに、ヨウコさんの死に不審な点があって、私は何か疑われて

いるのだろうか？

私の想像は悪い方に、悪い方向に向かう。

私の心臓の鼓動は大きくなっていくが、悪魔の手が私の心臓を驚づかみにしている。今にも私の心臓が止まってしまおうのではないのかという不安が襲う

マウスを握る手は、大量の汗で、座っていても、膝ががくがくする。

ふと気づくと、前に座っている課長が私の方を見ていた。

「ミツヤ君、どうしたんだ。顔色が悪いぞ」

私のことを心配している、というより、私が何も仕事をしていないのに気づいている。

「ちょっと、体調が悪くて、すみません」

「体調が悪いのなら、今日はもう、帰った方がいいよ。急ぎの仕事もないし」

課長は温厚な性格だった。私はしばらく考えて、課長の指示に従うことにした。

「はあ、すみません。ちょっと頭も痛いので、今日はお先に失礼させていただきます」

隣に座っていた新入社員は不思議そうな顔をしていたが、私は今の心境のまま仕事を続けることは、とてつもなく苦痛に思えた。

時刻は午後四時を少し過ぎたところだった。私はWindowsをログオフして、机の上を片付けた。

「すみません。今日は失礼します」

私の島の社員はパソコンを見ながら、めんどくさそうに、お疲れ様 と言った。

ヨウコさんの職場にはトキタとミヤモトがパソコンに向かっていった。他の社員は見当たらなかった。

私はその島を避けるように、部屋を出て、更衣室に向かった。

本社の建物から出ると、外は今にも雨が振り出しそうに、真っ黒な雲が広がっていた。太陽は見えなかった。

生温い風が、私の体にまとわり付くように、静かにふいていた。気温はそれほど高くないが、湿度はかなり高いように感じた。私の体から汗が出る。それは不快な汗だった。

サカキバラ刑事と約束した時間には一時間以上早かったが、私は約束した喫茶店「マルボロ」を指し、生温い空気が満ちた会社の前の細い道を歩き出した。

鉛色の空が私の心に重くのしかかり、今にもつぶされてしまうような錯覚に陥り、私はふらふらと歩きながら、喫茶店「マルボロ」を目指した。

ふと私は、「マルボロ」の古ぼけた看板の前で立ち止まり、携帯電話を取り出した。

サンタの声が聞きたくなかった。あの男なら、このような場面での対処の仕方のヒントをくれるかもしれない。

何回かコールが続く。サンタは中々出なかった。私があきらめかけて、携帯を切るうとした時、電話はつながった。

「もしもし」

不機嫌そうな声が聞こえた。

「あ、僕だ。ミツヤなんだけど。今ちよつと話せるかな」

私はわらにもすがる気持ちでそう言った。

「いいけど、今ちよつと取り込んでいるんだ。手短にお願いしますよ、ミツヤさん」

サンタはぶっきらぼうに言った。

私はむっとしたが、今の状況をサンタに伝えた。

「警察から会社に電話があったんだ。ヨウコさんの死について聞きたいって」

「そう、それで？」

「いや、だから、これはどういうことだろう？」

サンタは一呼吸置いて、話し出した。

「ヨウコさんの自殺の原因が解からないんで、単なる聞き込み調査でしょ。おそらくミツヤさんだけじゃなくて、ヨウコさんの職場の

人もいろいろ聞かれたんじゃない？」

「サントはめんどくさそうにそう言った。」

「僕は何を話したらいいんだろう。裏サイトでヨウコさんが酷く中傷されていたことを話すべきだろうか？」

「ミツヤさん、何も隠すことなんてないと思うよ。言ったらいい。まあ、もう警察は知っているかもしれないけど」

「私が考え込んでいるとサントが言う。」

「ミツヤさん、ごめん。今ちょっと忙しいんだ。警察の人と会った後、またいろいろ聞かせてよ」

「サントはそう言うと、電話を切った。」

私はサントの態度に若干腹が立ったが、なんだか少し気が楽になったような気がした。

「マルボロ」の黒ガラスの木の扉を開けると、チリンと鈴の音がなった。

ウェイターが、私の方を見て、いらっしやいませと事務的に言う。相変わらず店内は薄暗く、ジャズが流れていた。私が一番奥の席に着こうとすると、入り口の近くのテーブルから声が聞こえた。

「ああ、ミツヤさん、こっちです」

振り向くと、丸い顔をした男がにこしながら立ち上がった。

灰色のスーツを着た太った男だった。頭髪は短く刈られていて、

目はつぶら。丸い鼻。丸い顔。そして、体型も丸かった。

「サカキバラです」

男は明るく、そう言った。電話で聞いた声だった。

まだ約束の時間より、三十分以上早い。私はちよつとためらいながらも、サカキバラのいる入り口のテーブルに向かった。

サカキバラの横には、女性が座っていた。その女性が私の方を見た。ショートヘアの端正な顔をした若い女性で、私ははつと息を飲んでしまった。

「ミツヤさん、お忙しいところ、すみません。ちよつと早く着いてしまったので、待っていました」

サカキバラはにこにこ笑いながら、そう言った。ショートヘアの女性は座ったまま、私の方を見ていた。

「愛知県警のサカキバラといいます」

サカキバラはそう言って、私に名詞を渡した。

愛知県警 刑事課 警部という肩書きが書いてあった。私は自分の名詞を渡そうかと迷っていると、サカキバラ警部が言った。

「こっちに座っているのは、私の後輩のクワタといいます。まだ入ったばかりで研修中なんです」

ショートヘアの女性は座ったまま、私の方に軽く頭を下げた。目がぱつちりと大きく、綺麗な顔をしていた。

「すみません。まだ名詞ないんで」

クワタ刑事はぶつきらぼうにそう言った。

私は警察に名詞を渡すのもおかしいと思い、名前だけを言った。

ひととおりの挨拶がすみ、私はサカキバラ警部とクワタ刑事の前に座った。

「今日は、本当にすみませんね。お仕事終わるの早かったですね」

サカキバラ刑事は座ると、まずそう言って、私の方に笑顔を向けた。私は少し気まずく感じた。

「いえ、今日は仕事が早く終わってしまっ」

そう言いかけると、クワタ刑事が小さな声で言った。

「タバコ吸ってもいいですか？」

私はその言葉遣いに少し啞然としたが、ああ、どうぞと答えた。

サカキバラ警部は引きつったような笑顔になって、クワタ刑事の方を一瞬見て、すぐに元ののこにこした穏やかな顔に戻って私の方を向いた。

「すみません。まだ研修中でした」

クワタ刑事は小さなグリーンの鞆から、マイルドセブンを取り出して、電子ライターで火をつけた。その仕草は流れるように連続的で、軽やかで、高級クラブのホステスのようだった。

「えーと、今日はですね。電話でも少しお話ししましたが、先日お亡

くなりになったヨウコさんのことで、いろいろと聞きたいことがあります
りまして」

サカキバラ警部は少し真剣な顔になった。クワタ刑事は中空を見ながら、タバコをふかしていた。

サカキバラ警部がウェイターを呼んで、私はアイスコーヒーを頼んだ。机の上には飲みかけのコーヒークップがふたつ置いてあった。私はまず、今日呼ばれた理由を聞いた。

「サカキバラさん、僕は今日、何を話したらいいのでしょうか？」
警部は人懐っこい顔をしながら言った。

「ヨウコさんは明らかに自殺と思われるのですが、理由が解からんですよ。遺書もないし、両親に聞いてもそれらしい原因は解からない。それでヨウコさんのまわりの人にいろいろと聞いていますわけですよ。まあ、すべての自殺者の理由が解かるわけではないのですが」

私は警部の丸い顔を見ながら、また聞いた。

「その、こんなことを聞いていいのかよく解からないのですが、ヨウコさんはどんな感じで、その、発見されたと言うか、その時の状況と言うか」

私は言葉の最後の方がしどろもどろになってしまった。

「ミツヤさん、ヨウコさんの家に行ったことがありますか？」

私はヨウコさんと初めて出会ったあの日のことを思い出し、少し恥ずかしくなった。

「一度だけ行ったことがあります、ちょっと立ち寄ったくらいです」

サカキバラ警部は私の顔を見て、何故か頷いた。

「ヨウコさんが亡くなったのは、六月九日の未明だと思われれます。発見されたのは朝六時半くらい。いつもの朝食の時間にヨウコさんが来ない。母親はキッチンで何回かヨウコさんと呼んだが、返事がないため、まだ寝ているのだと思い、二階にあるヨウコさんの部屋に起こしに行った」

サカキバラ警部はまるで何かの調書を読んでいるように、唐突に話し出した。

「母親はドアをロックして、何回か呼びかけたが、ヨウコさんは出てこなかった。ヨウコさんの部屋は内側から鍵がかかって開かなかった。母親が鍵がキッチンの戸棚にあることを思い出して、キッチンに戻り戸棚を調べたが、鍵はそこになかった」

その時、ウェイターがアイスコーヒーを運んできた。少し乱暴にテーブルの上にコップを置くと、無言で立ち去った。

「ヨウコさんの部屋には鍵がついていたんですか？」

私はそう聞いてみた。

「ええ、鍵がついていました。しかし、母親に聞いたところ、ほとんど鍵をかけたことはなかったそうです」

私はアイスコーヒーをストローで少し飲んだ。

「ヨウコさんの母親は心配になって、父親を呼んだ。父親は前の日、会社の仕事を持ち帰って、夜、書斎で仕事をしていた。それでそのまま書斎で寝ていたそうです」

私がヨウコさんの家に行ったのは、初めて出会ったあの夜だけだ。まだ新しい二階建ての家だった。その時はリビングだけしか見えない。書斎なんてものがあつたのは気づかなかつた。

「それで、父親が起きてきて、ヨウコさんの部屋のドアを開けようとしたが、鍵がかかっている、やはり開かない。何度かロックして呼びかけたが、ヨウコさんは出てこなかった」

私は無言でサカキバラ警部の次の言葉を待つ。

「ここまでできて、ヨウコさんの両親は、ちょっと尋常ではない、娘に何かあつたのかと不安になり、父親はドアに体当たりをして、強引にドアを開けたのです」

サカキバラ警部はここまで言って、コーヒーを一口飲んだ。クワタ刑事は興味のなさそうな顔をしながら、髪をいじっていた。

「ヨウコさんの部屋は六畳のフローリング。ベッドと本棚、そして小さなテーブルがある。ヨウコさんはテーブルの横に横向けに倒れ

ていました。机の上には大量の睡眠薬とブランデーのボトルが置いてありました」

私は気になっていた質問をサカキバラ警部に向けた。

「その、ヨウコさんの死因は睡眠薬の飲みすぎなんですか？」

警部はまたコーヒーを飲む。クワタ刑事はちょうど二本目のタバコに火をつけたところだった。

「睡眠薬はおそらく、かなり大量に飲んでいたでしょう。アルコールもかなり飲んでいたようです。しかし直接の原因は嘔吐した時に気管を嘔吐物が塞いでしまったための窒息死。これが検死の結果です」

私はいつか聞いたサンタの言葉を思いだしていた。睡眠薬では死ねない。ヨウコさんの死因はサンタの想像通りだった。

「その睡眠薬なんです、普通の薬局には売っていません。医師に処方されなければ、手に入れることができないものなんです。しかし、ヨウコさんは最近、医師にかかった記録がない」

サカキバラ警部は私の瞳を覗き込んで、そう言った。

「ミツヤさん、状況は自殺なんです、原因が解からない。どこからヨウコさんが睡眠薬を手に入れたか、それも解からないんです」
クワタ刑事がタバコをふかしながら、突然、割り込んできた。

「ミツヤさん、ヨウコさんと付き合っていたんですよ。彼女が何を悩んでいたか、どこから睡眠薬を手に入れたか、そんなことを知っていたら言っただけです」

彼女の大きな瞳が私を見つめていた。その刺すような視線を感じて、私は思わず目をそらした。

「いや、ミツヤさん、些細なことでもいいんです。何かありましたら、お願いします」

サカキバラ警部は引きつった顔でクワタ刑事を一瞥して、その後、私の方には笑顔を見せた。

私は言葉を選びながら、ゆっくりと話し出した。

「サカキバラさん、私にも本当に解からないんです。最後にヨウコ

さんと会ったのは、自殺する二週間くらい前だったと思います。その時にはまったく自殺の前兆というか、そぶりというか、そんなのはなかったです」

私は頭を垂れて、アイスコーヒーをすすった。サカキバラ警部はじつと私の話を聞いている。

「ヨウコさんとは同じ会社で職場も近かったので、その後も何度も彼女の姿を会社で見ました。会社ではあまり話すことはなかったですが、変わった感じはなかったです。電話やメールもしましたが、何かに悩んでいる様子はありませんでした」

私は当時のことを思い出して、深いため息を吐いた。クワタ刑事の吐き出したタバコの煙が、私の方に流れてきた。

「うーん、やはりそうですか。総務課の人にも聞いたのですが、彼女の自殺の原因はやはり解からなかったのです。ただ」

サカキバラ警部の真剣な眼差しが、私の方に向けられていた。

「ただ、なんですか？」

「ただ、気になることを言っていた人がいたんです。ネットのボログだったかな」

警部が頭もかきながら、何かを思い出そうとしてた。

「警部、それを言うならブログ。でもブログではなくて、掲示板と呼ばれる、不特定多数の人が書き込みをできるサイト」

突然、横からクワタ刑事が無表情で割り込んできた。サカキバラ警部は引きつった顔をクワタ刑事の方に向けると、また話し出した。

「そう、その掲示板というところに、ヨウコさんの悪口というか、中傷というか、そういったものが書き込んであった、という話を聞きました。その辺のことについて、何か思い当たることはないですか？」

警部はにこにこしながら、私に聞いた。

私はあのサイトのことを話すべきかどうか、まだ迷っていた。

サンタの言葉が頭をよぎる。警察ももう知っているかもしれない。知っていてあえて私に聞いているのか？

隠さずに話せば、サンタの声がどこからか聞こえたような気がした。

私は話すことにした。

ヨウコさんからの最後のメールでそのような掲示板があったことが書かれていたこと。

ヨウコさんの職場の人しか知らないことが書いてあったらしいこと。

その掲示板のURLをトモミさんから聞いたこと。

しかし、既に掲示板はなくなっていたこと。

ただし、サンタがサーバに進入して、ログを調べたことは話さなかった。

「すると、ミツヤさんは、その掲示板を見ていないんですか？」

「はあ、既に掲示板は削除されていて、書かれている内容は解かりませんでした」

「ふーん、トモミさんはそんなことは言っていなかったな」

サカキバラ警部がつぶやくように言った。

クワタ刑事がタバコの火を消しながら、私の方に大きな目を向けながら言う。

「ミツヤさん、そのサイトのURLを教えてください？」

クワタ刑事が少し微笑んだ。それはその日初めてみたクワタ刑事の表情の変化だった。

私はワイシャツのポケットから携帯を取り出して、トモミさんからのメールに記されたあのサイトのURLを表示し、クワタ刑事に見せた。

クワタ刑事は身を乗り出し、私の携帯を覗き込んだ。私の顔のすぐ近くにクワタ刑事の顔があり、甘い香りが私の鼻腔をくすぐる。私の心臓の鼓動が少し早くなった。

クワタ刑事は自分の携帯を取り出し、左手で器用に携帯を操作した。

サカキバラ警部は小さく口を開きながら、その光景を見ていた。

「サイトはなくなってる」

クワタ刑事が携帯を見ながら言った。

「なくなっているとは？」

サカキバラ警部が聞く。

「ページが存在しないってこと。サーバが応答をしない」

クワタ刑事は携帯をサカキバラ警部に渡した。警部はまじまじと携帯を見て、私に差し出した。

ページが存在しません

私はあれつと、思った。以前、私がアクセスした時は、『掲示板』がありませんかというメッセージだった。今、クワタ刑事の携帯に表示されているメッセージと異なる。

私は自分の携帯でサイトにアクセスしてみた。

ページが存在しません

メッセージはクワタ刑事の携帯に表示されたものと同じだった。

「このメッセージは、以前、私がアクセスした時に表示されているものと違います。私が見た時は、掲示板を提供しているサイト自体は存在していて、掲示板がありませんというメッセージでした」

私はサカキバラ警部の顔を見ながら言った。

警部は目をパチパチさせながら、頭をかいた。そして首をひねって、クワタ刑事の方を見る。

「ミツヤさん、最後にそのサイトを見たのはいつですか？」

これまで、まったく興味なさそうだったクワタ刑事の目が少し輝きだしている。

私はいつだっただろう、と記憶を探った。

「たぶん、一週間前。いや、そんなに前じゃないかな」

私はサンタと初めて会った日のことを思い出していた。

「本当にこのサイトはあったの？」

クワタ刑事が聞く。

確かにそのサイトはあった。事実サンタはそのサイトのサーバのログを入手している。しかし、私はサンタのことを言う気はなかつ

た。

「はい、確かにあったのだらうと思います。掲示板がいくつかあって、まあ、どれもこれも怪しいものばかりだったけど」

クワタ刑事はタバコを取り出して、火をつけ、つぶやくような小さな声で言った。

「ふーん、ちよつと調べる必要があるかな」

サカキバラ警部は引きつった顔をクワタ刑事の方に向けて言う。

「調べるって、何だよ。サイトとか、サーバとか、ページとか、何言ってるんだ」

にこにこした丸顔だった警部の眉毛が、ついにつりあがった。

「まあ、警部、署に帰ってからゆっくり説明しますよ」

クワタ刑事は、まるでききわけのない子供をなだめる母親のような微笑を浮かべていた。

サカキバラ警部は納得がいかないらしく、ぶつぶつと何か言っている。

クワタ刑事が立ち上がったと言った。

「ミツヤさん、今日はどうもありがとう。また何かあったら連絡していいですか？携帯の番号教えてもらっていい？」

立ち上がったクワタ刑事の紺のスーツ姿は、すらりとしていて、まるでスチュワーデスのように思えた。

私は携帯の番号を言って、クワタ刑事は自分の携帯を持ち、番号を登録しているようだった。

サカキバラ警部もぶつぶつ言いながら立ち上がった。

「ミツヤさん、すみませんねえ。この娘まだ新人なんで、礼儀を知らないんですよ。いや、いくら新人とはいえ、刑事がこんなことではいけないんです」

私は何か気になっていた。まだ釈然としない。

ふと、私の頭に深海から潜水艦が浮上するかのようになり、その疑問が浮かんできた。

そうだ、鍵だ。

ヨウコさんの部屋の鍵。

鍵はどこへいったのだろう。

「サカキバラさん、そういえば、ヨウコさんの部屋の鍵はどこにあったのですか？」

私は立ち上がって、そう聞いた。

「ああ、鍵ですか。さっき言いませんでしたっけ？ヨウコさんの部屋のテーブルの上に置いてありました。スペアも含めて二つ。おそらく、ヨウコさんは両親が部屋に入ってこないように、キッチンの戸棚から持ち出していたでしょう」

サカキバラ警部はそう言って、伝票を持ち、レジへ向かった。

私もその後続いた。クワタ刑事はスタスタと出口に向かった。私が財布を出すと、警部は、いいです、いいですと手を振って、私を制した。

「ミツヤさん、何か解かったことがあったら、連絡ください」

警部はニコニコしながら、そう言って、軽く会釈した。

私はサンタのことを話さなかったことが、心に引っかかって何となく気まずかったが、その日はそのまま別れた。

サンタの行方

喫茶店を出ると紺色のセダンが駐車場に止めてあって、クワタ刑事がまず運転席に乗って、サカキバラ警部は助手席にゆっくりと乗り込んだ。警部はウィンドウを開けて、私の方に軽く会釈をした。クワタ刑事は無表情で車を発進させた。

もう夕日は西の空に沈みかけていて、鉛色だった空を真つ黒な雲が埋め尽くしていた。時刻は午後七時になるうとしていた。遠くの空に稲光が見えて、どこからか、ごろごろという音が聞こえた。今にも雨が降り出しそうだった。

警部たちが去った後、私も自分の車に乗り込んだ。私が車に乗って、エンジンをかけた時、大粒の雨がフロントガラスを叩いた。

私は携帯を取り出し、サンタに電話した。とりあえず、今日、警察に話したことをサンタに伝えようと思った。私のとった態度、言動はどうだったのだろうか？

私自身、それが良かったのか、悪かったのか、判断できなかった。少なくとも、私より、サンタの方が客観的な視点で物事を判断できるように感じた。十五歳の少年だが、これまでサンタに教えられることが多かったし、知識も私より豊富だ。私は自分が十五歳の少年に頼っていると思うと少し情けなくなつたが、サンタは私の周りの大人より、はるかに頼りになる存在に思えた。

私は今の心境を誰かに聞いてもらいたかつたのだ。そしてそれはサンタがもつとも適任だと思った。

何度か、コールが続いたが、サンタは出なかった。

電波の届かないところにいるか、あるいは電源が切られていますという、事務的なメッセージが流れた。

私は何度かかけなおしたが、サンタが電話に出る気配はなく、事務的な音声メッセージが流れるだけだった。

どうしたのだろうか。

いったいサンタはどこで何をしているのか？

しかたなく、私はサンタの携帯にメールを送った。

話したいことがある。電話してくれ、という簡単なメールだったふと、先ほどのサカキバラ警部との会話を思い出した。

トモミさんは、あの掲示板のことを警察には言っていないかった。

サカキバラ警部は確かにそう言った。私はトモミさんからあの掲示板のことを聞いたのだ。何故トモミさんは掲示板のことを警察に話さなかったのだろうか？

私は今度はトモミさんに電話した。

しかし、トモミさんにも、電話は通じなかった。

サンタに電話した時と同じ、電波の届かないところにいるか、あるいは電源が切られています。という、事務的なメッセージが流れた。

これはどうということだろう。

私の中に、何ともいえない、不安感がやってきた。サンタもトモミさんも連絡が取れない。これは偶然なのか？

私はトモミさんの携帯にもメールを送った。

空はますます暗くなって、大粒の雨が、激しくフロントウィンドウを叩く。遠くに見えた雷光がすぐ近くまで来ていて、辺りの景色を浮かび上げらせ、轟くような音が大地を振動させていた。

夕立か。

フロントウィンドウを雨粒が覆い尽くしてほとんど前が見えない。私はワイパーをフルパワーにして、ゆっくりと車を発進させた。

アパートに帰ってから、もう一度、サンタに電話しよう。

次の日の朝は、昨日の豪雨が嘘のように、爽やかに晴れていた。

私はいつもの時間に起床し、アパートの前の駐車場に止めてある車に乗り込んで、ラジオから流れるニュースを聞きながら、会社に向かった。

昨夜、ようやく雨が小降りになったのは、夜九時を過ぎたころだった。私は何回かサンタに電話を入れたが、結局、連絡は取れなかった。トモミさんの携帯も不通だった。

サンタに連絡が取れないのはともかく、トモミさんに電話が通じないのは、ちよつと心配だった。彼女は昨日も突発で会社を休んでいる。病気にでもなったのかもしれない。私はそんなことを思いながら、駐車場に車を止めて、会社の重厚な門に入って、品質管理部の部屋に向かった。

自分の席に着く前に、総務部のトモミさんのいる席を見たが、彼女は出社していないようだった。

私の会社はフレックスタイム制といわれる就業規則を取っていた。基本的には九時からの始業だが、フレックスタイムでは個人で始業、終業時間を管理する。一日八時間の勤務時間で、その合計が月末に合えばよい。極端な話、今日二時間しか働かなくても、明日十四時間働いて、終業した時間の合計が、月の最終日に会社稼働日×八時間になればいいのだ。

だから、九時きつちりに出社していなくても、遅刻にはならない。満員電車や渋滞を避けるため、あえて時間をずらして出社している社員もいた。

私は、昨日、サカキバラ警部からの呼び出しが気になって、ほとんど仕事をしていなかったこともあり、午前中は集中して仕事をこなしした。

来月の品質管理会議のアジェンダをエクセルで作成し、課長にチェックしてもらい、修正をする。内容的におおよそ了解をもらったのは、十一時を少し過ぎたころだった。

私は一息ついて、コーヒーでも飲もうと思いい、廊下にある自販機まで歩いた。

その途中、総務部を通る。私はトモミさんのことを思い出して、席を見てみたが、彼女のノートパソコンは閉じられたままだった。

今日も休みなのだろうか。

私は隣の席に座っていたミヤモトに聞いてみた。

「トモミさんって、今日も休みなの？」

ミヤモトは、一瞬、怪訝な表情を私の方に向けた。

「あっ、ミツヤさん。トモミさん今日も休みなんですよ。連絡もなくて、携帯も通じなくて、アパートの電話もダメらしくて、課長が心配してるんですが」

ミヤモトは早口でそう言った。

「ミツヤさん、トモミさんと仲良かったですよ、何か聞いてませんか？」

私とトモミさんは会社ではほとんど話すことなどなかったはずだ。仲が良かったなんて、ミヤモトはいったい何故そんなことを言うのだろうか？

私は自分の顔が赤くなっていくのを感じた。それは恥ずかしさもあつたが、他人の心にずかずか入り込んでくる、ミヤモトという若い男の態度への怒りもあつたかもしれない。

「いや、そんなに仲良くはないよ。ただ最近いなあと思ってちよつと気になったんだ。僕は知らないよ」

私はわざとそっけない態度を取った。

ミヤモトはパソコンの液晶画面を見ながら、ぶつぶつ言っていた。「困るんだよなあ。トモミさんの仕事、俺に回ってきちゃって」

私はミヤモトに聞く。

「ハヤシ課長はどこ？」

ミヤモトが答えようとした時、廊下の方からハヤシ課長とトキタがバタバタと部屋に入ってきた。

ハヤシ課長は、緊張した表情をしていて、私の姿を見るとすぐに言った。

「おお、ミツヤ君、君トモミさんのこと何か知ってる？」

「いや、僕は特に何も」

「実は昨日から彼女に連絡が取れないんだ。今も思い当たる彼女の友達にいろいろ聞いてまわっていたんだが、誰も知らない。こんな

ことする娘じゃないんだ。初めてなんだよ、こんなこと」

ハヤシ課長は明らかに動揺していた。先日、ヨウコさんの自殺が自殺したばかりだ。そして今度はトモミさんの無断欠勤。ハヤシ課長は明らかに動揺していた。

「おい、トキタ、おまえ、今から彼女のアパートへ行ってこい、いや、俺が行く」

トキタはハヤシ課長の動揺ぶりとは正反対で、落ち着いていた。いや、落ち着いていたというより、あまり興味がないようだった。

「課長、もう昼休みですよ」

力のない声でトキタはそう言った。ミヤモトもそれを聞いて頷いている。

「馬鹿、それどころじゃないだろう。二日も連絡が取れないなんて

」

ハヤシ課長は次の言葉を飲み込んだようだった。

「もういい。俺が行ってくるから、明日の会議の資料作っておけ」
そう言ってハヤシ課長は足早に席を離れた。その時、ちょうど正午を上げるチャイムが鳴った。

トキタとミヤモトは、チャイムの音を聞くと、席を立って、部屋を出ようとした。しかし、ハヤシ課長の後を追うそぶりは見せなかつた。彼らにとっては、トモミさんの行方よりも、いかにして早く食堂に行って昼食を食べるかという問題の方が大事だった。

私はトキタにもトモミさんのことを聞こうと思っていたが、その態度を見て、それは無駄なことだと思い、品質管理部の自分の席に戻った。

席に戻り、また私は考える。

トキタやミヤモトはちよつと変わった人物だと、ヨウコさんからも聞いていた。しかし今日の彼らの態度を見て、変わっているというより、人間として異常だと感じた。

ヨウコさんの自殺があり、トモミさんと二日も連絡が取れない。職場がそのような状況の中、彼らは普段どおりだ。同僚のことを思

いやるといふ気持ちが欠如している。毎日、顔を合わせ働いているのに、関わることを拒んでいる。私は自分がとても思いやりのある人間だと言うつもりはないが、彼らは血の通った同じ人間だとは思えなかった。

人を思いやることができるのが人間性ではないだろうか。

何か欠けている。

欠けている人間に何を言っても無駄なのだ。無からは何も生まれない。

サンタはあの掲示板を書いたのは、本当は一人で、自作自演かもしれないと言っていた。私は、実は、彼らが書いたのではないかと思い始めていた。一人ではなく、二人、いやそれ以上かもしれない。彼らのような感受性の欠如した機械のような人間が、落書きでもするように、面白半分にネットの掲示板に書き込んだのではないか？ 彼らの欠けている心では、それが人にどのようなショックを与えるのかは、解からない。

また、彼らは自分のことを書かれても何も感じないかもしれない。だから、どんな酷いことでも書ける。

しかし、しかし、今となつては、証拠は何もない。彼らを問い詰めても、何も出てこない。それが悔しかった。

省エネのため、昼休みは部屋のライトが消える。

薄暗い部屋の中で、私のパソコンのスクリーンセイバーが、幾何学的な模様を作り出していた。

私はそれを見ながら、彼らのことを考えていた。

「ミツヤ君、おい、ミツヤ君」

気づくと、私の前の席の課長が、薄緑色の袋に弁当箱をしまいがら、私の方を見ていた。

「おい、ミツヤ君、怖い顔をして何を考えているんだ。昼飯は食わないのか？」

私は課長の言葉で、食事をすることを忘れていたことに気づいた。もう昼休みになって三十分くらいが経過していた。

「いえ、ちよつと食欲がなくて」
私はその言葉を濁した。しかし、課長は私の心を知っているのか、
こう話した。

「総務部のトモミさん、まだ、連絡が取れないらしいな。ミツヤ君、
この前ヨウコさんのことがあつて、その友達のトモミさんが心配な
のは解かるが、何か食べておいた方がいい」

「はい、いえ、今日は朝食を食べ過ぎてしまったようで、本当
に食欲がないんです」

課長は机の上にあつたペットボトルのお茶を少し飲み、真剣な顔
をしながら言う。

「トモミさんは両親もいなくて、実家の方にも親戚もあまりいない
らしい。ミツヤ君、君、トモミさんの友達とか、彼氏とか知らない
のか？」

トモミさんには両親がいなかったのか。
私はその時初めてそのことを知った。ヨウコさんからは聞いてい
なかつた。

トモミさんは付き合っている男性がいたのだろうか？これもヨウ
コさんから聞いた記憶がない。また、そういった噂話も聞いたこと
はなかつた。

思えば、私はトモミさんのことをほとんど知らなかつたのだ。ト
モミさんと二人きりで話したのも、ヨウコさんが死んだ後だった。
私はヨウコさんを通じて、トモミさんのほんの一部分を知っていた
に過ぎない。

午後の始業を告げるチャイムが鳴ると、部屋の明かりがついて、
机に伏せて昼寝をしていた社員も起き上がり、にわかに職場は活気
付いてくる。

「何事もなければよいが」
課長はそう言って席を外した。私も席を立って、トモミさんの席
のある総務部の部屋に行つてみた。

ハヤシ課長はまだ戻っていなかった。トキタとミヤモトは席に座

って、パソコンに向かっていた。

ふと、トモミさんの席の隣がヨウコさんの席だったことを思い出した。ヨウコさんが自殺した後も、しばらくは机の上はそのままだったが、今見てみると、ノートパソコンもなくなり、机の上には、ヨウコさんがいた時の形跡はなかった。

それは、まるで私の心にぽっかりと空いた穴のような、真っ暗で何も無い空間のようで、急に切なくなった。

そう、ヨウコさんが死んだあの日から、私の心には、真っ暗な、光さえも見えない、深い深い穴が空いているのだ。この穴は永遠になくならないだろう。

私がヨウコさんの席を見つめていると、バタバタとした足音が聞こえた。

総務部部屋の入り口から、足早に、ハヤシ課長が入ってきた。その表情は固く、険しい。

トモミさんに何かあったのだろうか。

ハヤシ課長は自分の席の近くまで来て、やれやれと言いながら、ハンカチを取り出し汗をふいた。私の姿を見つけると、ミツヤ君、と小さな声で言った。

私はハヤシ課長の近くまで行って、耳元に口をよせて小声で聞いた。

「ハヤシ課長、トモミさんは、トモミさんはアパートにいたのですか？」

ハヤシ課長はいったん周りを見渡して、やはり小声で答えた。

「アパートにはいなかった。」

「課長は、部屋に入ったのですか？」

「うん、事態が事態だから、近くに住んでいる大家さんに言って、トモミさんの部屋のドアを開けてもらった。」

私は法律には疎いので、このようなことが一般的に許されるのかは、解からなかった。

「トモミさんの部屋はよく整理されていた。いや、整理されていた

というか、ほとんど無駄なものがない状態で、生活感というものが感じられなかった。まるで引越しをする前の、いつでも出て行けるような状態だった」

ハヤシ課長は力なくそう言った。

トモミさんにいったい何があったのだろうか。私には皆目検討がつかなかった。

「とにかく、まったく手がかりがない。今から、このことを総務部長に伝えて、今後の対応を決めなければならぬ」

私とハヤシ課長は小声で話していたのだが、ミヤモトにはその会話が聞こえたようだ。突然、私たちの会話に割り込んできた。

「課長、これは、警察に届けて、指名手配をしてもらうべきではないでしょうか？」

ミヤモトの発言は、小声ではなく、周りの人にも聞こえていた。総務部とその隣にある他の部署の社員にも、その言葉は聞こえたようで、みないつせいにミヤモトの方を向いた。部屋の中は騒然としていた。

「馬鹿、指名手配ってなんだ。それを言うなら、捜索願いだらうが」
ミヤモトはポカンとしていて、自分の発言の意味が解かっていないようだった。

「とにかく、一度、部長に話をする。場合によっては捜索願いを警察に依頼することになるだろう。我々はできる限りのことはした。後は警察に任せるしかないような気もする」

ハヤシ課長は冷静にそう言って、深いため息を吐いた。

その時、トキタが言った。

「トモミさんって、彼氏いたのかなあ。彼氏とどこかに一緒に楽しんでるんじゃないですか？」

私はその発言を聞いて、頭の中で、何かキレた。この男は、このトキタという男は何というデリカシーのない男なのだろう。

何か欠けているかと思っていたが、欠けているからといって、それを許すことは私にはできなかった。言っても無駄なことは解かって

いるが、体が反応した。

「おまえ、何いってんだよ」

私はハヤシ課長の席から、トキタの前まで行って、彼の顔をにらみつけた。私は右の拳を握り締め、トキタを殴りつけようとした。

その瞬間、ハヤシ課長が、私とトキタの間に入ってきた。

「ミツヤ君、落ち着け、この男は相手にするな」

ハヤシ課長はそう言って、私の右手を握って、トキタから遠ざけた。私はそれでも怒りが収まらず、ハヤシ課長を押しつけて、またトキタに近づく。

トキタは少し怯えたような表情になっていた。

「ミツヤさん、何むきになってるんだよ。まだ二日連絡がないだけだよ。トモミさんもヨウコさんのように」

トキタがそこまで言った時、ハヤシ課長は、トキタを突き飛ばした。トキタはよろよろとよろけて、ハヤシ課長の方を睨んでいた。

「課長、何をするんですか。これは暴力ですよ」

総務部の部屋の社員が、私たちの行動を凝視していた。部屋は静まり返っていた。

ハヤシ課長は、しばらくトキタの方を見て、沈黙していた。

「暴力でもなんでもいい。とにかくおまえは黙っている。ミツヤ君ももう自分の席に戻れ」

トキタは一瞬、私の方を睨んで、乱暴に自分の椅子に座った。

私の怒りはまだ収まらなかったが、ハヤシ課長の言葉にしぶしぶと従って、総務部の部屋を後にした。周りの社員の目が私に向けられている。その刺すような視線が痛かった。

私が自分の席に戻ると、すぐにハヤシ課長がやってきた。

「ミツヤ君、とにかく上に相談して今後の対応を決める。決まったら君に連絡するから、今日のところは我慢してくれ。トキタはああいう人間なんだ。君が真剣に相手をするのは君にとって為にならない」

「搜索願は会社から出すんですか？」

「トモミさんの身内がないから、おそらくそういうことになると思う。また何かあったら協力してくれ」

ハヤシ課長はそう言うのと、また部屋を出て行った。おそらく部長に相談に行ったのだろう。

私の隣の新人社員が、目をパチパチしながら、私の顔を見ていた。おそらく私がこんな行動に出るのが、信じられないのだろう。

新人社員以外の私の席の周りの社員は、私の方を見ようとはせず、ノートパソコンに向かって仕事をしているふりをしていた。

私はヨウコさんの死の後、明らかに、感情的な、短絡的な行動をすることが多い。これまで、真面目社員で、会社では感情を表に出すことは少なかった。ヨウコさんの死は確実に私の心を変えている。それほどヨウコさんの死は、私にとってショッキングなことだったのだ。

私は自分の席に座り、大きなため息を吐いて、部屋の天井を眺めていた。仕事をする気はまったくなかった。

その時、私のシャツの胸ポケットにある携帯が振動した。私は携帯を取り出して、液晶画面を見る。

着信。

それはサンタからの電話だった。

私は慌てて席を立ち、廊下に向かって歩きながら、電話に出た。

「もしもし、あ、ミツヤさん、俺」

サンタのとぼけたような声が聞こえた。私はつい大きな声になって言った。

「おい、サンタ！どこにいるんだ。この二日間、ずっと電話してたのー」

「ちょっと、携帯がつかないところにいた」

「まあ、いいけど。今、大変なことになっている」

「トモミさんのことでしょ」

サンタはさらりと、そう言った。私は驚いて、携帯を落としそうになる。

「何故、知ってるんだ。そう、トモミさんの行方が解からなくて、会社でちょっととした騒ぎに。サンタ君、君、もしかして何か知ってるのか？」

「知ってるも何も、彼女は俺が助けた」

「助けた？」

「そう、彼女は樹海で首を吊っていたんだ」

私は一瞬、頭の中が真っ白になってしまった。

「樹海って」

「富士の青木ヶ原。河口湖の近くにある天然記念物で、自殺の名所」

「何故、そんな所に。それでトモミさんは、トモミさんは無事なのか？」

「何とか命だけは。でも意識がない」

「どこだ？君は今どこにいるんだ」

「まあ、ミツヤさん、ちょっと落ち着こうよ。トモミさんは富士吉田市の病院で治療を受けている。電話番号は、0555・XX・XXX」

「ちょっと、待って、もう一度言ってくれ」

私は手帳を取り出し、サンタの言った電話番号をメモした。

「すぐにそっちに行く。サンタ君、君もその病院にいるのか？」

「うん、いるけど、今から帰ろうかと思っていたんだ。いろいろしつつこく警察に聞かれて、疲れたし」

「いや、僕がそっちに行くから、そこで待っていてくれ。そもそも、何故、君は、トモミさんが、その、その樹海にいたことが解かっただんだ？」

私は半ばパニックになっていた。

「それは、ちょっと複雑で、電話で話すと長くなる。解かったよ。俺、ここで待ってる」

サンタはそう言って電話を切った。

私は何が何だかさっぱり解からなかった。しかし、とりあえずトモミさんの行方は解かった。私はすぐにサンタから教えられた番号

に電話した。

コールが何回か続いた後、女性が電話に出た。

「はい、スズキ総合病院です」

女性の声がそう言った。私は落ち着いて言う。

「すみません。そちらにトモミさんという女性が入院していないでしょうか？」

「少々、お待ちください」

電子的な保留音が流れた。私はいらいらとしながら、そのクラシックのメロディを聴いていた。しばらくすると、今度は男性の声に変わり。こう言った。

「もうしわけございませんが、あなたのお名前を覚えていただけないでしょうか？」

私は落ち着いていたつもりだったが、つい、自分を名乗るのを忘れていた。

「すみません。私、トモミさんと同じ会社のもので、ミツヤと言います」

「そうですか。確かにこちらの病院に入院しています。あなたはどこでこのことを知ったのですか？」

男は冷たい口調でそう言った。私は早くトモミさんの容態を知りたかった。

「その、トモミさんを助けたサンタという男が私の知り合いでして、その男からこの病院の電話番号を聞きました」

私はトモミさんのことで、変に疑われ、話が混乱するのを避けるため、正直に話した。病院ではサンタのことは知っているだろう。

「そうですね。実は私は山梨県警のシバタといいます。我々もサンタ君から話を聞いて先ほどそちらの会社に連絡を入れました、いろいろと事情を聞きたいのでミツヤさんもこちらに来ていただけませんか？」

男は坦々とした口調で言った。

「もちろん行きます。それより、トモミさんの容態は、どうなんで

しょうか？」

「トモミさんは首を吊った状態でサンタ君に発見されました。発見がもう少し遅かったら絶命していたでしょう。命は何とか取り留めました。ただまだ意識が戻りません。おそらくなんらかの後遺症が残るでしょう」

私は何ともやるせない気持ちになった。いったいトモミさんに何があつたのだろう。

「ミツヤさん、遠いところ申し訳ないですけど、こちらに来ていただけますね？」

私は力なく、解かりましたーと言い、電話を切った。

その時、総務部の部屋から、ハヤシ課長が私の方に向かい、バタバタと走ってくるのが見えた。

「ミ、ミツヤ君、今、連絡があつた。山梨だ。トモミさんが見つかった」

ハヤシ課長の顔面は蒼白で、呼吸も乱れていた。

私も今そのことを知ったばかりだが、サンタのことを話すのはことを複雑にすることになるため、今、聞いたふうにした。

「ええ、山梨？何故そんな所に？それで、トモミさんは無事だったんですか？」

ハヤシ課長は、ハンカチを取り出し、汗をふきながら言った。

「命は無事らしいが、意識不明の重態だ。まったくどうなってるんだ。ああ、何故樹海なんかで、何故こんなことになっちゃうんだ」

ハヤシ課長はそう言って、しばらく頭を抱え込んでいたが、はつとして顔を上げて言った。

「とにかく、私と部長はすぐに山梨へ向かう。ミツヤ君、君はどうする？」

「僕も後から別で行きます」

私はハヤシ課長の目を見ながら、そう言った。

「それじゃ、くれぐれも気をつけて。それからこのことはまわりに

は言わないでくれ。まだ事情がさっぱり解かっていないんだ。頼む」
ハヤシ課長はそう言うと、バタバタと走って私から遠ざかっていった。あの慌てようでは、私が何も言わなくても、トモミさんに何かあったことはすぐに社内の噂になるだろう。

私は品質管理部の自分の席に戻り、帰り支度を始めた。となりの席の新人社員が、そんな私の姿を見て言う。

「ミツヤさん、帰るんですか？」

「ああ、ちよつと急用ができたので、今日は帰らせてもらおう。課長が来たらそう伝えてくれ」

私の前の席の課長は不在だった。新人社員だけでなく、私のまわりの社員も私の行動を凝視していた。

「総務部のトモミさんに何かあつたんですか？」

私のまわりの社員が、私の答えを聞こうと待ち構えているのを、ひしひしと感じた。ハヤシ課長からは何も話すなと言われていたが、先ほどハヤシ課長がバタバタと部屋を出て行くのをみんな見ている。今さら何もなかったなどということは通用しないだろう。私はどういう対応をしようか、少し悩んだ。

「うん、ちよつとね」

「まさか　！？」

新人社員は私の顔を凝視していた。

「いや、大丈夫だよ。たぶん大丈夫だよ」

私の言葉は答えになっていない。何が大丈夫なのだろうか。でも、そういう言葉しか私には浮かばなかった。

私はまわりの刺すような視線を浴びながら、Windowsを口グオフして、部屋を出て行った。

トモミさんの行方

私は会社の重厚な門を出て、駐車場へ向かった。空は曇っていて太陽は霞んでいた。鈍い光が辺りの景色を包んでいて、生温かい空気が私の体を押さえつけているように感じた。私は重くなった体を何とか動かし、一足一足、ゆっくりと歩いた。

何故、トモミさんが。

サンタの話、山梨県警のシバタという男の話、おそらくトモミさんは自殺をしようとしたのだろう。

あまり詳しくは知らないが、藤の樹海といえは自殺の名所だ。後追い自殺というのがあった。トモミさんは、ヨウコさんの自殺にシヨックを受け、自ら後を追ったのだろうか。それも考えられる。事実、私もヨウコさんの死の直後は、もう生きている意味がないと考えていた。

私は車に乗り込み、エンジンをかけた。まず、アパートによって着替えなど、準備をしようと思った。山梨までは車で五、六時間かかるだろう。時計を見ると午後三時ちょっと前だった。今日は泊まりになるだろう。

車を運転しながらも、考える。

先ほど、病院に電話したのは、軽率だったような気がしてきた。サンタに教えられて、思わずすぐに病院に電話してしまった。それで山梨県警の男に私とサンタのことを話してしまった。

考えてみれば、これはちょっとおかしい。

トモミさんを発見した少年サンタ。愛知県に住む少年が富士の樹海で愛知県に住む女性を助ける、これは、まあ、偶然だといえなくもない。

しかし、その少年の知り合いが、助けられた女性と同じ職場だという。

これは、もう偶然ではすまない。山梨県警のシバタという男が、

私に来るように念を押したのは、そういうことだろう。

しかし、私は、それはそれでよかったのだと思った。トモミさんまでこんなことになってしまって、私とサンタだけでヨウコさんの死の理由を探るのは限界だと思った。これまでのことをすべて警察に話し、警察で調べてもらうのが最適な選択だと思った。

ふと、サンタの顔が浮かんだ。

彼はどののだろうか？

アパートについて、旅の支度をして、車に乗り込もうとした時、愛知県警のサカキバラ警部の顔が浮かんだ。

何かあつたら連絡してください。

人懐こい丸い笑顔でそう言っていた。

警察に任せるのであれば、連絡は早い方が良いと思い、私はサカキバラ警部に電話した。

コールが続く。私は荷物を車の後部座席に放り込み、ルーフに寄りかかりながら、電話がつながるのを待った。

「はい、刑事課です」

若そうな男の声が聞こえた。サカキバラ警部ではなかった。

「すみません。私、ミツヤといいますが、サカキバラ警部をお願いします」

「サカキバラですか」

若そうな男はそう言いながら、あたりを探しているようだった。

「えーと、ちょっと今出ちゃっているようですね。どうしましょう？」

私はサカキバラ警部と一緒に来たクワタ刑事のことを思い出した。

「すみません、それではクワタ刑事はいますでしょうか？」

「クワタですか、ちょっとお待ちください」

カタリと音がした。受話器が置かれたようだった。

おーい、クワタどこ行ったんだ？

何、帰った？

何考えてんだ、あのくそ女。

遠くで声、そんな声がした。

「すみません。クワタもちよつと出ちゃってますが」

「そうですか。それでは結構です」

私の言葉が終わる直前にぶつりと電話が切れた。

私は少しむっとして、車に乗り込もうとしたが、クワタ刑事の携帯番号を登録したことを思い出した。

今度はクワタ刑事の携帯にかける。

「もしもし」

透明な、しかしはっきりとした声が聞こえた。

「ミツヤです。こんにちは」

「ああ、ミツヤさん。どうも」

「クワタさん、今、ちよつとよろしいでしょうか？」

「いいけど、何？」

「その、私の会社のトモミさんが、富士の樹海で首を吊っているのを発見されました」

クワタ刑事は何も言わない。沈黙がしばらく続いた。

「まだよく解かっていなくて、私もこれから山梨へ行くところです」

クワタ刑事はまだ黙っている。

「トモミさんって、ヨウコさんの親友だった人だよ。その人が樹海か」

ようやくクワタ刑事が話した。頭の中でヨウコさんの事件を整理しているようだった。

「ミツヤさん、わたしも連れてってくれる？」

クワタ刑事が突然言った。

クワタ刑事の話は強引だった。

「サカキバラ警部は今手が離せないの」

「トモミさんのことは気になるけど、事件性がなければ、愛知県警は、山梨に問い合わせるだけ。それでは何も解からないでしょ」

「だから、私を連れていって、ただし、警察関係者だということとは、伏せておいて」

「いろいろと面倒なのよ、警察つて。管轄が違えば、別会社だと思つて」

「ミツヤさんと一緒に行きたいの。いいでしょ？」

クワタ刑事は、まるで聞き分けのない子供のように、屁理屈をこねた。最後はしかたなく、私が折れ、結局、私とクワタ刑事は、私の車で一緒に山梨の樹海へ行くことになった。

クワタ刑事とは名古屋駅の近くで待ち合わせをする事になった。私は愛知から山梨へは中央高速道路を使うルートで行くつもりだった。私の住む町のインターチェンジからまず東名高速に乗って、直接、中央高速道路に乗るつもりだったが、クワタ刑事を乗せるため、名古屋インターで高速を降りた。

私は夕暮れの名古屋市街をカーナビに案内されながら、クワタ刑事と待ち合わせのコンビニへ車を走らせた。時刻が午後六時になるうかというころ、ようやくそのコンビニを発見し、駐車場に車を止めた。

私はエンジンをかけながら、車内でテレビを見ていた。ちょうど夕方のニュース番組を放送しているところだった。

トモミさんのことが放送されるかもしれない。

私はそう思い、ニュース番組を凝視していた。全国の主なニュースが終わり、地方の話題となった。トモミさんのことは放送されなかった。

その時、こん、こんと、私の車のウインドウを叩く音が聞こえた。振り向くと、外にクワタ刑事が立っていた。

黒いショートペアがコンビニの明かりでつやつやと光っていた。体に密着した黒いTシャツと、細いジーンズを履いていた。全体的にスリムな印象だが、胸は結構ボリュームがあった。

彼女は私の車の前をスタスタと軽やかに歩き、助手席に乗り込んできた。その動作はスマートで、無駄な動きがなかった。

「さあ、行きましようか」

クワタ刑事の顔を見ると、昨日より、顔立ちがはっきりとしてい

「クワタさん、せめてサカキバラ警部には連絡しておいた方が
私は半分涙声になって、そう言った。」

「うるさいわね。解かったよ。後で連絡する」

彼女は私の態度を見て、急速に不機嫌になった。

車は長野県に入った。外はすっかり日が暮れて、星空が見えた。

「ミツヤさん、あなた何か重大なことを隠しているわね」

助手席でうとうととしているかと思っていたクワタ刑事が、急に体を起こして、運転する私の耳元でそう言った。

彼女の突然の質問と、甘い香りが、私の中で交錯して、私は心臓を掴まれたように固まってしまった。

そうか！。

彼女の目的は、これだ。私から何か聞きだすことが彼女の目的なのだ。

そうー、クワタ刑事の昨日とはあまりにも違う変貌ぶりと、強引さですっかり忘れていたが、私は今回のことを警察に任せる気になっていたのだ。

私はサカキバラ警部にすべて話してしまおうと思っていた。しかし、警部には電話はつながらず、予想に反して、クワタ刑事が現れた。彼女は警察関係者であることを伏せて、山梨へ行くという。私は今回の事件のことを、彼女に話すべきか、躊躇していた。彼女がまだ新米の刑事だということもあり、頼りなさを感じていた。

しかし、突然、彼女は私に直球を投げってきた。私の迷いを知っているかのように。

クワタ刑事はどこまで知っているのだろう。

私は意を決した。彼女の言葉で、忘れていたことを思い出した。サンタのことをクワタ刑事に話してしまおう。

ヨウコさんの死後、彼女からのメールが届いたこと。

掲示板があつたサイトのログをサンタが入手して、一部をテキストファイルにおこしたこと。

掲示板にはプロキシ経由で書かれていて、個人の特定が困難であ

ること。

そして、すべての書き込みがプロキシ経由で書かれていて、一人の人間の自作自演である可能性があること。

そんなことを、夜の中央高速を運転しながら、ゆっくりと、クワタ刑事に話した。

クワタ刑事は、黙って、それを聞いていた。

「ミツヤさん、あんた、嘘が下手だね」

クワタ刑事はぶっきらぼうにそう言った。

「昨日のミツヤさん、何か隠していることが見え見え。それで今日は強引に一緒にいる時間を作ったの。トモミさんのことを聞いて、絶対何か話してくれるだろうと思ったから」

彼女はフロントウィンドウから見える夜空を見つめているようだった。

「実は愛知県警ではほとんど何も解かっていないの。あのサカキバラはダメ。ミツヤさんの話はまったく理解していない。あれが来るとやっかいなんで、わたし一人でミツヤさんに会うことにしたの」
クワタ刑事は上司であるサカキバラ警部のことをボロクソに言った。

「何となく、見えてきたような気がする。で、そのサンタってガキは何者？」

私はそう聞かれても、サンタのことはほとんど知らなかった。十五歳の中学生だけど妙に大人びている。先生の研究室で知り合ってコンピュータに詳しい。それに非常に頭の切れる人間だということを話した。

サンタが無免許運転で、酒を飲んだことは話さなかった。

「ふーん、おかしな少年ね。先生ってのは？」

クワタ刑事の質問は先生のことまでおよんできた。私はどう答えているのか、しばらく考えたが、大学時代の恩師で、物理学を研究している教授だと答えた。

「ミツヤさん、言うことはそれだけ？」

クワタ刑事は小さい子供のいたずらを問い詰める母親のような顔になって、私に質問した。

「危ないから、しつかり、前は見ていてね」

私はクワタ刑事の顔を横目で見てみると、そう注意された。それも、また母親の言葉のように優しく、厳しかった。

「でも、サンタって子、何故トモミさんが樹海にいるって、解かったの？」

私もそれを知りたい。サンタは話すと長くなるからと言っていた。私はそう、クワタ刑事に伝えた。

ふーん、そう言って、クワタ刑事はしばらく何かを考えているようだった。

「ミツヤさん、疲れてない？」

唐突に、そう聞いてきた。私はそれが、そろそろ休憩しようという、クワタ刑事の提案だと思った。

「そうですね。それでは次のパーキングエリアに入ります」

「うん、それもあるけど、ミツヤさん、この三週間で、恋人のヨウコさんが死んで、トモミさんがまた自殺未遂。落ち込む暇もなく、振り回されて、疲れたでしょ」

クワタ刑事から、そのような思いやりの言葉が出てくるのは以外だった。彼女はその態度とは違い、実は人の気持ちが解かる人間なのだろうか？

「いや、疲れているけど、僕はヨウコさんが自殺だとは思えないんですよ。それで死の真相を知りたい。ヨウコさんを傷つけた人間がいるとしたら許せない。それが今の僕を支えるエネルギーなんです」
私は少し虚勢をはってそう言った。

「そう、ヨウコさんのことが、よっぽど好きだったのね」

クワタ刑事はぼつりと言った。なんだか寂しそうな声だった。

ヨウコさんは、僕のすべてだった。

私はそう言おうと思ったが、クワタ刑事の寂しそうな横顔を見て、思いとどまった。

私たちは諏訪湖のサーブスエリアでちょっとした休憩を取った。クワタ刑事は缶コーヒを飲みながら、喫煙スペースでタバコを吸っていた。私はタバコは吸わないが、彼女のとなりに腰掛けて缶コーヒを飲んでいた。

クワタ刑事の寂しそうな表情は消えていて、ちょっと見下すようないつもの表情に戻っていた。

「そのサントってやつ、ちょっと会つのが楽しみになってきた」

クワタ刑事は薄笑いを浮かべていた。

私はサントとクワタ刑事が対面するのを想像した。性格的に会いそうもない。ひと悶着起こりそうので、憂鬱になった。

私はクワタ刑事に聞いてみた。

「クワタさん、この事件をどう考えます？」

クワタ刑事はタバコをふかしながら、澄みきった夜空を見つめていた。

「まず、ヨウコさんの自殺。これに遺書もなく、自殺する前兆もなかったという点。これが本当に自殺なのか？これが一番のポイント」

クワタ刑事は、タバコをもみ消しながら、そう言った。

「ヨウコさんの死は自殺ではないと」

私はクワタ刑事の大きな瞳を見つめながらそう言った。

「いや、今のところ、まったくそうは言い切れない。サントってガキが入手した掲示板のログは、まあ、酷いことを書いてあったけど、おそらくヨウコさんはそんなことは、全然、気にしていなかったと思う」

そう、私もそう思っていた。ヨウコさんは心が強い人間で、そんなネットの顔も定かでない、落書きのような、戯言を真に受けるとは思えない。

「それでは、ヨウコさんは何故、自ら命を絶つ必要があったのですようか？」

「他の理由があったかもしれない。例えば」

「例えば？」

「恋愛感情のもつれ」

クワタ刑事は、まるで、独り言を言っているようだったが、その言葉は私の心に響いた。

「私は、少なくとも、ヨウコさんと真剣につきあっていました。遊びなんかでは決してない。それはヨウコさんも同じで、二人の心はどこか深いところで、確実につながっていた」

クワタ刑事は、私の話には、あまり興味を示さなかった。

「ミツヤさんは、ヨウコさんのすべてを知っていたの？」

クワタ刑事の顔は真剣だった。私はヨウコさんのすべてを知っていたかと、問われると、少し自信がない。しかし、ヨウコさんと初めて結ばれた日のこと、あれは、まるで、幻想の世界に、立った二人だけが存在するかのようになり、日常から離脱した体験だった。私は少なくとも、ヨウコさんの心のずつとずつと奥にある、魂を感じた。それは、私の人生経験でも、初めてのことだったし、ヨウコさん以外で、そのような不可思議な体験をしたことはない。

「私はヨウコさんのすべてを知っていると思うし、ヨウコさんも、私のすべてを知っている」

私は男女間の愛などということとは、よく解からなかったが、あの日以来、私とヨウコさんは、心の奥底で、つながっていたのだ。少なくとも私はそう感じていた。

「ヨウコさんが、自殺ではないと、仮定する。すると、ヨウコさんは、事故か、あるいは、第三者によって、その命を奪われたことになる」

私は、そのことは、何度か考えてみた。しかし、ヨウコさんが発見された状況。ヨウコさんは部屋に鍵をかけて、両親が入ってこないようにして、睡眠薬とアルコールで、意識を失っている。言わば、彼女の部屋はミステリー小説でいう、『密室』なのだ。

「でも、状況は、第三者がヨウコさんの部屋に入ることは不可能な状況でしたよ」

「密室つて、まるで、推理小説みたいね。あとトモミさんは樹海で自殺しようとしたつて、これもまったく原因不明」

クワタ刑事は続ける。

「トモミさんも何故自殺をしなければならぬの？後追い自殺？」

私はヨウコさんが死んでから、何度かトモミさんに会ったが、彼女は確かに悲しんでいたが、そんなに追い詰められていたのだろうか？

「要するに、不思議なことだらけね。ヨウコさんの自殺を無理やり、原因をこじつけて、トモミさんの自殺未遂にも、後追い自殺なんていう理由をこじつけることはできる。でもそれは真相ではない」

長野県の夜風は、名古屋のそれと比べると、冷たく、乾いていた。「まあ、今のところは、これくらいしか解からないわね。サンタつてガキに話を聞いて、できれば、トモミさんからも話を聞いてみたい」

私ははっとしていた。トモミさんは意識不明の重態だった。トモミさんから話を聞けることができるだろうか？私は彼女の容態が気になり始めた。

「クワタさん、そろそろ行きますか」

「そうね、ここまでくれば、あと二時間くらいつてどこかしら」

このまま行けば、日が変わる前には何とか着きそうだ。私はサーブスリアで給油して、クワタ刑事とともに富士吉田市の病院を目指した。

富士の麓へ

夜の中央高速は空いていた。

私は制限速度を少し超える程度の速度で、車を走らせた。サービスイリアを出た後、クワタ刑事はシートを少し倒して、眠っているようだった。

私の頭は富士吉田に近づくとつれて、段々とさえわたり、そろそろ、午前0時になるというのに、まったく眠気は感じなかった。

大月ジャンクションから、進路を南にとり、都留市を通って、富士吉田インターで中央高速を降りる。サンタから聞いたスズキ総合病院は、富士急ハイランドと富士吉田駅の間あたりだった。

インターを降りると、クワタ刑事が目を覚ました。

「あら、もうそろそろね」

私はカーナビの指示に従って、市内を走る。十五分ほどで、スズキ総合病院の建物が見えた。

「ああ、着きました。クワタさん、あそこです」

クワタ刑事は何も言わず、病院の建物を見ていた。

時刻はちょうど午前0時になるところだった。私たちは病院の駐車場に車を止めて、入り口を探した。病院の周りにはほとんど建物がなく、どこからか虫の音が聞こえた。名古屋に比べるとずいぶんと涼しい。一般外来の入り口は既にしまっていた。裏口にある緊急用の入り口に小さな明かりが点いていた。

「ああ、あそこから入れる」

私はそう言っつて、小走りになって、その入り口に向かった。クワタ刑事も私の後に続く。

「さあて、いよいよ、謎の少年、サンタ君に会える」

クワタ刑事はサンタのことが気になるらしい。

受付でトモミさんの会社のものと告げた。ご苦労様です、ハヤシという人も来ていますよ、と受付の老人は言った。ハヤシ課長は

私たちより、早く着いたらしい。

私とクワタ刑事が、トモミさんのいる二階の病室を目指し、廊下を歩いていると、黒いシャツを着た男が廊下にある長椅子に座っているのが見えた。

男は私たちに気づくと、ゆっくりと立ち上がった。

サンタだった。

サンタは私を見つけると、ニヤツと笑顔を見せた。しかし、私の目には心なしかサンタが疲れているように見えた。

「サンタ君、君はいつたい。」

私は数え切れないほどの質問をサンタに浴びせようと思った。しかし、サンタは私の言葉をさえぎり、こう言った。

「ミツヤさん、トモミさんは二階の集中治療室で、まだ意識が戻らない。まず、二階に行つて、警察と医師から状況を聞くといい。俺の話はその後」

サンタは冷静だった。私にとって、まず、トモミさんの容態を確認することがもっとも重要だ。サンタは廊下の右側にある二階への階段を指差していた。

「そうだな。まずトモミさんの容態だ」

私はそう言つて、階段を目指した。クワタ刑事は立ち止まって、サンタの方を凝視している。

「あんたがサンタってどういうの？」

サンタは思いがけない対面に、目をパチパチとしていた。

「あんた、外人？」

クワタ刑事はサンタに聞く。サンタはきょとんとしていた。

「いや、俺は日本人だけど。あんた誰？」

クワタ刑事は、サンタの顔から足まで、全身をなめまわすように見る。サンタの表情が曇った。

「ミツヤさん、この人、何なの？」

サンタが私に聞く。

私はクワタ刑事から、今日は刑事だということを隠しておくよう

に言われていたことを思い出し、とつさにこう言った。

「いや、彼女はトモミさんの友達で、クワタさんっていうんだ。今日は心配になって、僕と一緒に来たんだ」

サンタは腑に落ちない顔をして、クワタ刑事を見ていた。はたから見ていると、二人は不良少年がガンをつけあっているような感じだった。私はこの気まずい雰囲気を断ち切るように言った。

「クワタさん、とにかくトモミさんの容態が心配です。とりあえず二階に行きましょう」

二階の集中治療室には、私たちは入ることができなかった。治療室の前の長椅子に、ハヤシ課長とコマツというトモミさんと同じ職場の若い男性がいた。

「おお、ミツヤ君、来たか」

ハヤシ課長は私を見つけると、開口一番、そう言った。

「それで、トモミさんは、どうなんです」

ハヤシ課長は青ざめた顔をしていた。その表情から、事態は良くないということが感じ取られた。

「まだ、意識が戻らないんだ。医師はこれは安定剤などの薬を投与した関係だと言っている。でも、意識が戻ったとしても、なんらかの後遺症が残るかもしれない」

ハヤシ課長の表情は暗かった。コマツという男もハヤシ課長の言葉にいちいち頷いていた。

そのとき、廊下の向こう側から二人の男が私たちの方にやってきた。一人は紺色のスーツを着た長身の男だった。頭髪は丸刈りに近い短髪で、その雰囲気はちょっと近寄りがたい威圧感があった。長身の男の後ろには白衣を着た中年の男がいた。おそらく病院の医師なのだろう。

長身の男は私を見つけると、ハキハキした早口で言った。

「あなたが病院に電話をくれたミツヤさんですね」

有無も言わせない断定的な、自身に溢れた言葉だった。男の顔は精悍で、私を見る目は鷹のように鋭かった。おそらく相当頭の切れ

る男なのだろう。

「私は山梨県警のシバタというものです。トモミさんは荷造り用のロープで樹海の木で首を吊っているところをサンタという少年に見されました。ただ、完全に足が地上から離れている状態ではなかったこと、サンタという少年の発見が早かったということもありまして、一命は取り留めました。サンタという少年の連絡で救急車が出動して、この病院に搬送されたわけです」

シバタはそこまで言って、次の言葉を病院の医師に譲った。中年のさえない顔をした医師は、ゆっくりとした口調で言った。

「首吊りでは、完全に意識を失うまで、人にもよりますが、五分程度かかります。その後、絶命にいたるまでには、さらに五分から十分頸動脈を圧迫し、呼吸ができないようにする必要があります。首を吊って、呼吸困難になってから、五分以内であれば、ほぼ後遺症は残らない場合がありますが、五分を超えると高次脳機能障害や麻痺などの後遺症が残ります。今回のトモミさんの場合は発見が五分を超えており、おそらく後遺症が残るでしょう」

中年の医師の言葉はあまり感情を表すことがなく、冷たい口調だった。

「その、後遺症というのはどういったものでしょうか？」

私はおそろおそろ医師に聞いた。

「まだ、何とも言えませんが、例えば、記憶障害、注意障害、遂行機能障害、社会的行動障害などの認知障害、脳の損傷を受けた部位によって異なります」

私は目の前が白くなった。トモミさんは、トモミさんは。

ハヤシ課長も肩を落として、暗い表情をしている。

「ともかく、明日になれば、トモミさんも意識を取り戻すはずですよ。その時、彼女がどういう状態か？今は待つ他ありません」

中年のさえない医師はそう言って、集中治療室の中に入っていた。シバタという男が私の方を見て言った。

「ミツヤさん、発見したサンタという少年にいろいろ聞いたのです

が、いささか納得できないことがあります。ちょっと話を聞かせてくれませんか？」

シバタという男は、私の受けたショックを無視するかのようになり、冷淡に話した。

私は少しむっとしたが、とりあえず、シバタに話をすることにした。しかし、私自身、なぜサンタがここにいるのか、解かっていない。

「シバタさん、私の知っていることは話しますが、私もなぜサンタがここにいるのか解かっていません。まず、サンタと話をさせてくれますか？」

シバタ刑事の顔が曇る。私とサンタが事前に口裏を合わせることを懸念しているようだった。

「いや、まず、ミツヤさんとサンタ君の関係とヨウコさんのことを聞かせてください。先ほど、サンタ君から、いろいろと話を聞いたのですが、いかんせん十五歳の少年の言うことだし、証拠も信憑性もない。その後、サンタ君がトモミさんを発見した経緯を私から話します」

そう言って、シバタは、私を病院の会議室のような部屋に案内した。クワタ刑事は退屈そうに集中治療室の前の長椅子に座って、携帯をいじっていた。

「シバタさん、このクワタという女性も今回のことを知っています。彼女も一緒に話をしていいでしょうか？」

その言葉を聞いて、クワタ刑事は私の方に鋭い視線を向けた。

余計なことを。

彼女の表情はそう言っている。しかしシバタは、まあ、いいでしょう、クワタさんも一緒に話を聞かせてください、そう言っていて、私たち二人は病院の薄暗い会議室のような部屋に案内された。

その部屋はテーブルとパイプ椅子だけが置いてあり、他には「ホワイトボードがあるだけの、がらんとした殺風景な部屋だった。シバタはパイプ椅子に座り、私たちもシバタの対面の椅子に座った。

「ミツヤさん、あのサンタという少年は何者なんですか？」

まず、シバタが私に聞いた。私はサンタと先生のいる大学で出会ったことを話した。そして、ヨウコさんの死のこと、掲示板のこと、ヨウコさんの職場のこと、そして、サンタが掲示板のログを入手したことを話した。

シバタは黙って、私の話を聞いていた。私がひととおり話し終わると、シバタは言った。

「サンタが掲示板のログを入手したというのは本当なんですか？」

私はズボンの後ポケットに折りたたんでいた掲示板のログを印刷した用紙をシバタに見せた。これはクワタ刑事にも見せたものだった。

シバタはしばらくそのログを見ていた。

「この掲示板をヨウコさんもトモミさんも見ていたわけですね。ミツヤさん、あなたは見ましたか？」

私が見た時は既に掲示板は削除されていたこと、そして今はサイト自体がなくなっていることを告げた。

「なるほど、サンタ君からも聞きましたが、掲示板もサイトもなかったので、我々としても、本当にそんなものがあつたのか、少し疑っていました。一応、山梨県警にも生活安全係というものがあつて、このような特定の人を非難・中傷する行為は取り締まっています。今、この掲示板について調査を進めているところです」

シバタはそう言っ、紺の上着を脱ぎ、丁寧に折りたたんで、となりの椅子の上に置いた。

「しかし、ミツヤさん、こういうことはまず警察に連絡すべきではないですか？」

私はぎくりとした。確かに警察にそのような組織があることは何となく知っていた。

「でも、ミツヤさんが見た時は、既に掲示板は削除されてたんだから、内容が解からなかった。連絡しようがないじゃん。削除されていた掲示板のことを警察に言っても何も動いてくれないでしょ」

クワタ刑事が私を援護するような発言をした。シバタはクワタ刑事の方に鋭い視線を向けていた。

「それは、それはそうかも知れませんが。」

シバタは言葉を濁した。

「それより、サンタは何故トモミさんが樹海にいと解かったのでしょうか？」

私は一番聞きたかった質問をした。

「それですが、サンタはトモミさんのブログを見て、彼女が樹海に行くことを知ったと言っています」

トモミさんのブログ？

そんなものがあつたことは、私はまったく知らなかった。

「えーと、ああ、これだ」

シバタは、手帳の切れ端に書かれたURLを私に渡した。私は自分の携帯にURLを入力する。

ブログ

『tomo blog』というページが表示された。まず樹海という文字が見えた。日付は六月三十日。私はトモミさんのブログを過去にさかのぼって、夢中になって読んだ。

クワタ刑事もめんどくさそうに手帳に書かれたURLを自分の携帯に入力している。

.....
2008年06月30日 あそこだったら

小学生のころ、遠足かなんかで、富士山の近くに行ったことがある。

樹海っていう森があって、先生はくれぐれも入らないようにって言っていた。

ネットで樹海のことを調べてみた。

あそこだったら、見つからずに行けるかな

.....
2008年06月26日 もうだめ

あいかかわらず、彼に連絡が取れない。

本当にどうしたんだろう。

首吊り自殺は、足のつく場所なら、痛くないらしい。

後は場所

2008年06月25日 どこで

死ぬのはいいけど、まわりに迷惑はかけたくないな。

どこか人のいないところで、ひっそりと去りたい。

でも痛いのはやだ

2008年06月19日 いなくなりたい

毎日、毎日が辛いです。

いつそ、死んじゃったら、楽になるのかな。

昔買った、完全自殺マニュアルっていう本を読んだりしています。

どこか遠くへ行こうかな

2008年06月12日 いつもどおり

あの子が死んだというのに会社はいつもどおり

あの子の机もそのままにしてある。

彼と連絡が取れない。

どづしたの

電話に出てよ

わたし、一人じゃ苦しいよ

.....
2008年06月08日 とても言葉ではいいつくせない
今日、あの子が死にました。

涙がとまらない。

.....
2008年06月01日 彼と
今日は彼とあって、一緒に過ごしました。

やっぱり、彼と会つと、落ち着きます。

思い切つて、あの子のことを、あの子が私たちの関係に気づいて
いることを話しました。

あの子が既に彼に言っているかもしれない。

彼はとても動揺していました。

話すべきではなかったかもしれない。

大丈夫だよ

彼は優しく抱きしめてくれました。

.....
2008年05月29日 切ない思い
あの子が言った。

彼とは別れるべきだ

私は何も反論することができない。

そう、間違っているかもしれない。

すべて彼女の言うとおり。

でも

でも

もう、どうしようもないの

彼なしでは生きていけない。

この先どうなるか、解からない。

2008年05月28日 あの子のこと

あの子とは同じ職場で、結構仲がいいんだけど、彼とのことは内緒にしていました。

でも、気づいてしまった。

あの子は知ってしまった。

あの子は、彼にとって、特別な存在。

私なんかより、特別な存在。

あの子は、私と彼のことについて、今は、何も言わない。

でも、本当はどう思っているんだろう。

わからないけど、あの子は、私の夢の中で、私を責める。

でも、私は彼が好きだし、どうしようもない。

ああ、どうしようもない。

2008年05月26日 不安定

わたし、どうしたのかな

ちょっと、落ち込んでいます。

精神的に不安定

どうしたのかな

誰か

助けて

2008年05月22日 許して

いけないことなのかな？

それがあなたを傷つけてしまうかもしれないとは思っていた

でも、彼と出会ってしまったから

許してください。

2008年05月21日 どうしよう

わたしと彼のことが、知られてしまいました。

っというか

もう、とっくに知っていたかもしれません。

あのこは勘がいいから。

どうしよう

彼は、知っているのかな？

2008年05月17日 彼

明日、彼に会えます。

知り合ったこと、こんなに好きになるとは思いませんでした。

もう彼なしでは生きていけないくらい

って、ちょっと大げさかな。

でも、わたしの中で、彼の存在はとても大きいです。

明日は何話そうかな。

いつも、いつも、彼に会う前は、あれも話そう、これも話そう、
て、思うのだけど、

彼と会うと、思ったことの半分も話せません。

ずっと、そばにいられたらいいのにな

2008年05月16日 やってられない

今日は、いろいろと忙しかったです。

わたしは会社では総務課という部署にいます。

会社の雑用係ってとこかな？

普段は、あまり仕事がないけど、今日はいろいろな会議が重なっ
て、その準備でどたばたしてました。

うちの課は6人で男4人、女2人です。

今日なんか、動いていたのは、ほとんど女性。

なんだかなあ

せめて言われたことくらいやってほしいな>>男性社員

2008年05月14日 お父さんのこと

遠い記憶の中にある

ほとんど覚えていないけど

時々、思い出すよ

お父さん

わたしのこと、覚えている？

もう、子供じゃなくて、

いやなことや

悲しいことも

いろいろあったよ

2008年05月09日 人

人は何故傷つけ合うのだろう。

わたしが生きていくだけで、多くの人を傷つけている。

そう思うと

悲しくなった。

ブログには約一ヶ月間の出来事が、抽象的に書かれていた。

トモミさんには『彼』がいたこと。

それは許されない関係らしい。

それを『あの子』に知られてしまったこと。

そして『あの子』が死んだこと。あの子が死んだ後、彼と連絡が取れなくなり、トモミさんは急速にうつ状態になって、死にたくなっている。

「あの子っていうのは、ヨウコさんのことだね」

クワタ刑事が携帯を見ながら、言った。

私は何も言わなかったが、それは間違えないだろう。

「彼ってのは誰？まさかミツヤさんじゃないよね？」

私はクワタ刑事の言葉にすぐに反応した。

「そんなわけないじゃないですか！何言ってるんですか」

私は思わず強い口調になった。クワタ刑事は口を尖らせて、はいはい、すみませんと言った。

「このブログに書かれている『彼』とヨウコさんの関係が、トモミさんの自殺と関連性があると思われれます」

シバタは表情を変えずにそう言った。

私は、もしかしたら、トモミさんは、ヨウコさんのことを思って後追い自殺をしたと考えていた。しかし、このブログを読む限り、ヨウコさんの死にはほとんど触れられていない。

私は胸が苦しくなっていくのを感じた。何かが、私の呼吸を邪魔する。冷や汗が背中をつたう。

トモミさんは、あの子は彼にとって、特別な存在と書いている。

あの子をヨウコさんとする、ヨウコさんにとって、『彼』とはどんな存在なのだろうか？

「それにしてはさあ、サンタ君は何故このブログの存在を知ったの？」

クワタ刑事がシバタに聞く。シバタはクワタ刑事の口調に少し眉をひそめた。

「サンタが入手したログに残っていたらしい。掲示板にアクセスする前に表示していたページが解かると彼は言っていた」

「リファラのことかな？」

クワタ刑事は腑に落ちない顔をしていた。

トモミさんのブログの最後の記事は樹海に行くことを示唆している。サンタはそれを見て、樹海にやってきたのだろう。それにしても、よくトモミさんを見つけたものだ。

「とりあえず、サンタという少年の話がほぼ事実だということが解かりました。我々はトモミさんが回復するのを待って、いろいろと話を聞きます」

トモミさんは回復するのだろうか？なんらかの後遺症が残る可能性が高いと、あの医師は言っていた。

「それでは、私は一旦署に戻ります。みなさんはどうします？明日までこの部屋に残ってもらっても結構ですが」

シバタはそう言って、部屋から出て行った。

目覚め

シバタが出て行くと、部屋には静寂が残った。私はしばらく呆然として何も言葉を発することができなかった。クワタ刑事はまだ携帯を見ていた。

私の頭の中に様々な思いがめぐる。「彼」とはいつたい誰なのか？それはヨウコさんにとって、どのような存在なのか？

「ミツヤさん、とりあえず、あのサンタっていう怪しいやつから話を聞きましょうか？」

クワタ刑事が携帯を閉じながら、そう言った。

階段を降りて、一階の受付の方に向かうとサンタが長椅子に座って、PDAの端末を操作していた。私たちの足音に気づくと、ゆっくりと顔を上げた。

「やあ、ミツヤさん」

サンタはにっこりと微笑んで、そう言った。

「サンタ君、教えてくれ。君は何故トモミさんのブログが解かったんだ？」

サンタが何か言おうとしていると、クワタ刑事が横から口をはさんだ。

「って言うか、あんた本当に十五歳？」

サンタはクワタ刑事の方を一瞥すると、PDAを閉じて、険しい顔をして言った。

「ミツヤさん、さっきから、この人、俺につっかかってくるんだけど、いつたい何者？」

だから、トモミさんの友達なんだよ、私がそう言っているうちに、クワタ刑事が早口になってまくしたてた。

「あんたね、十五つてことは、何年生まれ？干支は？星座は？出身地は？」

サンタは目をパチパチさせながら答える。

「一九九三年生まれ。酉だったかな。星座は忘れた」

クワタ刑事は一瞬黙った。頭の中で年齢を計算しているようだった。

「ああ、生まれたのは東京かな。三年前から名古屋に住んでいるけど」

「あんだ、ハーフ？」

「ハーフって何？」

「お父さんか、お母さんが外国人なの？」

クワタ刑事が厳しい口調で聞いた。サンタは何故か黙っている。

「何、黙ってるのよ」

さらにクワタ刑事が聞く。サンタは悲しそうな目をしていて。両親のことには触れられたくないのかもしれない。

「俺、親のことは言いたくない。何故、あんだに言う必要がある？」

クワタ刑事はサンタの悲しそうな顔を見て、はっと、短く息を吐いた。

「まあ、言いたくなければ、いいのよ」

彼女はそう言うと、サンタの横にどすんと、乱暴に腰を下ろした。私もクワタ刑事の横に座った。

「ああ、今日は最悪だ。警察からは執拗に尋問されるし、変なお姉さんからも、いろいろ聞かれる。ミツヤさん、俺、疲れたよ」

サンタは大きく伸びをしながらそう言った。

「まあ、疲れたのは解かる。君はこの二日間、大変だった。でも君のおかげでトモミさんの命が救われた。サンタ君、僕には解からないんだよ。君のこの二日間の行動を覚えてくれないか？」

私はサンタの目を見ながら、優しい口調で言った。サンタは大きくため息を吐くと、話し出した。今度はクワタ刑事も口をはさむことはなかった。

「えーと、もう一二時を過ぎたから、四日前になるかな。俺は掲示板のあるサイトのサーバのログを見直していたんだ。掲示板はプロキシ経由で書かれているけど、そのプロキシサーバのアドレスや、

アクセスしてきたクライアントのブラウザ、OSなんかをいろいろ調べていた。そうしたら、リファラに値が入っているアクセスがあることに気づいた」

「リファラって？」

私がサンタに聞くと、クワタ刑事が言った。

「リファラってのは、あるサイトにアクセスした時に、その訪問者がどこから来たのかってのが書かれているサーバーのログ」

「そう、訪問者が残した足跡だ」

サンタがクワタ刑事の目を見ながら言う。

「そのリファラにトモミさんのブログのURLが残っていたの？」

「うん、アクセスログは膨大だけど、二つか、三つ、トモミさんのブログのURLがあった」

クワタ刑事はサンタの方を向いて言った。

「でも、それ、おかしくない？リファラに残るのはリンクを辿ってきた場合だけ。ブラウザのお気に入りやブックマークにページを登録していた場合は残らないはずよ。トモミさんのブログから例の掲示板へのリンクはなかった」

「それはそうだけど、リファラに残っていたんだ。これは事実。おそらくトモミさんは一時期、ブログから掲示板へのリンクを張っていたのだろう。そのリンクをクリックして、掲示板にアクセスした。でも何故かブログからリンクは消した」

クワタ刑事は納得できないように、首を傾げていた。

「そう考えるしかない。とにかく俺は四日前、トモミさんのブログを見て、これは、トモミさんは死ぬつもりだと思った」

「それで、樹海へ行ったわけ？」

「そう、トモミさんは樹海に行くに違いないと思った。俺はそれですぐ富岳風穴の遊歩道から樹海の内部に入ってしまったんだ。このルートは完全自殺マニュアルにも書いてある」

「それはいつのこと？」

「えーと、昨日の夜、いや一昨日の夜か」

クワタ刑事がサンタの顔を見て、驚いていた。

「あんた、夜、樹海に入ったの？」

サンタはきよんとしていた。

「どうせ、昼でも樹海に入ったら、方角なんて解からないんだ。どこを見ても同じような景色がただ続くだけ」

サンタはなんでもないように言ったが、夜の樹海は私にはとても恐ろしいところに感じた。ただ道に迷うだけではない。毎年何人も自殺者の遺体が発見されている場所なのだ。

「結構、歩き回った。ようやくあたりが明るくなったところ、横に生えた木にロープを結び、首を吊っているトモミさんを見つけた」

私はごくりと唾を飲み込んだ。クワタ刑事も真剣な目をしていた。「木は横に生えていて、ロープを結んだ枝も、そんなに高くないんだ。地面は傾斜していて、トモミさんは仰向けに寝ているような感じだった。ただし、首はロープで吊っていたので、顔は俺の方を向いていたけど」

サンタの話は続く。

「俺は、慌てて、ロープを外して、トモミさんの心音を確認した。微かだけど鼓動があった。脈も取った。確かに血液は流れていた。それで、俺はトモミさんをおぶって、遊歩道に出た」

「あんた、よく迷わなかったね」

クワタ刑事が感心している。

「声が聞こえたような気がした、いやそれは幻聴か。とにかく奇跡的に迷うことなく、遊歩道に出ることができて、携帯で警察に連絡した」

サンタはそこまで話すと、はあと大きく息を吐いた。病院の廊下は暗く、私たちの他には誰もいなかった。深夜の病院は静まり返っていた。

それにしても、このサンタの行動力はどうだろう。自分とはほとんど無関係の人の命を救うため、ひとり、夜の樹海へ入る。私がいもしトモミさんのブログを読んだら、同じことができただろうか？

私はサンタに感動していた。この十五歳になったばかりの少年の勇氣に、素直に感動していた。

自分が十五歳のころはどうだっただろう。中学三年生だ。人の生死なんてほとんど考えていなかった。毎日、毎日、ただ、高校へ入学するために勉強をしていた。

高校に入るため。そう、いい高校に入って、いい大学に入つて、優良企業に就職する。それが、自分の生きる道だと思っていた。サンタは以前、私に言った。

サラリーマンは仕事じゃないよ。

そう、私は自分のやりたいことも知らずに、ただ、決められた、誰かが勝手に決めた、レールの上をあてもなく走っていたのだ。

そして、今もそれは変わらない。ただ何となく会社に行つて、仕事を、わずかな警沢ができるくらいの給料をもらつて、ただ生きていく。

サンタはおそらく、そんなレールの上は走っていない。誰かが決めたレール、そのレールはサンタには見えていないのだ。

だから、だから、こんなことができる。そしてそれが奇跡を呼んだ。私は自分の生き方が間違っていたように思えて、なんだかやるせない気持ちになった。私の人生はドラマティックな奇跡とは無縁なのだろう。

「サンタ、あんた、すごいね」

クワタ刑事が、薄暗い蛍光灯の光で照らされたりノリウムの床を見つめながら言った。その横顔からサンタを見下すような表情は消えていた。

サンタはクワタ刑事の顔を見ながら言った。

「すごいって？」

「だって、自分の安全を放棄している。私だったら、夜、樹海に入るなんてしない。まず、警察に届ける。」

でも、それじゃ、遅いのよね。警察がブログだけで搜索するとは思えないし、警察を説得しているうちにトモミさんの命はなくなっ

たかもしれない。

あなたの行動は無謀だったかもしれないけど、結果的にはよかつた。それが、それが、頭の固い大人にはできないのよね」

クワタ刑事も私と同じことを考えていたようだ。

サンタはゆっくりと立ち上がって、こう言った。

「俺は自分の安全を放棄しているつもりはないよ。樹海についても、あらかじめいろいろ調べて、地形を把握してから入った。最低限の準備はしていたんだ。でもそれは、ほとんど役に立たなかったけど」

サンタが言い終わると、階段を降りてくる足音が聞こえた。

ハヤシ課長だった。ハヤシ課長は私たちを見つけると、バタバタと近づいてきて、大声で言った。

「ミ、ミツヤ君、トモミさんが。トモミさんが目を覚ました！」私とクワタ刑事はハヤシ課長に続いて、二階の集中治療室に向かった。サンタもその後が続いてきた。

集中治療室の前の前まで行ったが、まだ、私たちは中に入ることができなかった。ガラス越しに部屋の中を見ると、先ほど私たちにトモミさんの容態を説明した中年の医師と看護師が、トモミさんのベッドの脇にいた。

トモミさんは上体を起こしていて、中年の医師が何かトモミさんに問いかけている。しかし、トモミさんの目は虚ろで、視線は中空にあった。トモミさんの体には、まだ、いろんなチューブが取り付けられていた。

ハヤシ課長が青ざめた顔をして、私の方を見ながら言った。

「意識は戻ったけど、会話ができないらしい」

見ていると、中年の医師は必死にトモミさんに何か話しているが、トモミさんはまったく反応しない。その顔に表情はない。

「まだ、目覚めたばかりで、記憶が戻らないのかしら？」
クワタ刑事がつぶやくように言った。

私は中年の医師が言った言葉を思い出していた。

トモミさんの場合は発見が意識を失ってから五分を超えており、おそらく後遺症が残るでしょう。

例えば、記憶障害、注意障害、遂行機能障害、社会的行動障害などの認知障害。

私の頭の中で、その言葉が、冷たく静かに再生された。

やはり、後遺症が残ったのだろうか？

サンタは冷静にトモミさんの状態を見ていたが、何も言わなかった。

しばらくすると、中年の医師がトモミさんのベッドから離れて、集中治療室から出てきた。トモミさんの目は相変わらず虚ろで、その体は硬直していて、まったく動かない。

「まだ、よく解かりませんが、彼女には何らかの後遺症が残っています。おそらく、記憶障害。彼女は自分が何をしたか、まったく覚えていないでしょう」

中年の医師は、深刻な顔をして、そう言った。

「トモミさんは、何かしゃべったのですか？」

私は医師に聞いてみた。

「彼女は何も話していない。おそらく脳に障害が残っています。これから詳しく調べてみます」

「彼女と話をしてもいいですか？」

私は聞いてみた。中年の医師はしばらく黙って考えていた。

「短い時間でしたら、いいでしょう。あなた方が何か話したら彼女は反応するかもしれない」

医師は無表情でそう言った。

それで、私たちは集中治療室に入ることを許されて、トモミさんのベッドに向かった。

あらためて近くで見ると、トモミさんの体からいろんな管が出ていて、顔も死人のように青ざめていて、とても痛々しかった。

私たちがベッドに近づいても、トモミさんは中空を見つめたまま、無表情だった。

「トモミさん」

私が話しかける。

しかし、彼女は反応しない。

私は彼女の視線の中に入って、もう一度、話しかける。

「トモミさん、大丈夫ですか？」

思えば、間抜けな問いかけだった。大丈夫なわけがない。

私たちの姿は、トモミさんには見えていない。私の問いかけにも、サントの問いかけにも彼女はまったく反応しなかった。

私がさらに彼女に問いかけようとした時、中年の医師が、手を上げて、私を制し、首を横に振った。

「これ以上は無理です。これから精密検査を行いますので」
その言葉とともに、私たちは集中治療室から追い出される形となった。

私の心の奥の方から、悲しみがやってきた。涙が溢れる。トモミさんの姿は霞んで見えなくなった。

トモミさん、戻ってきてくれ。

私は心の中でそう叫んだが、トモミさんの心はどこか遠い所にあるようだった。

ブログの分析

私たちは二階の会議室のような部屋にとぼとぼと入った。部屋は明かりが点いていなくて真っ暗だった。クワタ刑事が入り口の近くのスイッチを見つけて、明かりをつけた。

部屋の机はこの字型に並べられていた。私が入り口の近くの席に座り、その周りにサンタとクワタ刑事も無言で腰を下ろした。

私は深いため息を吐いて、机の上に肘を寄せ、頭を抱えた。しばらく沈黙が流れた。

「リハビリをすれば、回復することもあるんだ」

サンタがポツリと言った。

「高次脳機能障害が軽度であれば、回復することもあるだろうけど

」

クワタ刑事が、その後の言葉を飲み込んだ。

「まだ、詳細な検査結果が出ていない。だから、ミツヤさん、そんなに悲観することはないと思う」

サンタは明るい声で言った。しかし、私の心は落ち込んだままだった。

トモミさんは両親がいない。親戚もあまりいないらしい。天涯孤独ってことなのだろうか？

病院に親族の人は誰も来ていない。私はトモミさんが孤独で、可哀想に思えて、また涙が出てきた。

その時、会議室の扉が開いて、ハヤシ課長と、トモミさんの職場の先輩のコマツという男が、部屋に入ってきた。ハヤシ課長は先ほどより、顔色は若干よくなったが、表情は暗く、重苦しかった。

「ミツヤ君、我々はいったん会社に戻ることにするよ、ミツヤ君はどうする」

ハヤシ課長は疲れきった声で言った。

「トモミさんの容態が心配なので、もうしばらく残ろうかと思いま

す

「そうか、私もこちらにいたいのだが、今日の午後、重要な会議があつてね。詳細が解かったら病院から連絡をもらつことにした」

「我々がいても、どうしようもない。トモミさんのために何もできないのだから」

コマツがハヤシ課長の言葉に、そう付け加えた。何だか私は帰れと言われたみたいで、気分が悪かった。

「それは、そうですね。僕はせめてトモミさんの精密検査の結果が出るまで、ここにしようと思います」

そうか、ハヤシ課長は、力なく言った。私はハヤシ課長に聞こうと思つていたことを思い出した。

「トモミさんの親戚の人には連絡が取れないのですか？」
部屋から出ようとしていたハヤシ課長が振り返った。

「ああ、トモミさんの叔母さんにあたる人が静岡市に住んでいる。

昨日から何回か電話したけど、つながらない。連絡が取れないんだ」
トモミさんには叔母がいたのか。私はハヤシ課長に連絡先を聞いた。

「私からも連絡してみます。連絡先を教えてください」

ハヤシ課長は手帳をページ破つて、トモミさんの叔母さんの連絡先を書いてくれた。

「じゃあ、とりあえず、我々は帰る。みなさん、ありがとう」

そう言つて、ハヤシ課長とコマツは部屋から出て行った。

私はハヤシ課長からもらった手帳の切れ端を見た。

そこには住所と電話番号が書いてあつた。トモミさんの叔母さんはフジタさんという名前だった。

時刻は午前三時をまわった。

「あのハヤシっていう人、これから帰つて、すぐに会社に行くのかしら？」

クワタ刑事が不思議そうな顔をしていた。

「まあ、おそらく、名古屋に着くのが午前中だから、すぐに会社に

行くと思いますよ」

「休めばいいのに」

クワタ刑事は言う。

「管理職にもなると、そうそう休めませんよ。警察でも
私は思わず、警察でもそうでしょう」と言いかけてしまい、慌
てて口を閉じた。

しかし、クワタ刑事は、私の言葉には気づいていないようで、大
変だよねえ、そこまでして仕事するかなあなどと言っていた。

サンタは部屋の窓から、外を見ていて、私の言葉は聞いていなか
ったようだ。

私はトモミさんのブログを読み返そうとして、携帯を取り出した。
ブログが最初に書かれたのは、五月六日、ゴールデンウィークの
終わりの日だ。

わたしが生きていくだけで、多くの人を傷つけている。
最初からそうなのだが、トモミさんのブログは、すべてにわたっ
て、自虐的だ。

『彼』との関係が知られることを何故か恐れている。『あの子』
に知られてしまうことを恐れている。何故だろう？

許されない恋？不倫か、そんな言葉が頭に浮かんだ。

『あの子』はトモミさんに彼と別れるように言っている。『あ
の子』がヨウコさんだと仮定する。トモミさんは言っている。ヨウコ
さんにとって、『彼』は、トモミさんと『彼』との関係より、特別
だ。

解からない。

私はまったく解からない。このブログから読み取れるのは、トモ
ミさんとヨウコさんと『彼』の三角関係？

私には、ヨウコさんに、私以外の、特別な関係を持つ異性がいた
とは、到底思えなかった。

ヨウコさんの死のことは、あの子が死にました、という簡潔な文
だけで綴られている。

私には解からない。ヨウコさんとトモミさんにいったい何があったのだろう。そして、『彼』の存在が、私の心に不安を与える。その不安はまるで、静かな水面に落ちた小石が作りだす波紋のようにゆっくりと、しかし、確実に、私の心に広がっていく。

私がトモミさんのブログを読み直している間、サンタはまた窓から外を見ていた。クワタ刑事は机の上に頭を伏せて寝ていた。

ふと窓の外を見ると、白々と夜が明けてきていた。時刻は午前四時を過ぎたところだった。

「サンタ君、君はトモミさんのブログを見て、何を思った？」

ぼうつと窓の外を見ていたサンタは、突然の私の言葉に驚いて、急に我にかえったようだった。サンタはゆっくりと私の座っている部屋の入り口の方に近づいてきた。

「俺も、今、それを考えていたんだ」

サンタはそう言つて、私の隣のパイプ椅子に座った。

「トモミさんの『彼』っていうのは、ヨウコさんにとっても、特別な存在だった」

私はつぶやくように言った。

「まず、このブログは本当にトモミさんが書いたものなのか？」

俺はそれを確かめたい気持ちもあつた。だから、樹海へ行った。

樹海でトモミさんを見つけて、それは確実になつた」

「君は、そんな疑いを持ちながら危険な樹海へ入ったのか！」

私はあきれた顔をしていた。しかし、よく考えてみれば、そうなのだ。このブログをトモミさんが書いたということは内容からの推測に過ぎない。

「そうだな、このブログがまったくのデタラメかもしれない可能性もあつたわけだ」

「でも、実際に樹海でトモミさんを見つけた。だから俺はこのブログはデタラメではなく、トモミさんが書いたもの、それも空想や妄想なんかではなく、事実を書いているのだと思う」

サンタは、自信を持って、そう言い切った。

「それじゃあ、君は、トモミさんが書いている『彼』は誰だか見当がついているのか？」

私はサンタの自信に満ちた顔を見て、思い切って聞いてみた。

「いや、それは、まだ解からない。でも『あの子』ってのは、ヨウコさんのことだよ」

そう、それは間違えない。そんなことは私にも解かる。

「それは、僕にも解かるよ。君は今、まだ解からないって言ったよね。いつ解かるの？」

私は馬鹿にされたような気がして、思わずサンタの言葉尻をとらえて、不愉快な質問をしてしまった。

しかし、サンタは私の質問を不愉快には感じていなかった。

「だって、トモミさんがいるじゃん。彼女に聞けば解かる」

それは、そうだが。それはそうだが、彼女の心は閉ざされているのではないか。だから、だから、私は考えているのだ。

もし、トモミさんが、一生このままだったら。

私はそう言おうとしたが、声にならなかった。サンタは私の顔を見ている。それはサンタも解かっているようだった。

その時、突然会議室の扉が乱暴に開けられた。

扉の外には、百八十センチはあるうかという黒いスーツを着て、黒いサングラスをした大男と、やはり黒いスーツを着た小柄な白髪の老人が立っていた。老人の目はサンタの方に向けられていた。

まず、小柄な老人が、ゆっくりとした足取りで部屋に入ってきた。黒スーツの大男の頭はつるつるに剃りあげられていた。その大男も老人に続いて部屋に入ってきた。私は二人の雰囲気圧倒され、口を開けたまま、呆然としていた。

サンタは表情も変えずに二人を見て言った。

「よくここが解かったね」

小柄な老人が答える。

「今日で四日目ですよ。そろそろ帰りましょう」

老人の言葉は丁寧だったが、その声は低く、妙な迫力があつた。

「そうだな、うん、そろそろ、帰ろうかと思っていたところだ」
サンタはそう言って、立ち上がった。

私はサンタに小声で聞いた。

「サンタ君、この人達は？」

「俺の保護者だよ、ミツヤさん。俺、何も言わないで出てきたから心配になって迎えに来たんだ」

そういえば、サンタは十五歳の少年だ。本来は学校に行っていないけれども。私はトモミさんのことで頭がいっぱいになっていて、サンタのことをすっかり忘れていた。

「さあ、帰りますよ。もうこんなことは程々にしてくださいね」

老人が言う。言葉は相変わらず丁寧だ。まるで大金持ちの家にいる執事のように見えた。

「ミツヤさん、そういうことで。俺も帰ります。続きはまた話しましょう」

老人は私の方を見て、小さくお辞儀をした。私も慌てて立ち上がり、お辞儀を返す。

「すみません。私気がつかなくて。その、あの、連絡もせずにサンタ君を引き止めてしまつて」

私が狼狽しながらそう言うと、老人は顔の前で手を振りながら言った。

「いや、あなたは関係ない。この子が自分の意思でしたことです」

老人はそれだけ言って、くると体の向きを変え、部屋の入り口に向かつて歩き出した。サンタは私の顔を見て、軽く右手を振って、老人の後に続いた。

スキンヘッドの大男は一言も話さずに、サンタの後に続いて、部屋を出て行った。

つかの間の休息

大男が部屋の扉を乱暴に閉めると、その音で隣に寝ていたクワタ刑事が顔を起こした。

「うーん、何なのよ。うるさいわね」

クワタ刑事は顔にかかった髪を手で振り払いながら、私の方を見ていた。

「いや、サンタ君の保護者が来て、彼を連れて帰ったよ」

クワタ刑事は目をこすりながら言う。

「あら、そうなの。そういえば、あの子まだ中学生だったよね。すっかり忘れてたけど」

「家に何も言わないで、出てきたらしい。僕もすっかりしていた。

サンタの心配もするべきだった」

クワタ刑事はそれを聞くと、笑いながら言った。

「あの子の心配はいらないと思うけど。保護者って両親が来たの？」

「いや、何か怪しげな二人組みの男だった。こう言うと何だけど、ちよつと堅気には見えないような」

突然、クワタ刑事は大きなあくびをした。彼女はわりと整った顔をしている。その顔が突然大あくびをしたため、私は目のやり場に困ってしまった。

ふーん、あの子、何か不思議よねえ、と言いながら、彼女は大きく伸びをした。

「それにしても、ミツヤさん、これからどうするの？朝になったら、この部屋、病院が使うんじゃない？」

私はここに残ると言ったものの、どこに在るべきか、そんなことは考えていなかった。

「廊下の椅子にでも、座っているよ」

私は半ばやけになって、言う。

「わたし、疲れた。ミツヤさんも疲れたでしょ。トモミさんの検査は時間がかかると思う。それまで少しでも横になって眠りたい」

確かにトモミさんの検査の結果がすぐに出るとは思えなかった。おそらく相当精密な検査をするのだろう。もしかすると今日中に結果が解からないかもしれない。

クワタ刑事は、目を閉じて、何か考えているようだった。

「こんな時間からホテルには入れないし。あつ、ラブホなら入れるか。でもそれはちよつとまずいな」

とんでもないことを言う。私はドキッとしてしまった。私がか何か言おうとすると、クワタ刑事が先に言った。

「そうだ、ミツヤさん、健康ランドにでも行きましょう。あそこなら、お風呂も入れるし、休憩もできる。うん、そうしましょう。石和の方にいい所があるの」

クワタ刑事は新しい玩具を買ってもらった子供のような無邪気な顔をしていた。

私は病院の看護師に、しばらく外に出ることを告げて、トモミさんに何かあった場合や精密検査の結果が解かった場合に、携帯に電話をもらうように頼んだ。

外に出るとまだ日は昇っていないが、辺りは完全に明るく、ヘッドライトを点灯する必要はなさそうだ。カーナビで富士吉田から、石和の健康ランドを検索すると、到着予定時刻は午前六時頃だった。およそ一時間弱の行程になる。

「クワタさん、その健康ランドっていうのは、こんなに朝早くから行っても入れるものなのでしょうか？」

私はこれまで、健康ランドという施設を利用したことがなかった。先ほどクワタ刑事から、ちよつと豪華な銭湯みたいなもので、食事や仮眠が取れる施設だということ聞いた。

「大丈夫、たぶん二十四時間営業だから、いつ行っても、入場できるはず」

クワタ刑事は何故かうきうきしているようだった。

「クワタさんは、そういう所によく行くんですか？」

彼女の風貌からは、とても想像できない。銭湯なんて、もっと年とった老人が好んで行くように思えた。

「最近の健康ランドっていうのは、ただお風呂があるわけじゃないのよ。マッサージやエステ、ネイルアートのお店、後、そうそう岩盤浴なんていうのもあるの。」

わたしは岩盤浴に結構はまってて、よく行くのよ」

クワタ刑事は目を輝かせながら言った。私はトモミさんのことが頭から離れなくて、クワタ刑事のように明るくなれない。

「でも、まだ時間が早いから、岩盤浴は入れないかな？」

クワタ刑事はまるで旅行にでも行くようにはしゃいでいる。

富士吉田から中央高速に乗って、一宮御坂インターで降り、国道二十号を少し走ったら、もう石和の町に着いた。目的の健康ランドは石和温泉街から少し離れたところにあった。

健康ランドに着くころには、東の空から太陽が顔を出していた。

今日は雲ひとつなく、いい天気になりそうだった。

私たちは石和健康ランドの広い駐車場に車を止めた。平日の朝早い時間帯のためか、駐車場はがらに空いていた。

クワタ刑事が先に歩き、健康ランドの建物に入った。思ったより大きな建物だった。ホテルも併設しているようだ。

クワタ刑事は慣れた足取りで玄関に入り、ブーツを脱ぎ、靴口ツカーに行く。私もそれを見て、同じように行動する。クワタ刑事は館内に入るとフロントに向かう。私が迷っていると、クワタ刑事が私の方を見ながら、手を振っていた。

フロントで入場料を支払った。フロントでは腕に巻くタイプの口ツカーキーらしきものを渡された。クワタ刑事は館内施設が書かれたボードを見ている。

「クワタさん、これからどうすればいいのでしょうか」

私は初めてなので勝手が解からない。

「えーと、男湯はあっちね。タオルとかはお風呂場に用意してある

から。まず、お風呂で一汗流しましょう」

クワタ刑事が指差す方に男湯と書かれた暖簾が見えた。私が男湯の方に歩いて行こうとすると、クワタ刑事が言った。

「ミツヤさん、ロッカーキーは必ず身に付けていて。館内の清算はすべてロッカーキーだから」

私は最初クワタ刑事の言っている言葉の意味がよく解からなかった。清算をロッカーキーですか？しかし、その時はあまり気にすることもなく、ただ頷いて男湯に向かった。クワタ刑事は女湯の暖簾をくぐって入って行った。

男湯に入って、自分のロッカーキーの番号と同じロッカーを探す。ロッカーは無数にあり、探すのに少し時間がかかった。

ロッカーの前で、私はワイシャツとTシャツを脱いだ。昨日から着ていて、少し汗臭かった。風呂に入って、さっぱりするのも悪くはないと思った。

浴室の扉を開けて中に入ると、そこは、私が想像したより、はるかに大きな空間があった。なんと小さいがプールまである。それに数え切れないほど多くのお風呂が所狭しと並んでいる。私はちよつとした感動を覚えた。こんな施設があったのか。

私はまず体を洗い、その後、子供に戻ったように、わくわくしながら、その多くのお風呂に浸かった。昨日からの蓄積された疲れが、体から放出されていく心地よさを感じた。

特に朝日を浴びながら入る露天風呂は気持ちよかった。私は広い岩風呂に浸かりながら、空を見てみた。青い空がどこまでも続いていて、私の悩みを解放してくれる。ああ、これが温泉で癒されるということなのだろうか。

三十分以上、温泉に浸かっていたと思う。体がぼかぼかと芯から温まっている。まだ気温は高くなく、時折涼しい風が私の体を撫でる。私は露天風呂に置いてあるデッキチェアに横になって、しばらくまどろんでいた。

私が浴室から出たのは、午前七時を過ぎたころだった。ロッカー

で、浴室の入り口で渡された青い館内着に着替え、男湯の暖簾をくぐって外に出る。あまりの気持ちよさにクワタ刑事のことを忘れていた。

私はクワタ刑事を探そうと、受付をしたフロントの方へ向かって歩いていく。すると不意に後ろから肩を叩かれた。振り向くとクワタ刑事がピンクの館内着を着て立っていた。

「ちょうど、わたしも出たところ。ああ、さっぱりした。朝風呂は最高ね」

そう言って、彼女は私の方を見て笑った。シャンプーの匂いだろうか。何ともいえない素敵な匂いが、彼女の洗い立ての髪から、私の方に流れてきた。少し化粧を落としたクワタ刑事の顔は、まるで少女のようだった。

「ミツヤさん、腹減ってない？大広間で朝飯が食べられるみたい」
クワタ刑事はそう言って、大広間に向かって歩き出した。私はすっかり忘れていたが、昨日はほとんど何も食べていない。それを思い出すと、急に食欲がやってきた。私はクワタ刑事の後に続いて大広間を目指した。

大広間は座敷で五十名くらい収容できるスペースがあった。朝食はバイキング形式で入り口に朝食バイキング千円と書かれた立て札があった。

奥の方に長いテーブルが二列あり、盛りだくさんの料理が並べられている。クワタ刑事はテーブルの方に向かい、ロッカーキーを手首から外し、そばに立っている係員のおばさんに渡した。ロッカーキーにはバーコードがつけられており、おばさんは手に持った機械でバーコードを読み取った。

健康ランドに入る時、クワタ刑事が、ロッカーキーで清算すると言っていたのは、このことだったのか。おそらく館内の買い物や食事は、ロッカーキーのバーコードを読み取ることによって集計され、帰りに清算されるのだ。

これなら、お金を持ち歩く必要がない。合理的だと思った。

私もおばさんにロツカーキーを渡し、バーコードを読み取ってもらい、盆と皿を取った。

料理は豪華というか、種類が多かった。

レタス、タマネギ、トマトなどの生野菜。ポテトサラダ。卵焼き、焼き魚、ウインナー、唐揚げ、野菜炒め、納豆、生卵、いろいろな惣菜、果物 など、実に種類が豊富で、私の皿はあつという間に料理で山盛りになってしまった。

さらにご飯、味噌汁を取ると、私の盆は皿が置けなくなるくらいになった。

クワタ刑事は大広間の真ん中あたりのテーブルに座っていた。私は料理を落とさないよう、ゆっくりと歩いて、クワタ刑事の正面の席に座った。

クワタ刑事の盆の上には、サラダと小皿に料理が数種類あり、ご飯もほんの少しだけだった。

クワタ刑事が私の持ってきた料理を見て、微かに微笑んでいる。私は少し恥ずかしかった。

「わたし、バイキングだと、つい食べ過ぎちゃうのよね」

クワタ刑事は小さな声でそう言った。

「ちよつと取りすぎたかな」

私が苦笑いしていると、クワタ刑事が言う。

「食べられる時に、思いっきり食べるってのはいいと思うよ」

私はクワタ刑事の言葉の意味がよく解からなかった。刑事は食事をとる暇もないほど、忙しいのだろうか。

とにかく、私は、たっぷりと、腹いっぱい食べた。食事の後は、クワタ刑事に教えられて、仮眠室のリクライニングチェアで横になった。しばらくとうとうとしていたが、昨日からの疲れもあり、やがて私は深い眠りについた。

私はおそらく相当深い眠りの中にいたのだろう。夢はほとんど見なかった。

突然、私の目の前に、薄暗い仮眠室の天井が浮かび上がった。そして、右側から人の声がする。

つてますよ。

はあ？。

鳴ってますよ。

ええ？

だから、携帯が鳴ってるって。

ようやく、私はリクライニングチェアの脇に置いた自分の携帯が鳴っているのに気づいた。右隣の男の不機嫌な表情が見えた。

「すみません」

私は慌てて、リクライニングチェアから飛び起きて、携帯を持って、仮眠室を出た。

どれくらい眠っていただろうか？

私の最後の記憶は大広間で朝食をとっていた時のものだった。携帯の液晶画面を見ると、電話番号が表示されていた。私の携帯には登録されていない番号だ。

もしもし。

ああ、すみません、ミツヤさんですか？わたし富士吉田のスズキ病院のミヤハラというものですけど。女性の声だった。慌てている。

あの、その、トモミさんが、トモミさんが、いなくなりました。

もしもし、ミツヤさん、聞いていますか？

トモミさんが、どこかへ消えてしまいました。

女性の声は繰り返す。私は硬直してしまって、言葉を発することができなかった。

樹海へ

私は携帯を持ったまま、しばらく沈黙していた。

「ミツヤさん、聞いていますか？」

病院の看護師さんが、少し大声になって言う。私はそれを聞いてようやく声を発した。

「すみません。聞いています。その、トモミさんが消えてしまったってというのは、どういうことでしょうか」

私はまず事実を確認する。

「トモミさんですが、意識も戻って、歩けるようにもなったので、集中治療室から、一般の個室病棟に移りました。そして、いろんな検査をしていたのですが、検査の合間にちよつと目を離れた隙になくなってしまっただんです」

ミヤハラと名乗った看護師は、私が言葉を話したため、少し落ち着きを取り戻していた。

「病院の中で迷子になっているということはありませんか？」

トモミさんはおそらく記憶が戻っていないのだろう。それで、何故自分が病院にいるのか、解っていないかもしれない。

「入院病棟の看護婦が、何人も手分けして探しました。でも病院内にはいないんです。外へ出たとは思えません」

「それは、どれくらい前のことですか？」

「そうですね。もう一時間くらい経っているかと思います」

看護師の声はうわずっている。

「それで、警察には連絡しましたか？」

「はい、つい先ほど、ミツヤさんに電話する前に連絡して、すぐに病院へ来るそうです」

私は山梨県警のシバタという男の精悍な顔を思い出していた。

「手の空いている先生や、看護婦も外に探しに行っているんですが、まだ見つかりません」

トモミさんは、歩いて外に出るほど、体が回復していたのか。これは予想外だった。

「それですね。実は気になることがありまして」「ミヤハラという看護師が、何か言いにくそうなことを話そうとしていた。」

「気になることというところ？」

私が尋ねると、彼女は小声で言った。

「実はトモミさんのベッドのシーツの上に、ノートをやぶったような紙が置いてありまして、そこに」

私はミヤハラさんの次の言葉を待つ。

「わたしが殺した」と、ボールペンで書いてありました」

わたしが殺したー？

それはトモミさんが書いたこと？

「誰」を殺したのだ？

私の頭にはヨウコさんの顔が浮かんだ。

わたしが殺した。

まさか、トモミさんがヨウコさんか？

しかし、ヨウコさんの死因は睡眠薬の飲みすぎによる自殺のはずだ。やはりトモミさんはヨウコさんと何か争いがあった、それで自分を責めているのだろうか？

それにしても、そんな書置きをするなんて、トモミさんの記憶は戻ったのか？

そして、記憶が戻ったということは、記憶がなくなる前の精神状態でいる可能性が高い。トモミさんはまた同じ行動に走るのだと思う。

「解りました。ミヤハラさん、電話ありがとうございます。これからそちらに向かいます。また何か進展がありましたら、申し訳ないですけど、連絡ください」

私はそれだけ言うと、携帯を切った。

これは想像だが、おそらく、トモミさんは、また自ら命を絶つ

もりだ。

わたしが殺した　　という書置きの意味も気になる。　　いったい、トモミさんとヨウコさんの間に何があったのだろう。

私はすぐにでも、富士吉田のスズキ病院に行こうかと思ったが、クワタ刑事のことを思い出した。健康ランドの広い館内を歩きまわって、クワタ刑事を探すが、見つからない。

彼女の携帯に電話してみたが、クワタ刑事は電話に出ることがなく、留守番電話になってしまう。

とにかく、早く富士吉田に戻りたい。私は健康ランドのフロントにお願いして、館内放送で彼女を呼び出してもらうことにした。仮眠室には女性専用の部屋もある。そこは私は入ることができない。

愛知県からおこしのクワタ様、お連れ様のフロントでお待ちです

そんな館内放送が流れたが、一〇分経っても、クワタ刑事は姿を見せなかった。しかたなく、私は一人で富士吉田に戻ることを決めた。もう待つてはいられない。

私はひとり富士吉田へ向かい、健康ランドを後にした。

私は健康ランドをチェックアウトして、駐車場に向かった。空は曇っており、今にも雨が降りだしそうだった。携帯を取り出して、時刻を確認すると、午後二時をまわったところだった。確かクワタ刑事と朝食を食べたのは、午前八時頃だった。その後、二人は別れて、私は仮眠室で寝ていた。五時間程度眠ったのだろうか。

私は駐車場で自分の車を見つけ、ドアを開けた。むっとした熱気が車内に充満していた。私はそれにかまわず車に乗り込み、エンジンをかけた。そして、窓を全開にして、エアコンを入れた。

とにかく、富士吉田に戻って、状況を確認しなければならぬ。私の気持ちはあせる。すぐにでも車を発進させようと思ったが、サントの顔が脳裏をよぎった。

そうだ、サントに連絡しよう。

私は携帯を取り出して、サントに電話した。しかし、何回も空し

いコールが続くだけで、サンタは電話に出なかった。

この肝心な時に、サンタは何をしているんだ。

私はいらいらしていた。いつかもそうだった。肝心な時にサンタと連絡が取れない。

会社のハヤシ課長にも一報を入れておこうと思ったが、連絡先が解らなかった。

私の心臓の鼓動が早くなっているようだった。それは、おそらくこの何とも言いようのない不安を自分ひとりで抱えているからだ。ほんの少し前までは、サンタもクワタ刑事も一緒だった。一緒にトモミさんのことを考えていた。

それが。

今はひとりになってしまった。

不安は私の心の中に、少しずつ広がっていく。

でも、仕方がない。

私はカーナビの目的地を富士吉田のスズキ病院にセットし、車を発進させた。

ルートは今朝走ったものと同じだったが、国道が多少混んでいて、病院に到着したのは午後三時半頃だった。

病院の駐車場には多くの車が止めてあり、空き場所を見つけるのに少し時間がかかった。私は病院の建物から少し離れた未舗装の駐車場に車を止めて、急ぎ足で入り口を目指す。

昨夜の病院は閑散としていたが、今日は入り口に結構人がいて、タクシーも何台か止まっていた。

私は小走りになっていった。ちょうど出てくる人がいて、入り口の自動ドアがタイミングよく開く。私はそのまま病院に入って、受付を目指した。

「すみません」

突然、私の後ろで声があった。振り返ると看護師が私の方を見ていた。その顔には見覚えがあった。昨日トモミさんの担当だった人だ。「すみません。ミツヤさんですよね」

看護師の表情は切迫していた。

「そうです。ミツヤです。トモミさんは？」

私はつい大声になってしまった。待合室に座っていた人々が私の方を見る。

「ミツヤさん、ちょっとこっちへ来てください」

看護師は階段の方へ向かった。私は看護師を追いかけて、階段を上がる。看護師は昨夜の会議室のような部屋へ私を案内した。

扉を開けて部屋の中に入ると、そこには、山梨県警のシバタという男と、昨夜、トモミさんを診ていた中年の医師がいた。

シバタも中年の医師も、とても険しい顔をして、入り口の近くの椅子に座っていた。その部屋にはホワイトボードがあつて、若い男が二人、携帯で話しながら、何か書いている。その他に二、三人の紺のスーツを着た男がホワイトボードを覗き込んでいた。その光景はまるでテレビドラマで見る犯罪捜査本部のようだった。

シバタは私が部屋に入ってくるのに気づくと、ホワイトボードから目を離し、私の方を見ながら言った。

「ああ、あなたか」

その言葉で部屋の中にいた男達がいつせいに私の方を見た。私は少し戸惑ったが、かまわず、シバタに訊く。

「いったいトモミさんに何があつたんですか？どうなっているのですか？」

「あんだ、なんだよ」

ホワイトボードを見ていたスーツの男が私の方に向かってきた。

男の眉はつりあがっていて、その態度は威圧的だった。私が何か言おうとすると、シバタが椅子から立ち上がって、私と男の間に入った。

「この人はいいんだ、トモミさんの会社の人だ」

男は、シバタにそう言われて、しぶしぶと引き下がった。

「トモミさんは容態が安定してきたので、お昼前に、二階の一般病棟に移りました。そこでCTやMRIなどの検査をしていたのです

が、検査の合間、少し看護師が目を見離した時だと思えます。本当にほんの少しの間なんです。トモミさんはいなくなってしまうた」
答えたのは、中年の医師だった。それは不注意の言い訳をしているように聞こえた。

「いなくなっただって、トモミさんは歩けるほどに回復していたのですか？」

「トモミさんの体に麻痺はなく、立つことも、歩くこともできました。ただ、記憶が戻らないようで、話をすることはなかったのですが」

「それで、まだ、解らないんですか？トモミさんの行方は」
今度はシバタが答える。

「トモミさんがいなくなっただのに看護師が気づいたのが、午後二時頃。彼女は病院の検査服のまま、どこかへ消えてしまった。今、病院とその周辺の聞き込み調査を行っているところです」

私は心の奥からやりきれない思いが湧きあがってくるのを感じた。
「どうして、どうして、トモミさんから目を離したのですか？」

私は中年の医師の顔を見ながら言った。医師は下を向いたまま黙っている。

「ミツヤさん、患者はトモミさんだけではない。一人の看護師がずっと患者についているわけにはいかない」

シバタが医師を庇おうとしているように感じた。さらに、それは、シバタ自身、いや警察自体を援護しているよう思えた。

「トモミさんは、病院の検査服を着たまま、行方不明になった。トモミさんは病院の入り口を出たところを目撃されている。周辺住民への聞き込みをやっているが、その後の目撃情報はない」

シバタはホワイトボードを見ながら言った。ホワイトボードには「二時一〇分、受付」と、斜めの読みにくい文字が書かれていた。

その文字の下には、「山梨交通 なし」、「吉田タクシー なし」といった文字が見えた。おそらくタクシー会社への聞き込みの結果なのだろう。

「今のところ、トモミさんはタクシーに乗った形跡がない。病院には山梨交通のバスも停まるが、バスに乗ったという情報もない」

トモミさんは本当に病院の検査服を着たままいなくなったのか？ 私はまずそれを疑った。病院の白い検査服かなり目立つ。病院の外を検査服で歩いていけば、すれ違った人は必ず気づくはずだ。

「トモミさんは本当に検査服のまま、外へ出て行ったのですか？」

「トモミさんの着ていた服は、病室にすべて残されていました。よって彼女が検査服のまま、病院の外へ歩いて行ったのは間違えありません」

シバタは無表情のまま、そう言った。

「さらに、手の空いている病院の看護師さんと、私の部下が病院内を隈なく探しましたが、トモミさんは見つからなかった。今は、周辺を必死に探しているところです」

トモミさんは樹海へ行ったのでは？

そう、また、樹海へ行ったのだ。

私は病院に着く前から、そう考えていた。

おそらく、トモミさんは自分が何をしようとしていたのかが、解ったのだ。

そして、それが実行されなかったことに気づいたのだ。

「シバタさん、トモミさんは、また樹海へ向かったのではないのでしょうか？」

私は自分の考えていることをシバタに告げた。

「樹海へ？」

シバタは目を細めて、私の方を見ていた。

「ミツヤさん、樹海を調べろって言うのですか？冷静になってください。この富士吉田から、青木ヶ原の樹海、そう富岳風穴のあたりに行くのでしょうか。距離にして十三キロあります。とても歩いていける距離ではない。もしトモミさんが樹海へ向かうとしても、必ず、病院の近くから車を使うでしょう。バスか、あるいは、タクシーか。だから周辺の調査を重点的にやっているのです」

シバタは半ばあきれた顔をしていた。

「トモミさんがいなくなつてから、二時間弱、もし仮に歩いて樹海へ向かったとしても、まだ着いていない。だから、今、樹海を調査する必要はないのです」

シバタの部下と思われるスーツ姿の若い男達も、シバタの言葉に頷いていた。

そう言えば。

そうだ、私は忘れていた。私が健康ランドにいる時にかかつてきた電話で、看護師のミヤハラという女性は言っていた。トモミさんの書置きがあつたのだと。

「わたしが殺した」という書置き。

私はシバタにその書置きのことを聞こうとした時、ホワイトボードの隅に、白い紙が赤く丸いマグネットで貼り付けられているのを見つけた。

私はとっさにホワイトボードに近づき、その紙を手にした。

「わたしが殺した」

紙はごく普通のB5サイズ、大学ノートのページをやぶいたものだ。強引に手で引き裂いたらしく、切り口はきたない。黒いボールペン、そして、おそらく何かやわらかいものの上で書いたのだろう。紙に書かれた文字は窪んでいる。

「ちょっと、あんた、何するのですか？」

シバタの部下の若い刑事が、私からトモミさんの書置きを取り上げようとしたが、私は横を向いて、その手をかわした。

「まあ、いいから」

シバタが部下に言った。

その文字はまるで、小学校低学年か、あるいは幼稚園児が書いたように、形が整っていない。私はトモミさんの書いた字を見たことはないが、トモミさんが書いたものとは思えなかった。

「その紙がトモミさんのいたベッドの上に置いてありました」

シバタはゆっくりと言った。

「我々はヨウコさんとトモミさんの間に何か確執があつたのではないかと考えています。そしてそれが原因でヨウコさんは自殺してしまつた。トモミさんはそう考えて、自分を責めている。ヨウコさんが自殺したのは自分のせいだと思つている」

シバタはそこで言葉を切つて、大きく息を吸い込んで、続きを話す。

「あのブログを読むと、トモミさんはかなりの鬱状態だということを感じられます。それで、衝動的に自殺しようとしたのでしょうか」
私はシバタの言葉を黙つて聞いていた。

「そうだろうか？」

ヨウコさんとトモミさんに、そんな確執があつたのだろうか？

とても想像できない、彼女たちはいつでも仲が良かった。ヨウコさんが死んだ後、トモミさんは、あんなに悲しんでいたではないか？

私にはトモミさんとヨウコさんに確執があつたなんて、到底思えなかつた。

「シバタさん、僕には、トモミさんとヨウコさんの間に確執があつたなんて思えない。何かもつと別な理由があると思います。それが何かは解りませんが」

私はそう言つて、トモミさんの書置きをシバタの部下の若い刑事に渡した。

「ミツヤさん、あくまで仮説です。いくつかの仮説を立てて、地道にそれらを検証して、正解に近づいていく。それが我々のやり方です」

シバタの顔は自信に満ちていた。おそらく、これまでもそうやって、いくつかの事件を解決してきたのだろう。

「ミツヤさん、とりあえずは我々の方で全力をあげて捜査します。おそらく、すぐにトモミさんは発見されるでしょう。だからしばらく待つていてください」

解りました。

私は力なくそう言つて、部屋を出た、待つているにしても、警察

の捜査本部のような、この部屋は居心地が悪い。私は部屋を出て、一階に下りて、待合室に向かった。待合室には、まだ、外来患者がたくさんいて、私はようやく、部屋の隅の方に空いている椅子を見つけて、腰を下ろした。

何だか胸騒ぎがする。

警察は本当にトモミさんを無事保護することができるのだろうか？

ちくちくと心臓のあたりが痛む。

私は何もしなくてもいいのか？

私にできることはないのか？

不意にクワタ刑事がサンタに言った言葉が頭の中で再生される。

でも、それじゃ、遅いのよね。

警察がブログだけで捜索するとは思えないし

警察を説得しているうちにトモミさんの命はなくなっただかも
しれない。

遅いのか？、警察は遅いのか　！。

それが、頭の固い大人にはできないのよね

そう、頭の固い大人。今、再び行方不明になったトモミさんを探しているのは、頭の固い大人。頭の固い警察。

サンタは行動した。無謀だったかもしれないが、トモミさんを救った、

今、サンタが、私と同じ状況に置かれたらどうするだろう。

ただ、待っている？そんなことはしないだろう。サンタなら自分の考えを信じて行動を起こす。

私の考えはどうだろう。

私はトモミさんは、再び樹海へ行くのではないかと考えている。
ならば、樹海だ。

今度は、私が樹海でトモミさんを救うのだ。それが私の使命なのだ。
だ。

私は待合室の椅子に座りながら、そう思った。

樹海へ行く。おそらくトモミさんは樹海にいる。警察の調査で

は発見されない方法で樹海に行ったのだ。

私は立ち上がり、病院を出て、駐車場に向かった。

駐車場の端にある自分の車が、ようやく視界に入った時、私の胸ポケットに入れてあった携帯が振動した。取り出して液晶画面を確認すると、クワタ刑事からだった。

「ああ、ミツヤさん、どこにいるの？そろそろ病院へ戻らない？」

クワタ刑事の惚けたような声が聞こえた。

「クワタさん、僕は今、病院にいるんですよ」

「はあ？」

クワタ刑事は私の言っていることが、とつさに理解できないらしい。

「ちょっと、何言ってるの？病院って、わたしはどうするのよ！」

「トモミさんが、消えたんだ。病院の看護師さんから連絡をもらって、僕は富士吉田へ帰ってきた」

「……」

「クワタさんを探したけど、見つからなかった。館内放送も流したんだよ」

「消えたって、トモミさんが？病院からいなくなったってこと？」

「そう、集中治療室から一般病棟に移って、検査をしている合間にいなくなったらしい」

「そうだったの。わたし女性用の仮眠室で寝ていて、館内放送も聞こえなかった。それで、トモミさんは？まだ見つからないの？」

「山梨県警が捜査しているけど、まだ見つからない。もういなくなつて二時間くらい経っている」

「ふーん、どこ行っただろう。ミツヤさんはこれからどうするの？」

「僕はトモミさんを探しに樹海へ行く」

私は力強く、自分の決心したことを言った。

「樹海？樹海って、これから行くの？一人で？」

「うん、警察は動いてくれない。だから僕が行動するんだ」

「ちょ、ちょっと、それ、無茶！サンタがトモミさんを見つけたのは奇跡なんだって。だめよ、一人で樹海なんか入ったらだめ！」

携帯が振動するのではないかと思うほど、クワタ刑事の声は大きかった。

「大体、何故、トモミさんが、また樹海に行くって解るのよ」

「それは、それは僕の勘だよ」

「何言っているの！ちょっとミツヤさん」

私はそこで携帯を切って、電源をオフにした。そして車に乗り込んでエンジンをかけた。

そこに何かがある

私は病院を出ると、国道百三十九号線を目指して走り出した。カーナビの目的地はサンタがトモミさんを見つけた時に行った富岳風穴にセットしてある。時刻は午後四時頃だった。

空は黒く、今にも雨が降りそうので、窓を開けてみると、生温かい風が車内に入り込んでくる。信号待ちで交差点に停車していると、電線に止まった鴉が、哀しそうな声で鳴いていた。

そう言えば、サンタは樹海へ行く前に準備をしたと言っていた。私はここまで夢中で行動していたが、よく考えると樹海のことについては、ほとんど知らない。

うっそうと木々が生い茂った、日中でも暗い原生林なのだろうか？私はテレビで見たアマゾンやインドネシアのジャングルを想像した。あんな原生林に入ったら歩くのも難しそうだ。青木ヶ原はどうなのだろうか？

そして、樹海では、方位磁石が狂ってしまうということも、何となく知っていた。方向が解らなくなるのだから、迷ってしまうのだ。ちょうど交差点の先にコンビニがあった。私はコンビニに車を止めて、何を準備したらよいのか、しばらく考えることにした。

コンビニの駐車場には、男子学生が二、三人いて、アイスクリームを食べていた。笑顔で何か話している。その姿はとても楽しそうで、悩みなんかないように思えた。

私が、これから自ら命を絶つ人を救い行くのだと言ったら、彼らはどんな顔をするのだろうか。おそらく私のその話は、真面目に受け取ってもらえないかもしれない。ヨウコさんが死んでから、私には非日常的な出来事が起こっている。そして、私がこれからすることも、日常を脱しているのだ。

まず、一番簡単な方法を思いついた。ロープを樹海の入り口の木に結び、もう片方の端を自分が持って樹海へ入ればよい。樹海から

出る時には、ロープを辿って行けば、元の場所に戻ることができる。しかし、これはダメだ。相当長いロープでないと、樹海を歩き回ることができない。そんなに長いロープがコンビニに売っているとは思えない。

次に思いついたのが、何か目印になるものを、道に落としながら樹海を歩くという方法だ。これならいけるかもしれない。

そして、もうひとつ、もっと確実な方法としては、何か目立つ色の紐のようなものを、自分が歩いてきた樹海の木の子に巻きつけておくことだ。これなら、ただ地面に落としておくより確実だ。

私はコンビニに入り、荷造り用の白い紐をひとつ、赤いビニールテープを三つ買った。

お金を払う時に、レジのわきの方に樹海マップという観光客用の地図が置いてあるのを見つけ、一枚もらった。

これで、準備はできた。

そう思って、車に乗ろうとした時に肝心なことを忘れているのに気づいた。自分の服装だ。私は昨日から、ワイシャツとスラックス姿でいる。靴は会社に履いていく革靴だった。

私は苦笑した。自分は落ち着いているつもりだったが、やはり普通の心境ではないのだろう。こんな格好で樹海へは入れない。

私は自分の車の横で、二、三回深呼吸をして、他に何か覚えていないか、もう一度、よく考えた。

黒い空が見えた。

これから日が暮れる。

そうだ、懐中電灯が必要だ。いくら目印をつけても、暗くて辺りが見えなくなったら意味がない。

私はもう一度コンビニに入り、懐中電灯と、予備の乾電池を買った。

今度こそ、準備は整った。着替えのTシャツとジーンズはアパートから持ってきた。後ろの席のバッグにある。樹海に入る前に、駐車場に着替えよう。

私は車に乗り込み、富岳風穴を目指し、コンビニを後にした。

私は一三九号線を富岳風穴に向かって走った。平日の夕方、観光客は少なく、道は思ったより空いていた。三十分もすると、風穴の近くの駐車場に着いた。

駐車場も空いていて、ほとんど、車は停まっていなかった。駐車場から交差点を挟んで、東側に売店があった。売店の前には二、三人の観光客と思われる人影が見えたが、それ以外には、駐車場にも人は見当たらなかった。

私は駐車場に車を止めて、車内で、持ってきたＴシャツとジーンズに着替えた。運転席は外から丸見えだが、人がいないので、恥ずかしくは思わなかった。

着替えた後、私はナップザックに、コンビニで買った荷造り用の紐と、赤いテープ、ペットボトルの飲料水、そして懐中電灯を入れて、ドアを開け、外に出た。

太陽はまだ沈んではいないが、空が曇っていて、辺りはかなり暗くなっている。この時期にしては、気温は低いが、湿度は高いように、私の体はねっとりとした生温かい空気に包まれていて、わずかに汗ばんでいた。

私は車から出ると、売店を横目に見ながら、南の自然道を目指す。売店の店員に何か訊かれるかと思ったが、店員の老人は観光客らしい中年の男性と話しをしていて、私が自然道に入って行くのに気づかないようだった。

樹海の自然道は、私が想像したより、ずっと穏やかだった。アマゾンやインドネシアのジャングルのような険しさは、少なくとも、自然道を歩いている限りは感じない。むしろ、爽やかなハイキングコースというイメージだ。そんな自然道をしばらく歩くと、私からその爽やかな気分はなくなり、背筋に寒気が走った。

看板があった。その看板に書いてあった。

命は親から頂いた大切なもの

もう一度静かに両親や兄弟、

子供のことを考えてみましょう。

一人で悩まずまず相談してください。

私はその看板の前で、立ち止まり、しばらく考えていた。複雑な気持ちだった。やはりここで自殺を図る人はかなりの数なのだろう。こんな看板で、決心した心は動くとは思えないが、そう書かざるえないほど、事情は切迫しているのだろう。

看板を後にして、また自然道を歩く。駐車場で感じた湿気は、感じなくなつて、私の体から汗が消えていく。

道から見る樹海は、それほど、うつそうとしている感じはない。しかし、サンタがいつか言ったように、その景色が同じなのだ。自然道という、人間が作った道がなければ、この同じ景色が、ただ続くことになる。何か目安となるものがなければ、迷ってしまうだろう。

私は歩きながら、どこから本格的に樹海へ入ろうかと、考えていた。

しかし、中々、決心できないでいた。それは、ただ同じ景色が続いていて、きつかけがなかったこともあるが、段々と暗くなつていく空と、同じように暗くなつていく森に、恐怖を感じていたかもしれない。

しばらく歩くと、また看板があった。

「たったひとつの命を大切に」

黒い看板に白い字で、そう書いてあった。私は立ち止まり、そろそろ、本格的に樹海へ入ることにした。

自然道から、一歩足を踏み出し、森に入る。

その瞬間、私のつま先から脳天に向けて、何か冷たいものが、すうっと、通っていくのを感じた。私は一瞬、固まってしまった。

今は？

今の感覚は何なのだろう？

私はナツプザックから、荷造り用の紐を取り出し、適当な長さに切った。そして、看板の下に生えている木の細い枝に、何回か巻き

つけて、しつかりと結んだ。そうしておいて、少し歩いてから、その木を見てみた。

ああ！

解らない。

私が巻きつけたはずの白い紐が見えない。どこだ？

私は小走りになって、戻った。

木の近くまで行くと、私が結んだ白い紐が見えた。

これは、ダメだ！夕暮れで辺りが暗くなっているのもあるが、私がコンビニで買った白い紐は、木のすぐ近くまで行かないと見えない。これから、日が暮れる。そうになったら、こんな目印は、自分が通ったすべての木に巻きつけておくくらいの間隔で実行しないと、まったく意味を成さなくなる。

突然、私は怖くなった。おそらく、顔は青ざめているだろう。

ここは、とんでもない所だ。やめよう。

私には無理だ。

一瞬、弱気の蟲が、私の頭の中で騒いだ。

しかし、何かが、その得体の知れない蟲を追い払う。それは勇気なのか？私には解らない。

私は、今度は、赤いビニールテープを、木の枝に巻きつけて、しばらく歩いてみた。その目印は、やはり、思ったより目立たないが、白い紐よりは幾分ましだ。私は覚悟を決めた。この方法で進むしかない。迷ったら、その時は、その時だ。とにかくトモミさんを探るのが先決だ。

私はこの広い樹海のどこかに、必ずトモミさんがいるのだ。この時、信じていた。そして、トモミさんは、今にも命を絶とうとしている。

私は樹海に来る前によったコンビニでもらった、樹海マップを手にしていた。サンタがトモミさんを見つけたのは、富岳風穴と鳴沢氷穴を結ぶラインの南側だ。私はトモミさんは再びそのあたりに向かったのだと、強く思った。それは、私の頭の中で、どんどん確実

なものとなり、もう疑う余地がないほど、強く信じていた。

この時、何故、私が強くそう思ったのか。それは解らない。とにかく、私は、ゆっくりと、樹海の地を踏みしめて、南に向かつて歩き出した。

自然道を外れると、樹海の土は、短い草や枯葉に覆われていて、ほとんど見えない。また所々に溶岩らしき岩があり、ごつごつとしていて、一歩一歩を踏み出すのも大変になってくる。私は、自分の人生を踏み出すかのように、一歩、また一歩と、ゆっくり歩いた。

しばらく歩いて、また、木に目印のテープを巻く。そして、辺りの景色を見て、できるだけ頭に焼き付ける。そして、樹海マップを見て、自分がどのあたりを歩いているのか、確認をする。三、四回、こんなふうに歩いていたら、もう、日が暮れてきて、マップの小さな文字が見難くなってきた。私は自分が歩いてきた方角を振り返る。目印は見えない。

引き返そう。

今なら、まだ間に合う。

また、私の心で弱気の蟲が騒ぐ。

それを振り切って、私は、南側、と思われる方を向く。そして、また、ゆっくりと歩き出す。

私が自然道を外れて、時間になると三十分くらい経っただろうか？いや、もっと長かったかもしれない。木々の緑は完全に見えなくなり、辺りを闇が支配し始めた。足元も暗く、よく見えない。私はナップザックから懐中電灯を取り出し、明かりをつけた。しかし、その明かりも、思ったより頼りなく、私の視界のほんの一部を照らすだけに過ぎない。

私は、その小さな光の中に、トモミさんの姿を探し、進むべき道の安全を探した。歩幅は小さくなり、私の歩くスピードは、さらに遅くなった。

何度目かの目印のテープを木に巻きつけた。私はそれが無駄な作業のように感じてきた。目印のテープは、一メートルも離れてしま

うと見えない。闇は果てしなく広がって、私の視界を奪う。

空を見てみたが、樹海の木にさえぎられているのだろうか？あるいは曇っているのか、星はまったく見えない。

その時、突然、上方から、黒いものが、私に向かって、押し寄せてくるのを感じた。

見えない闇の重さ。

例えようのない圧力。

ああ、夜は、こんなにも暗く、重たいものだったのだろうか？

圧倒的な黒い力に、私は耐えられなくなり、ついに、溶岩の上に座り込んでしまった。

宇宙にはブラックホールというものがあるらしい。とてつもなく重力が強く、光さえも吸い込んでしまう、暗く、深い場所。原子核もつぶれてしまって、すべての物質が物質として存在し得ない場所。私はまるでブラックホールに落ちてしまったような感じだ。私の意識が崩壊していく。私の体が崩壊していく。この闇の中で、私はそんなふうに感じていた。

しばらく、うずくまっていると、今度は、私のまわりを、何かが動いているような気配を感じた。

私は顔を上げて、闇を見てみた。闇の中をもっと暗いもの、なんと表現したらいいのか解らない。真っ暗な闇で、何も見えないはずなのだが、何かが、無数の何かが、移動していく。ひとつひとつの大きさは、人間の子供、二、三歳の幼児くらいだが、驚くほどその数が多い。それらがいつせいに私の体突き抜けながら、うじゃうじゃと、ちょうど人間が歩くくらいの速度で、通り過ぎていくのだ。

何だ、これは！

私の心臓は破裂しそうなくらい、その鼓動が早くなっている。

何だ、これは！

ふと、声のようなものが聞こえた感じがした。

死ねば。

死ねよ。

死んでしまいなさい。

死ね。死ね。死ね。死ね。

私は慌てて耳を塞いだだが、その声は、直接私の頭の中に入り込んでくる。

死ね。死ね。死ね。死ね。

何だ、これは！

私は頭がおかしくなったのか。私は狂ってしまったのか。

ふうう、ふうう、ふうう。

何かの息遣い。

うふふ、はははは、あはははは。

笑い声が、私の頭の中に響く。

落ち着け、落ち着け、これは幻覚、幻聴だ。私は幻を見ているのだ。おそらく、真つ暗な闇に、私の感覚がついていけなくて、私の脳が、私に幻を見せているのだ。

膝が、膝ががくがくと震えだした。その震えはしばらくすると、全身に伝わった。私は全身を痙攣させながら、恐怖と戦った。そのうち、今度は涙が出てきた。悲しみの涙ではない。恐怖から涙が出るのか？私は手で涙をぬぐいながら、笑い声や得体の知れない息遣いを、自分の頭から消し去ろうと必死になっていた。

全身の震えは段々と収まってきた。しかし、今度は、体が硬直したように動かなくなってきた。ナップザックからペットボトルを取り出そうとしたが、体が思うように動かない。私はやっとの思いで、ナップザックを下ろし、手探りでペットボトルを取り出した。

コンビニで買ったウーロン茶は、ぬるくなっていた。私はキャップを取って、お茶を飲んだ。ウーロン茶の苦い味がした。少なくとも、まだ、私は生きている。そう感じた。

ミツヤ君。

ええ、あれっ！この声は。

ミツヤ君、わたしよ。

ああ、ヨウコさん。ヨウコさんだ。

不気味な低い声を掻き消すように、あのヨウコさんの鼻にかかった懐かしい声が近づいてきた。

ミツヤ君、だめじゃない。こんな所へ来ては。

ヨウコさんの声はやさしく、そう言った。

「だって、トモミさんが、トモミさんがいなくなったんだ」

わかった。わかったから、わたしの言うとおりにして。

本当にヨウコさんなのか？いや、これは私の脳が作り出した幻に違いない。ヨウコさんは死んだはずだ。この声に騙されてはいけな
いと思い、私はヨウコさんの声に訊いた。

「ヨウコさん、どこにいるんだ？君は死んだはずだ」

わたしは別な場所にいるの。どういったらいいのかな。外側。
あなたがいる宇宙の外側。

ヨウコさんの声はそう答えた。私にはその意味はまったく解らな
かった。

いいから、わたしの言うとおりにして。わたしに従って。

ヨウコさんの声は続く。私はもうどうでもいいと思った。このヨウコさんの声が、邪悪な何かが見せている幻でも、私の幻覚でも、そんなことはどうでもいいと思った。私は疲れていた。あの得たいの知れない笑い声や、死ねという低い声と戦うのは、もう疲れた。

立ち上がって、それで、右の方へ向かうの。

ヨウコさんの声は、私に指示する。私はもう何の疑いも持たずにその声に従った。先ほどまでの闇の重さや、体の震えは、いつの間にか感じなくなっていた。

そう、歩いて、それで、次は左へ向かって。

ヨウコさんの声の言うとおりに、私はしばらく樹海を歩いた。どこをどう歩いているのか、私が、今どこにいるのか、そんなことはまったく解らなかった。ただ、ヨウコさんのやさしい声に従った。

ああ、この辺で、この辺で休みましょう。

「ヨウコさん、あなたは、どうして自殺なんか
私がそう言った瞬間、闇の中から、光が見えた。それは、人工的な光だった。」

さあ、ミツヤ君、仲間が来たわよ。

そう言って、ヨウコさんの声は聞こえなくなった。私が感じていたヨウコさんの気配らしきものもなくなった。

闇の中に見えた人工的な光は、懐中電灯の光らしかった。私が持っているものより、その光は強力で、私は眩しくて、目を塞いだ。

「ああ、ミツヤさん。こんなところで何をしているの？」

聞き覚えのある声だ。その声は、サンタの声だった。サンタは、私のすぐ近くまで来ていた。

「サンタ君、君こそ、何故ここが解った？」

「話せば長くなる。後でゆっくりと話すよ」

サンタは、私の腕を取って、自分の肩にまわした。私はサンタに支えられる形となった。

その時、闇の中に、いくつもの光が見えた。その光も懐中電灯の光だった。サンタは、大声で言った。

「おい、見つけたよ。ここだ、ここだ」

サンタは手に持った懐中電灯を振り回していた。
いたか。

こっちらしいぞ。

そういった声が、四方から聞こえた。

この時になって、私はようやく、長い幻から覚めたような気がした。これは夢ではない。私は助かったのだ。

「サンタ君、トモミさんは？」

「トモミさんは、また、俺が助けたよ。この近くにいた。ミツヤさんの勘も中々いい線をついてた」

ああ、よかった。私に本当の安堵がやってきた。体の力が抜けて倒れそうになる。サンタが私を支えた。

「ちよつと、ミツヤさん、大丈夫か？」

「ああ、ごめん。大丈夫だ。ちよつと安心したら急に力が抜けた」

「それとね、犯人も確保した」

サンタがはつきりとした口調で言った。私は何を言っているのか解らなかった。

「犯人つて？」

「ヨウコさんを殺して、トモミさんまで殺そうとした犯人。これで、この事件は解決だ」

事件 ？

解決 ？

ヨウコさんは殺された？

「ちよっと、サンタ君、それはどついう意味だ？」

私は叫ぶような大声で言った。

「話せば長くなる。後でゆっくりと話すよ」

サンタは、また、そう言って、私を支えたまま、ゆっくりと歩き出した。

トモミさんの告白

わたしの最初の記憶は、六畳一間の狭く、薄暗い部屋です。いつもじめじめとして、日当たりが悪くて、いるだけで気分が滅入ってしまうような、そんな部屋です。

わたしと母は、静岡県の富士市のあたりで、そんな六畳一間のお風呂もついていないようなアパートで暮らしていたと思います。それが、わたしの覚えている最初の記憶です。

父親はいませんでした。母は父親のことを何も言いませんでした。わたしは、幼稚園に上がるまで、父親がいないことを、特別なことだとは思いませんでした。

わたしと母だけの生活が、当たり前だと思っていました。今思えば、暗く、狭いあのアパートも、特別不便だとか、不幸だとかは感じていませんでした。まあ、子供というのは、そういうものなのかもしれません。

母は、必死に働いていたのだと、思います。よく覚えていないのですが、わたしは昼間は、託児施設のような所に預けられていたような気がします。夕方、母が託児施設に迎えに来て、わたしは母と一緒に、近所のスーパーで買い物をして、あの暗く狭いアパートに帰る、おそらく、そんな生活を何年かしていたのでしよう。

わたしは、物心ついて、幼稚園に通うようになりました。幼稚園は託児施設のような所とは違って、毎朝、母に送り出されて、友達と一緒にいきます。わたしは、それまで託児施設か、暗く狭いアパートしか知りませんでした。だから幼稚園が別世界のように明るく思えて、毎日、幼稚園に通うことが楽しかったです。

友達もできました。わたしは、それまでひとりも友達がいませんでした。毎日、毎日、あのアパートの部屋でひとりで遊んでいます。だから、本当に、楽しかったです。託児施設でもひとりであることが多く、母以外の人間との交流がめったになかったのです。

わたしの世界が広がるとともに、わたしは少し特別な環境で育てられたのだと思うようになりました。

「トモちゃんのお父さんって、いないの？」

ある時、ふと、友達が、わたしに聞きました。その子に悪気がなかったのは、わかっています。ただ、疑問に思ったことを聞いただけなのでしょう。時々、子供って、残酷なのかなって、思ったりもします。無邪気さが、正直さが、時には人を傷つけてしまうこともあるのですね。子供のころは、そんなことは考えもしませんでした。

わたしは父の顔を見たことはありませんでした。そもそも、普通の家庭には、父親がいて、母親がいるのだということも知りませんでした。ただ、幼稚園の友達の中には、時々、父親が迎えに来ている子もいました。わたしは少し不思議になって、アパートに帰って母に聞いてみました。

「お母さん、トモミのお父さんはどこにいるの？」

それを聞くと、母は目にいっぱい涙をためて、わたしを抱き寄せ、

「ごめんね、ごめんね」
と、ただ、わたしに謝りました。わたしの小さな胸が、母の涙で濡れたことを、今でもよく覚えています。わたしは何かとても、悪いことをしてしまったような気がしました。それで、それから、母に父親のことを訊くのはやめました。母がとても可哀想で、母を悲しませたくなかったからです。

そんな母との二人暮らしは、わたしが、幼稚園を卒園する年に終わりました。

その日のことは、忘れようと思ってても、忘れられません。わたしの記憶の中にしっかりと焼きついていきます。

夏の日でした。夏休みが終わった後なので、九月の中旬だと思いません。わたしが、幼稚園の庭で遊んでいると、ヤマザキ先生が、校舎の方から走ってきました。ヤマザキ先生というのは、わたしがいた白組の担任の先生でした。中年の太った女の先生でした。

そのヤマザキ先生が、大きな体を揺さぶりながら、わたしの方に走ってきました。

「トモちゃん！お母さんが　、お母さんが　！」

先生の顔は真っ青で、尋常ではないことが起きているのが、幼いわたしにもわかりました。わたしはヤマザキ先生に職員室に連れて行かれました。その後、タクシーで、市内の病院へ行きました。ヤマザキ先生はタクシーに乗っている時に、泣いているような感じでした。病院について、小さな部屋に通されました。ベッドに母は寝ていました。

「お母さん、どうしたの？」

「起きてよ、お母さん！」

わたしは何度も、何度も、寝ている母に声をかけましたが、母の顔は真っ白で、二度と目を開けることはありませんでした。ヤマザキ先生も、病院の人も、鼻をすすって、泣いていました。それを見て、わたしは母がもう二度と目を覚まさないこと、つまり、母は死んでしまったのだということが、何となくわかりました。

交通事故　、でした。母は運悪く、交差点の横断歩道を歩いている時、脇見運転のトラックにはねられ、帰らぬ人となったのです。わたしが五歳の時でした。

その時、母の両親は既に亡くなっていました。わたしは、それまで、親戚と呼べる人に会ったことはありませんでした。本当に母以外、まったく知らなかったのです。

母の葬儀は、おそらく、近所の人や、わたしの通っていた幼稚園の先生方が、やってくれたのだと思います。どこだったのか、もうよく覚えていません。小さな会場で、しめやかに、母の葬儀は行われました。わたしは、もしかしたら、母が帰ってきて、笑顔を見せてくれるのではないかと、ひそかに思ったりもしましたが、もちろんそんなことが起こるはずもなく、わたしは、幼い心で、本当に、本当に、母はいなくなってしまうた　、わたしは、独りぼっちになっってしまった　のだと思いました。そうしたら、次から次へと

涙が出てきて、母の棺桶の前で、ずっと泣いていました。

その時、その葬儀場に見知らぬ男が入ってきたのです。三十歳くらい、？せた、暗い顔をした男でした。わたしは、見たことも、会ったこともありませんでした。幼稚園の先生が、その男にいろいろ訊いていました。その答えを聞いて、まわりの大人が驚いているようでした。

母には弟がいたのです。その？せた、暗い顔をした男は、母の弟だったのです。ヤマザキ先生が、わたしの方を見て、涙を拭って、笑顔になって言いました。

「トモちゃん、おじさんだよ。この人、トモちゃんのおじさんだよ！」

わたしは、おじさんという人が、わたしとどういう関係なのか、よくわかりませんでした。その男は、わたしの方を見て、にこにこと笑いました。それは、今思えば、とってつけたような笑い顔でした。

しかし、話がとんとんびょうしに決まって、わたしは、母の弟、おじさんに引き取られることになったのです。わたしは、実を言うと、このおじさんと一緒に暮らすのは、あまり気が進みませんでした。おじさんがどのような人かわからないし、新しい場所で暮らすことにも抵抗がありました。でも、わたしはとても幼くて、独りぼっちで、幼稚園の先生や近所のおばさんも、そうするように勧めてくれたし、どうしようもありませんでした。

おじさんは結婚していて、静岡市の方に奥さんと二人で住んでいました。子供はいませんでした。おじさんが住んでいたのは、静岡市の中心街からちょっと外れた所にあった2DKのアパートです。葬儀が終わって一週間くらいしてから、おじさんと、おじさんの奥さんのタカコさんという人と、三人での生活が始まったのです。もう名前は忘れてしまいましたが、幼稚園でできた友達と離れるのが寂しかったです。

おじさんは、初めて見た時の印象どおりの人でした。無口で、ほ

とんど話をすることがなく、いつも暗い顔をしていました。わたしは、はつきり言って、おじさんのことがあまり好きになれませんでした。

おじさんの奥さんのタカコさんという人は、他人が見ていると、とても明るく良い人なのですが、わたしと二人きりになると、とたんに不機嫌になり、何かとわたしにあたりました。

「何、ぐずぐずしているの」

「あんだ、どういう育てられ方をしたの」

などと言って、わたしがご飯を食べている途中で、突然、食器を下げてしまったり、テレビを突然消してしまったりしました。

でも、そんなことは、おじさんにされたことを思えば、全然、辛くなかったです。わたしは、この人たちに迷惑をかけているのだから、それくらいされてもしかたがないと思っていました。

おじさん、母の弟。何故、この人が突然現れて、わたしを引き取ったのか？今、思い出しても、寒気がします。わたしの母の弟は、わたしにとって、まるで悪魔のような存在でした。できれば思い出したくもありません。わたしが、最初に、この男に持った印象、何故、好きになれなかったのか？それは、おそらく、この男の隠された本質を見ていたのでしょう。

わたしが、最初に叔父を異常だと思ったのは、一緒に暮らし始めて、二週間くらい経った時のことでした。

「トモちゃん、一緒にお風呂に入ろうか？」

晩ご飯が終わった後、叔父はめずらしく笑顔になって、わたしに言いました。わたしは母と暮らしていたころは、アパートにお風呂がなく、よく銭湯に行っていました。銭湯は毎日行けるわけでもなく、子供心にも、家にお風呂があるなんていいなあと思っていました。

それで、わたしは、叔父と一緒に風呂に入りました。お風呂は、今思えば、とても小さかったけど、わたしは何だかわくわくしていたのを覚えています。

わたしは、男の人と一緒に風呂に入るのは初めてでしたが、とくに恥ずかしいとも思いませんでした。まだ、幼くて、そういう気持ちが生える前だったのでしょう。

でも、叔父とお風呂に入ると、恥ずかしいというより、何か気持ち悪い、いやな気分になりました。叔父は、わたしが風呂場に入ると、じっと、わたしの体を見つめていました。なんと聞いたらいのかが、それは、ねっとり絡みつくような視線で、叔父の顔は少しにやけていて、わたしはその視線がとても不快でした。

でも、お風呂に入ると気持ちがいいので、最初はあまり気にしていませんでした。わたしが湯船に入ると、叔父も一緒に入ってきてきました。湯船はとても小さかったので、叔父とわたしの体は自然に密着します。叔父はわたしの体を、抱きかかえるような形になりました。わたしは、無邪気に、お湯をばしゃばしゃ、はいたりして遊んでいましたが、ふと気づくと、叔父の手がわたしの体を撫で回すようにさわっていました。

わたしの小さな胸に手を当てて、さするような仕草をします。そうかと思うと、わたしの太ももの方も執拗に撫で回したりしました。「おじさん、くすぐりたいよ」

わたしは、湯船から出て、叔父に言いました。叔父は薄笑いを浮かべていました。わたしは、かなり不快に感じていましたが、叔父がふざけているのだらうと思いました。

「トモちゃん、体を洗ってあげるよ」
そう言って、叔父が湯船から出て、椅子に座り、わたしはその前に立つ形になりました。叔父は石鹸を取って、手で泡立てて、わたしの体にその泡を塗り始めました。この時も叔父の手は、わたしの体を撫で回すような感じで、わたしはとてもくすぐりたい感じがありました。

母と銭湯に行った時にも、母に体を洗ってもらいましたが、その時は、タオルに石鹸をつけて、痛いほど、ゴシゴシとやられました。でも叔父はタオルは使わず、自分の手で、わたしの体を洗うのです。

わたしの体がほぼ石鹸の泡で覆われました。すると、叔父は、次にお尻の方から、わたしの股間に手を伸ばし、ゆっくりと、わたしのあの場所を二本の指で、さすったのです。

この時、わたしは、とてもびっくりしてしまって、一瞬、体が硬直してしまいました。母には、何度か、あそこを洗ってもらったことがありますが、わたしは自分で洗うようにしていました。母もそこは大事なところだから、トモミがちゃんと綺麗に洗っておくのよ、そう言っていました。

叔父は、わたしのあの場所を、念入りに時間をかけて、さわるのです。しかもその二本の指を、時々、曲げるのです。それは、わたしのあそこの内部まで、侵入してきそうな感じで、わたしは、少し、怖くなりました。

「おじさん、やめて！」

ついにわたしはそう言つて、叔父の近くから離れて、椅子に座っている叔父を見ました。

ああ。

そこに、わたしは、とんでもないものを見ました。

椅子に座つて、わたしを洗ってくれていた叔父の下半身です。わたしは大人の男の人とお風呂に入るのは、初めてで、成熟した男性器を見るのも初めてでした。幼稚園の男の友達のものより、あそこは母の性器も見ることがあります。大人になると、あそこには毛が生えるのだなつてことは、何となくわかっていました。最初に叔父の男性器を見た時も母と同じように毛が生えていて、あとは幼稚園の友達のものより、少し大きいか！くらいしか、気にとめていませんでした。大人になるとこんなふうになるんだな、なんて思っていました。

しかし、椅子に座っていた叔父の下半身は、さっきまでと違いました。さっきまで、下に垂れ下がっていたものが、信じられないくらい大きく膨張して、ほとんど、真上を向いています。その棒状のものは、赤黒く、青い血管が浮き出ていました。

わたしは、啞然として、しばらく、それを見ていました。

叔父は、そんなわたしを見て、にやにや笑っていました。その笑いはとても冷たく、人間のものとは思えなかったです。わたしは、叔父がとても怖くなりました。

叔父は、奥さんのタカコさんがいる時には、わたしに対して冷たいそぶりを見せました。タカコさんがいない時や、二人きりになると、わたしの体をなめまわすように見たり、時には、さわつたりしました。わたしは、それが嫌でしたが、わたしが少しでも不快な顔をする、叔父はとたんに不機嫌になります。

「トモちゃんが、こうして生きていけるのも、俺がいるからだよ」「トモちゃんは捨てられてもいいの？どこにも行くところがないでしょ」

などと、ねちねちと言ってきました。

だんだんと叔父の行為はエスカレートしていつて、わたしが嫌がると、叩いたり、時には蹴つたりしました。わたしは怖くなり、しかたなく、叔父のされるがままにされていました。とても嫌だったけど、お風呂にも一緒に入っていました。

タカコさんと叔父は、わたしが見る限り、あまり仲が良いとは思えませんでした。食事は一緒でしたが、ほとんど会話はありませんでした。タカコさんは、わたしが叔父にされていることは知らなかったのだと思います。また、叔父が、そのような幼児を性愛の対象とする心理を持っていることも、知らなかったと思います。

そんな生活はわたしが小学校に入学してからも続きました。わたしは、幼稚園を卒園すると、近所の公立小学校に通い始めました。幼稚園も好きだったけど、学校も好きになりました。勉強するのも嫌ではなかったですが、学校に行っている間は、叔父や、タカコさんのことを考えなくてもよかったです。だから、わたしは、授業が終わった後も、教室や校庭で遊んでいて、中々家に帰ろうとはしませんでした。そのことで、何度か叔父に怒られました。小学校の先生にも注意されました。わたしは、それほど、叔父のいるアパ

ートに帰りたくなかったのです。

わたしにとって、衝撃的な出来事が起こったのは、小学校二年生の秋のことでした。この日は、わたしの人生の中で、もっとも思い出したくない日です。わたしの記憶から消し去りたい、わたしの人生、わたしの性格、生き方、ものの考え方は、この日の出来事から、すべて変わってしまいました。母が死んだ時もショックでしたが、この日の出来事に比べれば、まだ耐えられます。

その日、学校が早く終わって、たまたま、遊ぶ友達もいなく、前日に早く家に帰るように、先生に注意されていたこともあり、わたしはしかたなく、アパートに帰りました。いつもなら、アパートにはタカコさんがいるのだけど、その日は何故か外出中で、叔父が部屋でテレビを見ていました。わたしは少し驚きました。叔父は一応仕事をしていて、いつも帰ってくるのは夕方です。その日、わたしがアパートに帰ったのは、お昼過ぎでした。

「ただいま」

と、言うのと、奥の部屋でテレビを見ていた叔父が、わたしの方を見ました。

「あれ？トモちゃん、今日は早いね」

そんなことを、例のにやにやした不快な笑顔をしながら言いました。

「おじさん、今日はどうしたの？」

わたしは、そう訊きました。

「今日は仕事が早く終わったんだよ」

叔父はテレビを見ながら、そう言いました。

「お婆さんはどこへ行ったの？」

「おつかいかな、ちよつと外へ出て行ったよ」

叔父は、テレビを見ながら言いました。わたしは、叔父と二人きりでアパートにすることが嫌で、すぐにどこかへ遊びに行こうとしました。

「ちょっと、ミキちゃんと遊んでくるね」

そう言って、玄関から出ようとすると、テレビを見ていた叔父が突然立ち上がって、わたしの前に立ちました。叔父の顔から、不快な笑顔は消えていて、その顔は眉が吊りあがって、まるで仁王様のように怖かったです。

叔父は乱暴にわたしの手をとって、奥のテレビのある部屋まで、わたしを引きずって行って、強引に押し倒しました。そして、わたしの着ていたTシャツを乱暴に、引きちぎるように、脱がせました。わたしは、その時ショートパンツのようなものを履いていたのだと思います。これも、あつという間に、剥ぎ取られて、わたしはパンツだけを履いたまま、床に倒されました。

叔父は、着ていたシャツを脱いで、スエットのようなズボンも脱いで、トランクスだけの姿になりました。わたしは、この時、何をされるのか、わかっていませんでした。しかし、叔父の顔は赤く高潮しており、息遣いも荒く、いつもの叔父とは別人のようで、まともにも叔父の顔を見ることができませんでした。

「おじさん、痛いよ」

わたしは悲鳴をあげました。しかし、叔父はまったく臆することがなく、ついにわたしの下着も脱がしてしまいました。その時、叔父のトランクスを見ました。叔父の股間は膨れていました。わたしはいつかお風呂で見た叔父の勃起した性器を思い出しました。

わたしは、恐怖で、泣き叫び、体をバタバタさせて、抵抗しましたが、叔父が、平手でわたしの顔を何度か殴りました。わたしは、痛いのと、怖いのが入り混じって、涙が出ました。わたしは、泣きながら、必死に抵抗しましたが、叔父はわたしの体を強い力で押さえつけ、そして、ついにトランクスを脱ぎました。わたしは、ここで、目をつむってしまいました。叔父の勃起した性器を見るのは、もう、耐えられませんでした。

また、叔父が、わたしの顔を何度か殴りました。わたしはもう、ぐったりとしてしまいました。

そして。

そして、叔父は、わたしの体を撫で回し、わたしの唇を吸い、わたしの体を舌でなめまわしました。わたしは、もう、わけがわからず、必死にその行為に耐えていました。

そして。

そして。

叔父は、わたしのあの部分を手でこするように、さわりました。それは愛撫といったものではなく、わたしはただ、痛いだけでした。

そして。

ああ、思い出したくありません。叔父は、叔父は、その勃起したものを、わたしのあの部分に。

わたしのあの部分に、最初は軽く当てて、そのうち、強引に、挿入してきたのです。

その激痛は、わたしの中に今でも強く残っています。

わたしの股間から、脳天に、痺れるような感覚が突き抜けました。痛いというのを通りこして、もう、神経が麻痺したような感じでした。

わたしは、性に関しては、まったく知りませんでした。男女がそのようなことをするなんて、まったく知りませんでした。だから、これは、何かの罰なのかと思いました。叔父はわたしのことが嫌いで、わたしに折檻しているのだと思いました。

叔父は挿入したまま、ゆっくりと腰を動かしました。わたしは、無我夢中で、痛みに耐えました。ずっと目を瞑っていたのですが、一瞬、目を開くと、わたしの上に叔父の顔がありました。息を荒げていました。そしてその目はどこか遠くを見ているようで、焦点が定まっていませんでした。わたしは、もう抵抗する気力もなく、ただ、涙を流しながら、この苦痛が早く終わってくれることを祈っていました。

それが、セックスなのだという事は、その時はまったく知りませんでした。

叔父の、わたしに対する酷い仕打ち、性的な虐待は、わたしが小学校三年生にあがってからも続きました。わたしは、とても嫌で嫌で、たまらなかつたです。何故、わたしがこんなに酷い目にあうのか、何故、叔父は、わたしにこんなに嫌なことをするのか？幼い心で考えましたが、性に目覚めていないわたしにとって、叔父の歪んだ性的欲求などというものは、まったくわからなかつたのです。だから、叔父が、その行為をする時に、わたしは、いつも謝っていました。

「おじさん、ごめんね。許して、許して」
泣きながら、大粒の涙を流しながら、何度も、何度も、叔父に謝りました。わたしは何かわからないけど、叔父が嫌がることをしてその罰でセックスさせられるのだと、思っていました。でも、そんな声は、叔父には聞こえていないようでした。むしろ、わたしが謝れば謝るほど、叔父の欲求は高まっていくようでした。最後の手段として、わたしは、叔父から逃げようとする、叔父はとても怖い顔をして、わたしを掴み、腕や足、お腹、背中を叩いたり、蹴ったりしてきました。このころ、わたしの体には、いくつもの青あざができていたと思います。

こんな、地獄のような日々が一年くらい続きました。暗く長いトンネルの中を、ひとり歩いていているようでした。わたしは、それでも、何とか学校には行っていました。時々、体がだるくて、行きたくない時もありました。そんな時は、朝、布団から立ち上がるのも、苦痛でした。わたしがぐずぐずしていると、タカコさんが、わたしに罵声を浴びせます。そして、無理やり学校に行かせるのです。わたしは、タカコさんは叔父がわたしにしていることを、何となく知っていたのだと思います。それでも、見てみぬ振りをしていたのでしょう。本当に、地獄のような生活でした。

わたしには、学校に友達が何人かいましたが、こんなことを相談する気にはなれなかつたです。わたしが叔父にされていることを話したら、友達はわたしから去っていつてしまう、わたしはみんなか

ら、気持ち悪がられて、無視されてしまう、そんなふうに思っていました。

学校の先生を含めた大人はもつと信じられなくなっていました。特に男の人に対して、わたしは異常なほど嫌悪感を持つようになっていました。あの先生も、裏では、叔父のようなことをしているのだと思うと、大人はまったく信じられませんでした。だから、先生にも、叔父のことを言う気にはなれなかったのです。

幼いわたしは、ただひとり、地獄のような生活にひたすら耐えていました。これまでのわたしの人生の中で一番暗く、辛い時期でした。わたしがもう少し大きかったら、おそらく、逃げ出すこともできたでしょう。あるいは、叔父を殺すことも考えたかもしれませんが、それくらい叔父のことが嫌いでした。でも、わたしは、その時は、ひたすら耐えるくらいしかできなかったのです。本当に、本当に、もう二度と思い出したくないし、話したくありません。

わたしは、それから、極度の男性不信というか、男性恐怖症になったのだと思います。そして、それは、今でも続いています。幼い日に受けた虐待は、わたしの心の奥底でトラウマとなり、わたしの性格を歪ませました。

三年生の夏休みに入ったころ、朝起きて、キッチンに行くと、タカコさんがいませんでした。いつもタカコさんが、パンを焼いているのだけど、その日はタカコさんの姿がなく、叔父だけが座って、新聞を読んでいた。

「おばさんは？」

わたしが訊くと、叔父はぶっきらぼうに言いました。

「いないよ。出て行った。これからはおじさんと、トモちゃんと二人だけだ」

わたしは、目の前が暗くなるのを感じました。叔父と二人きりになると、叔父という時間が長くなり、あの嫌な行為をもつと多く強要される、そう思いました。

思えば、タカコさんと叔父は元々仲があまりよくありませんでした。

た。この時ついに叔父とタカコさんは別れたのでしよう。その原因はよくわかりません。わたしを引き取ったことも原因のひとつかもしれない。

わたしは夏休みだったけど、叔父の会社には夏休みというものはないらしく、昼間は会社に行っていました。タカコさんがいなくなり、わたしは昼間はひとりにりましたが、タカコさんと一緒にいるより気が楽でした。

あれは、叔父と二人きりの生活が始まって、二週間くらいたった日のことだと思えます。夏休みも終わりが近づき、あれほどやかましかった公園の蝉の声も小さくなり、何だか寂しい感じがする晩夏の夕暮れのことでした。

わたしは、その日、近所の公園でひとりで遊んでいました。わたしはあのアパートにいるのが嫌で、よくその近所の公園に行っていました。ブランコに乗ったり、ジャングルジムに登ったりして、叔父が帰る夕方までの時間を、ほとんど公園で過ごしていました。

夕方、ジャングルジムで遊んでいると、ふっと気が遠くなって、わたしは、ジャングルジムの上の方から、地面に転落してしまいました。腰を地面に打ちつけてしまい、しばらく息ができなくて、そのまま地面に倒れていました。

「大丈夫か？」

大人の、男の人の大きな声が聞こえました、わたしは倒れたまま、声のする方を見ると、白いワイシャツを着た男の人が走って近づいてきました。わたしは、腰がとても痛かったけど、我慢して立ち上がり、

「大丈夫です」

と、その男の人に言いました。

男の人はわたしの近くまで来て、どこか怪我していないか？
と言いながら、わたしの体に触れようと思いました。わたしは、反射的にその男の人から離れました。大人の男の人が怖かったのです。その男の人は、少し驚いたような顔をしてわたしの方を見ました。

「おい、君、ちよつと」

わたしは逃げただけで、男の人に手を掴まれてしまいました。

「おじさんは、変な人じゃないから心配しなくてもいいよ、大丈夫か？」

その男の人は笑顔を見せながらそう言つて、わたしの服についた土を払つてくれました。それでもわたしは体をばたばたさせながら、男の人から離れようとしたと思います。その男の人はわたしの態度を見て、ちよつとおかしいと感じたのでしょう。とても驚いた表情をしていたのを覚えています。

「あれ？君、ちよつと、どうしたんだ？」

男の人は、わたしの体のあちこちについていた青あざを見つけたようでした。

「この傷は？どうしたの？」

男の人は、青ざめた顔をして、わたしに訊きました。わたしは、それに対して、何も言わず、走つてその場から離れました。

「おい、ちよつと、待つて」

男の人の声が遠くで聞こえました。わたしは怖いのと、恥ずかしいのが入り混じつた複雑な気持ちでした。わたしが走つて公園から出ると、そこに、なんと叔父が歩いていたので。叔父は会社が終わり、アパートへ帰る途中でした。叔父はわたしに、アパートから出るなど言っていました。俺がいない間はアパートで宿題をしている、わたしは叔父にそう言われていました。だから、わたしは、外で叔父には会いたくなかったのだけど、その時は、隠れる間もなく、叔父に見つかつてしまいました。

「トモちゃん、何をしているんだ。外へ出ちゃダメだと言つただろう」

叔父は、わたしを見ると、とても怖い顔をして、そう言いました。わたしが立ち止まつて怯えていると、叔父は怖い顔のまま近づいてきました。

その時、わたしの後ろから、先ほどの男の人が走つてきました。

わたしを追いかけていたのです。その男の人は、わたしを見つけたようでした。でも、わたしに声をかけません。わたしが不思議に思っ
て、その男の人を見ると、その人は叔父の方を見て、口をポカ
ンと開けていました。

「おまえ、何故、こんな所にいる？」

その男の人が、先ほどとは違う、低く、威圧するような声で言
いました。

叔父も、とても驚いた顔をしていました。

「まさか？ そうか、おまえはこの子を」

その男の人が、また低い声でそう言いました。わたしにはその言
葉の意味はまったくわからなかったけど、叔父とその男の人が初対
面ではないことは何となくわかりました。

それから、叔父と男の人が何か話していました。その会話は段々と
大きな声になっていって、わたしは怖くなり、すぐにアパートに帰
ってしまいました。だから、その時は、詳しいことはよくわかりま
せんでした。

わたしはアパートに帰って、部屋の隅で座っていました。部屋の
ライトもつけず、暗い中で、ただ座っていました。何が起こってい
るのかよくわかりませんが、叔父はいつまで経っても、戻ってきま
せんでした。

二時間くらい、そうしていると、チャイムの音も、ノックの音も
なく、玄関の扉が開きました。叔父が帰ってきたのだと思ってい
ましたが、そこにはスーツ姿の中年の女の人がありました。その女の人の後
ろには、やはりスーツ姿の男の人が二、三人いるのが見えました。
そしてその後ろに、先ほど、叔父と言い合いをしていた男の人が見
えました。

「トモミちゃん、もう、いいのよ。もう心配しなくていいのよ」

スーツ姿の中年の女性が、そう言って、わたしを抱きしめてくれ
ました。

「辛かっただろうね。苦しかっただろうね。でも、もう大丈夫。も

うあの男と一緒にいなくてもいいのよ」

その女性は泣きながら、わたしに言いました。わたしは、その女性が誰なのかはわかりませんでした。もう、おじさんといなくていい　　という言葉聞いて、涙が溢れてきました。

それから、わたしは、叔父といたアパートを出て、ある施設に引き取られました。その施設には、わたしのような孤児が数人いましたが、みんな女の子ばかりでした。施設のオーナーも中年の女性で、わたしにとって、とても安心して暮らせる所でした。

わたしは、その施設で、高校を卒業するまで暮らしました。あの叔父との暮らしがずっと続くと思っていたわたしにとって、天国のような所でした。時には、施設にいることや、両親がいないことを、まわりから変な目で見られたり、陰口を言われたりしましたが、わたしは、あの叔父にされたことを思えば、そんなことは、何でもなかったです。

わたしを救ってくれたのは、あの男の人です。あの男の人は、叔父の異常な性癖を知っていて、わたしの体につけられた青あざを見て、わたしの境遇がわかったのでしょうか。それで、警察に連絡してくれたのでしょうか。わたしはあの男の人にお礼をしようと思いましたが、施設のオーナーに何度訊いても、あの男の人のことは教えてくれませんでした。

わたしは、ずっと男性恐怖症でしたが、あの男の人だけは、別だと思っていました。わたしを救ってくれたあの人に対しては恐怖を感じなかったのです。

あの人が、マサトさんであるということを知ったのは、わたしが就職して、ヨウコと知り合ってからのことです。

マサトさんは、わたしの恩人であり、わたしの愛したたった一人の男性なのです。

そして　　。

サンタ、真相に迫る

「いったいどうして、君に、解ったんだ？教えてくれ。何故、君が再び樹海に現れたのか？僕にはさっぱり解らない」

樹海での出来事があってから、二日後、ようやく私は愛知県に戻ることができ、さっそく、サンタを呼び出した。

喫茶店『マルボロ』は、相変わらずジャズが流れていて、私たちは入り口の近くのテーブル席に座っていた。

「わたしにも、よく解らない。あんた、何故、樹海に戻ってきたの？そこんところを詳しく教えてくれない？わたしも立場がないのよ」
クワタ刑事は、灰皿でタバコの灰を落としながら、そう言った。

私がサンタと会うことを言うと、クワタ刑事は強引に合流してきたのだった。

「いろいろと訊きたいけど、まず、あの日の君の行動だ。僕が樹海へ入る日の朝、怪しい老人がやってきて、君を連れて帰った。僕はてっきり、君は名古屋へ帰ったのだと思った。何故、君は樹海へ戻ってきたんだ？」

私は目の前の少年に、少々きつい口調で訊いた。富士吉田では、山梨県警は詳しいことはほとんど教えてくれなかった。

私が、山梨県警から聞いたことは、サンタという少年からの情報でトモミさんが樹海へ行ったことが解り、樹海でトモミさんを保護したということと、クワタ刑事からの情報により私が樹海へ行ったことが解り、樹海で私を保護したということ、それと、トモミさんを樹海へ連れて行った男がいること、それくらいだった。

トモミさんを樹海へ連れて行った男のことについて、もっと詳しく教えてくれるように頼んだが、山梨県警のシバタという男は、その男については調査中ということで、ガンとして教えてくれなかった。私は警察で取り調べらしきものを受けた。いや、それは取り調べなんてものではなく、私の無謀な行動に対しての注意だった。そ

れで、ほとんど事件のことは何も知らずに、愛知県に戻ってきたのだった。

サンタは、アイスコーヒーを一口飲んで、私とクワタ刑事の顔を見てから、椅子に座りなおし、ようやく口を開いた。

「山梨県警のシバタって人にも同じような話をしたけど、ミツヤさん、シバタって人からは、何も聞いてないの？」

「ああ、シバタは、何も話してくれなかった。だから、君に直接聞くと思って、連絡したんだ」

「ふーん、警察はまだ確証を得ていないのかな？まあ、俺の話はすべて俺の想像だし、証拠なんて何もないんだ。だから、そのつもりで聞いてほしい」

サンタは、そう言って、またアイスコーヒーを飲んだ。

「あんた、何かっこつけてんのよ。いいからさっさと話しなさい」
クワタ刑事が少し大きな声で言うと、サンタは表情を曇らせた。

「このお姉さんは口が悪いね、まあ、いいや。えーと、あの日、俺はトモミさんを樹海で見つけて、病院へ運んだ。ミツヤさんとおお姉さんが病院まで来たけど、トモミさんの意識は戻らなくて、朝になった。そうしたら、爺さんが俺を迎えに来たんだ。爺さんには、あまり逆らえないんだ。だから仕方なく、爺さんの車に乗って、名古屋まで帰ることになった。俺の乗ってきた車は、ハゲが運転して帰った」

爺さんというのは、サンタを迎えに来たあの小さな老人のことだろう。ハゲというのは、背の高いスキンヘッドの男のことだ。わたしは、サンタの保護者であるという「爺さん」と「ハゲ」についても、訊きたかったが、そのことは事件の本質ではないため、あえて訊かなかった。

「俺は、考えていたんだ。トモミさんのブログのことだ。トモミさんの『彼』は、ヨウコさんにとっても特別な存在。そうしたら、ある人物だったら、その資格があると思いついた。それは、それは、それは、ヨウコさんの父親だ。ヨウコさんの父親は、ヨウコさんにと

って、特別な存在だ。だから、トモミさんの『彼』は、ヨウコさんの父親ではないかと、そう思った」

私ははっとしていた。そういう考え方もあるのか。特別な存在は、恋人だけではない。肉親だという見方もできるのだ。そして、あの悲しい葬儀場を見た、ヨウコさんの父親の姿を思い出していた。

「携帯電話は爺さんに取り上げられていたので、俺は、PDAで仲間連絡を取ったんだ。ヨウコさんの父親についての情報を集めてくれて」

サンタは、続ける。

「そうしたら、友達のハッカーから、すぐに連絡が来た。ヨウコさんの父親、マサトさんは、トモミさんがいなくなった日から、行方が解らなくなっていた。会社にも行っていないし、自宅にも帰っていない。マサトさんの車はトヨタのセダンだったけど、この車もトモミさんが行方不明になった日から、自宅から消えている」

私は驚いた。サンタの友達のハッカーは何者だ？そんなことが解るのか？私がサンタに訊くと、サンタは、にやりとして言った。

「ミツヤさん、個人情報ってのは、想像以上に流出しているんだ。公的機関からも、企業からも、考えられないくらい情報は流出している。俺の知り合いのハッカーは、数え切れないくらい情報を持っていて。ヨウコさんの自宅の住所が解れば、家族構成、父親が勤めている会社、年収、貯金の額、乗っている車、ある日の行動、そんなことを調べるのはあつという間だ。俺の知り合い達のハードディスクの中に、そんな情報は溢れかえっている。」

時々、ある企業から個人情報が出たって、ニュースになるけど、そんなのは、本当に氷山の一角で、裏では、もっと驚くべき情報が漏れている。だから、その気になれば、ミツヤさんのことだって、クワタさんのことだって、ほとんど何もかも、解ってしまうんだ」

「そんな、それは本当か？個人のプライバシーの侵害じゃないか」

私はサンタの言葉が信じられなかった。

「残念だけど、それが事実。個人情報保護法なんてものができたけど、事態はあまり変わっていないと思う」

私はそう言われて複雑な心境になった。コンピュータやインターネットが発達して、確かに社会は便利になったのだけど、そういった弊害もあるのだろう。

「とにかく、ヨウコさんの父親のマサトさんが、おそらくトモミさんの事件に絡んでいるのだということが、俺の中では、確実にになった。それで、サービスエリアの公衆電話から、山梨県警に電話したんだ。もし、トモミさんの最初の失踪に、マサトさんが絡んでいるのだったら、マサトさんは、病院に現れるかもしれないってことを、シバタっていう男に伝えたかった」

私は息を飲んでサンタの次の言葉を待った。クワタ刑事は、待ちきれずにサンタに言う。

「それでー、それで、どうなったの？」

「山梨県警には、シバタはいなかった。トモミさんが病院からいなくなつて、シバタはスズキ病院へ行ったのだと、言われた。俺は、おそらくマサトさんがトモミさんを連れ出したのだと思った。それで、今度はスズキ病院に電話した。そして、シバタにマサトさんのことを言つたんだ。ヨウコさんの父親のマサトさんが、トモミさんと同じ時期からいなくなつている。おそらくマサトさんがトモミさんを連れ出したんだと」

クワタ刑事が灰皿でタバコをもみ消しながら言った。

「そんな話、あのシバタが信じるとは思えない。だつて、全然証拠がないじゃない。たまたま、同じ日にいなくなつただけ。トモミさんの『彼』だつてことも、あんたの想像だし」

「そうだよ、シバタは俺の話なんか、まったく信じなかった。だけど、これだけは頼んだんだ。マサトさんの車、トヨタのセダン、ナンバーも解っていた。その車が病院の近くで目撃されていなかったか、調べてくれて、それだけ頼んだ」

「それで、シバタはどう答えたの？」

「一応、聞き込みはやってみるって、気のない返事だった。それを聞いて、俺は、もう一度病院の戻ることにしたんだ。警察は解っていない、自分で調べようと思った。サービスエリアで、爺さんの車から抜け出し、ハゲを見つけて、俺の車のキーを奪って、富士吉田に逆戻りだ。後のことはあまり考えていなかった。まあ、相当、しぼられることは覚悟していたけど、トモミさんの命には代えられない」

「あのスキンヘッドの大男から、よくキーを奪えたね」

私は病院で見た背の高い、黒いスーツを着た大男を思い出ししていた。私はあの男の姿を見た時、少し恐怖を感じた。怖い顔をした男だった。

「ああ、あのハゲはああ見えても、結構間抜けなんだ。トイレで手を洗っているのを見つけて、ポケットから簡単にキーを取り返すことができた」

サンタは自慢げにそう言った。

「それで、俺は、スズキ病院へ戻ったんだ。戻ってみると、警察は俺の言ったマサトさんの車が病院の近くに止まっていたことを突き止めたところだった。そして、その車はどうかやら樹海の方に向かったのだと言っていた。それで、俺も一緒に樹海に向かったんだ」

サンタは私とクワタ刑事の顔を見て、アイスコーヒーを一口飲んだ。

「いや、樹海へ行こうとしたら、警察の人に止められたんだ。子供は危ないからって。俺の通報でトモミさんの行方が解るかもしれないのに、俺に行くなって、それは納得できなかった。」

富岳風穴の近くの駐車場で、マサトさんの車が見つかった。マサトさんらしき中年の男と、トモミさんらしき若い女性が樹海の自然道に向かっていくのを見た、という目撃証言も出てきた。あの病院の事務室でそれを聞いて、俺はがまんできなくなって、事務室を脱出して、樹海へ向かったんだ。もう空は暗くなっていた」

私はサンタの言葉を聞いて、ごくりと唾を飲み込んだ。あの真っ暗な樹海が目に見えた。あの重たい闇の記憶が甦った。

「風穴の駐車場には、警察の人や消防の人かな、とにかく数人の人がいた。でも、駐車場は封鎖されてはいなかった。マサトさんの車が見つかったのは別の駐車場だったみたいだ。俺は車を止めて、自然道の方に向かって歩き出したんだ。その人達もちょうど、懐中電灯を持って、自然道に入るところだった」

クワタ刑事が新しいタバコを取り出して口にくわえ、シルバーの小さなライターで火を点けた。サンタはタバコを挟んでいるクワタ刑事の細い指先を見ていた。

「何よ、タバコの煙が嫌なの？それともあんたも吸いたいの？」

クワタ刑事はサンタの方を睨んだ。私は、サンタはタバコを吸いたいのだろうと考えていた。しかし未成年が刑事の前でタバコを吸うのは、さすがにまずいだろう。私はサンタがタバコを吸おうとしたら、即座に止めるつもりでいた。

しかし、サンタはクワタ刑事の指先から目を離し、

「いや、まさか。タバコなんて体に悪いものは吸わないよ」

と言い放った。わたしは、以前、サンタからタバコをもらって吸ったことを思い出した。その時はサンタはタバコを吸っていたはずだ。

「その警察の人達はあるに何も言わなかったの？」

体に悪いものを吸っているクワタ刑事が、少し不機嫌になって言った。

「ああ、言われたよ。でも、俺は地元の青年団で、トモミさんを樹海に探しに行くように警察本部から言われたとか言ったら、その人達と一緒に樹海に入るようになった。おそらく、トモミさんの捜索はいくつかのチームに別れて行っていたのだと思った。マサトさんの車が発見された駐車場を中心に、複数の場所から樹海に入り、捜索しているのだろうって。樹海は広いからね」

「そんな事言って、その人達は信じたわけ？」

「信じたよ。逆に何故もつと早く来ないんだって、言われたよ」

クワタ刑事はタバコを灰皿において、両手を少しあげ、信じられないと呟いた。

「で、樹海に入る前に、俺はそこで新たな発見をした。なんだと思う？」

サンタは私の顔を覗き込むようにして訊いてきた。さあ、と、私が首を捻っていると、サンタは、少し大きな声になって言った。

「ミツヤさんの車だよ。なんと、その駐車場の端にミツヤさんのセダンが止めてあった。それで、俺は、ミツヤさんはトモミさんが行方不明になったのを知って、独りで樹海に行ったのでは？と、そう思った。すごい偶然だ。俺は、トモミさんとマサトさん、それに加えて、ミツヤさんを探しに樹海へ入ることになった」

「君もあの駐車場から樹海に入ったのか！」

私はただ驚いて、サンタに言った。

「そうだよ。あの時、ミツヤさんが樹海へ入ったなんて、俺も、警察も知らなかった。だから、あそこにミツヤさんの車がなかったら、ミツヤさん、樹海で遭難していたかも」

そのサンタの言葉をさえぎるように、クワタ刑事が言った。

「わたし、山梨県警に言ったはずよ！ミツヤさんに電話したら、これから樹海へ行く。なんて、分けの解らないこと言っているから、その後、山梨県警に電話して、ミツヤさんが樹海へ行ったから、探してって、頼んだはずよ」

「ふーん、おかしいな。警察ではミツヤさんの事は何も言っていないかった。マサトさんの車が見つかって、それどころじゃなくなったのかな」

サンタは不思議な顔をしていた。しかし、サンタの話が事実なら、私はサンタに助けられたことになる。あの暗い樹海から、独りで脱出するなんて、とても無理だった。私は、あの時、本当に、恐怖で頭がおかしくなりかけていた。

そう、ヨウコさんの声、幻聴かもしれないが、ヨウコさんの

声と、サンタがいなかったら、私は今ここで、コーヒーを飲んでい
ることができなかったかもしれない。あの暗い樹海の中で、ただ独
り、朽ちていたかもしれない。そう思うと、背筋が寒くなった。

「樹海は少し特殊なところだ。自然道を歩いている限りは、ハイキ
ングコースみたいな感じで、今、自分が危険なところにいるのだと
いう感覚は、むしろ少ない。でも、いったん自然道を離れて、森の
中に入っていくと、自分がどこにいるのか解らなくなる。」

俺は、最初にトモミさんを探しに行った時は、独りだった。一応、
GPS、携帯、コンパス、地図、懐中電灯、樹海の地図、そして、
目印として、夜光、闇で光るテープを持って行った。

まず、GPSだけど、これはほとんど役に立たなかった。樹海の中
では木がうつそうと茂っていて、衛星を捕捉できなくて、位置が
特定できなかった。コンパスは、ぐるぐる回ってしまっ、性格な
位置を示さないって聞いていたけど、そんなことはなかった。一応
それなりの位置を示していたと思う。だけど、場所によっては、く
るくる回っていることもあった。おそらく溶岩地帯で、そんなこと
が起こるのだろう。それで、俺はコンパスの指し示す方向が正確な
のだろうか？と疑った。

夜行テープは、光っている時間に限りがあって、時間が経つにつ
れて、段々と暗くなっていく。だいたい1時間もすると、その輝度
は十分の一くらいになってしまう。だから、これもあまり使えな
かった。トモミさんを見つけた後、途中までは、この夜光テープで戻
ることができたんだけどね。

でも、結局その時は道に迷ったんだ。トモミさんは意識がなかつ
た。そのトモミさんをおぶって、暗く、険しい樹海を歩いた。頼り
ないコンパスと地図で、何とか国道の方に向かうルートを探してい
た。

ミツヤさんも、知っていると思うけど、夜の樹海って、明かりも
何もなく、本当に暗いんだ。真っ暗。懐中電灯で照らしても、見え
るのはほんの少して、自分がどこにいるのか解らない。本当にまっ

たく解らないんだ。通ったことのあるような風景が何度も続く。この樹海は四次元で、俺は同じと所をただ、くるくると廻っているような気がした。出口と入り口がワームホールか何かでつながっている、永遠にここを出られないかと思った」

サンタはそこまで、一気に話すと、私の顔を見た。私は、サンタのように歩き回る前に樹海の闇の恐ろしさにやられてしまい、うづくまってしまったのだった。

「俺は、もう朝まで、どこかで座っていようかと思った。夜が明ければ、樹海の風景もまた違ったものになるかもしれない。そう、思った。そう思っていたら、どこからか声が聞こえたんだ」

私はサンタの言葉にあつと叫びそうになった。私が樹海で道を見失った時も、声が聞こえたのだ。それは、あのヨウコさんの優しい声だった。

「俺は、誰だ！ って言いながら、辺りを探したけど、人はいなかった。そんな声が聞こえるなんて、俺は、脳が疲れて、幻聴がでたか、なんて思っていた。その声は女性の声で、俺に指図するんだ。あっちに行け、こっちに行けなんて。俺はその声に従った。その声の正体を突き止めたいと思った。それが、死神で、ますます、樹海の奥深くまで誘導されたかもしれないが、俺は、そんな死神がいるなんて、信じていなかった。俺に聞こえた声はとても優しくかった、優しい声だった。

その声に従っていたら、俺とトモミさんは国道に出たんだ。あの声は何だったのだろうか。とにかく、奇跡的に、俺も、トモミさんも助かった」

私は考えていた。おそらく、サンタに聞こえた声も、あのヨウコさんの声だろう。ヨウコさんは、トモミさんを助けようとしたのか？ 私はその声はヨウコさんの声で、私も樹海で聞いたということを、サンタに言おうと思ったが、やめた。

死んだはずのヨウコさんの声が聞こえるなんて、とても非科学的だし、樹海で道を見失ったものには、そういった幻聴が聞こえるの

は、むしろ、多くあるかもしれない。私に聞こえたのは、たまたまヨウコさんの声だったのだろう。私の心の中に、ヨウコさんの声をもう一度聞きたいといった願望があり、それが幻聴となった、そう思うことにした。

「二度目に、マサトさんと、ヨウコさん、それにミツヤさんを探しに行った時は、警察の人や、地元の消防団の人も一緒に、かなり心強かったよ。あの人達、樹海での捜索は何度かやっているらしくて全然、迷わずスタスタと歩いて行ってしまおう。トモミさんとマサトさんを発見したのは、本当にすぐだった。やはり富岳風穴と鳴沢氷穴を結ぶラインの南側で見つけた。

トモミさんと、マサトさんは、疲れきっていて、樹海の溶岩の上に座って、虚ろな目をしていた。でも、命に別状はなくて、警察の人が保護した。

みんなが口々にやれやれって言って、帰ろうとしていたのだけど、俺はミツヤさんを探さなければならぬ。そこで、トモミさんとマサトさんを連れて帰った警察の人を除いた、五人くらいの消防人に、実はもう一人、この樹海に入っている人がいるので、探すのを手伝って欲しいって、お願いしたんだ。

それから、十分くらいすると、樹海の中でぼんやり立っているミツヤさんを見つけた。消防の人に手伝わしてもらって、ミツヤさんを助けて、スズキ病院に戻った。

あの日の俺の行動はこんなところだよ。だけど不思議なのは、ミツヤさんが樹海の中を歩いていたらってこと。てっきりマサトさんやトモミさんのように疲れ果てて、座っているか、寝ているかしているかと思っただけ

私はサンタの話聞いて、ようやくサンタが、あの日、樹海へ戻ってきたわけが解った。やはり、サンタは、行動的な人間だ。それに直感が鋭い。それは直感ではなく、サンタに言わせれば、論理的帰結。なのかもしれないが、私にはその論理は理解できなかった。私は次の質問をサンタにした。

「サンタ君、樹海でぼくを助けた時、君は言った。トモミさんは助けた、そして、ヨウコさんと、トモミさんを殺そうとした犯人も確保したと。それはどういう意味だ。」

犯人は、マサトさんなのか？マサトさんは、ヨウコさんの父親で、トモミさんの恋人だったらしいが、何故マサトさんがヨウコさんを殺さなければならぬんだ？それにトモミさんも殺そうとしたなんて、ぼくには到底信じられない。あの時、言ったことは、本当か？それとも、ぼくの聞き違いか？」

私はコーヒーカップ取って、一口飲んだ。コーヒーは冷たくなっていた。

「わたしもミツヤさんからそれを聞いて、気になっていたのよ。マサトさんは何故自分の娘のヨウコさんを殺して、恋人のトモミさんを殺すの？」

「動機は、まだよく解らない。最終的にはマサトさんと、トモミさんの話を聞くしかないだろうなあ。どこまで話してくれるのか、解らないけど。」

俺が思うに、マサトさんとトモミさんの関係は単なる恋人ではない、と思う」

「単なる恋人以上の恋人なんてあるの？それってどういう関係？」
クワタ刑事が、眉にしわを寄せながら、サンタの方を見た。

「トモミさんのブログで気になっていた部分がある。お父さんのことを書いた日のブログだ。これは、トモミさんはほとんど覚えていない父親のことを書いている。これは、もしかして、トモミさんの『彼』のことじゃないのかと思った。唐突なんだ、このページ。母親のことは書いていないのに、ほとんど見たこともない、父親のことを書いている。それで、ヨウコさんの父親の調査が終わった後、また知り合いのハツカーに連絡して、今度はトモミさんの生い立ちを調べてもらった」

「ちよ、ちよつと待てよ。そんな昔のことなんかも解るのか？」

私はまた驚いてサンタを見たが、サンタは無表情だった。

「簡単だよ。そんなこと。ミツヤさんの会社の人の情報は、すべて知人のサーバのハードディスクの中にあるよ」

「あんだ、それ犯罪じゃないの。どっから盗んだのよ」

クワタ刑事が少し赤い顔になって、サンタを睨んだ。

「盗んだというか、落ちてたんじゃないかな。あっ！でも落し物も警察に届けなくちゃいけないか」

サンタはそう惚けた。私はクワタ刑事の素性をサンタに明かしていた。トモミさんの友達ではなく、愛知県警の刑事だということ、そしてヨウコさんの自殺に疑問を持っているということ、そんなことをサンタに話したが、サンタはいつもどおり、あっ、そう、と言つて、あまり気にとめなかった。

「トモミさんは、本当に、辛い人生を送っているんだ。父親のことはほとんど知らなくて、母親ひとりに育てられていたけど、その母親も事故死してしまう。その後、その母親の弟と暮らしていたらしいけど、虐待みたいなことを受けていたみたいだ。それが警察に通報されて、トモミさんは、叔父と離れ、その後、施設で暮らしていたらしい」

「で、なんで、そのトモミさんの父親が、ヨウコさんの父親と同一人物ってのが解るのよ」

クワタ刑事が厳しい口調で、サンタに迫る。

「おそらく。最初は知らなかったのだと思う。たぶん、トモミさんはヨウコさんと仲良くなつて、ヨウコさんの家で、マサトさんと会つた。何度かそんなことが続いて、マサトさんとトモミさんは付き合い合うようになった。大人の関係だと思う。それで、どちらが気づいたのか解らないけど、トモミさんは、マサトさんが自分の父親だと知つた。それでも好きだつたんだろうね。」

ただでさえ、マサトさんには奥さん、ヨウコさんの母親がいるから、不倫なんだけど、さらに、もつと許されないこと、親子での男女関係。こんなことがあるんだから、人生は不思議だよなあ」

サンタは、さめざめとした表情で言った。私はしばらく、サンタの話が理解できなかった。

トモミさんの恋人は、ヨウコさんの父親のマサトさん。そして、そのマサトさんは、トモミさんの生き別れになった父親。

「えーと、ということとは、ヨウコさんと、トモミさんは、異母姉妹ってことになるよね？」

「おそらく、勘のいいヨウコさんはすぐに解ったのだろっね。そう、おそらく、ヨウコさんは許せなかったのだと思う。トモミさんのブログにも別れるように言われたって、書いてある。血のつながった親子が、男女関係になるといって、そして、それが、ヨウコさんの父親と親友。これはヨウコさんにとって、かなりショックなできごとだと思うよ。」

確かに、確かに、サンタの言うことは、筋が通っているような気もするが、私にとって、にわかには信じがたいことだった。本当にそんなことがあるのか？もしそうだとしたら、運命のいたずらだ。いや、いたずらなんて生優しいものではない。これは、ヨウコさん、トモミさん、マサトさん、そしてヨウコさんの母親、マサトさんの妻、シズヨさんに対する大きな試練なのか。私はそう思っていたが、クワタ刑事は冷静だった。

「確かに、あなたの言う話も可能性としてはないこともないけど、全部、想像でしょう？トモミさんのブログなんて、どうにでも取れる。その、あなたの知り合いのハッカーはマサトさんがトモミさんの父親であるという証拠を何か持っているの？」

サンタはしばらく頭を下に垂れて、黙っていた。

「まだ、そこまでは解っていないけど、もう少し時間をかければ解ると思う。それにトモミさんとマサトさんが話すかもしれない」

「そのハッカーだか、何だか知らないけど、その人達、何者なのよ。捜査は現場で足を使ってするものだ！なんて、サカキバラ警部のよくなことは言わないけど、何か納得できないのよね。その二トみ

たいなやつが、警察が調べても中々解らないような情報をおつけなく手に入れてしまう。何か納得できないのよね」

クワタ刑事はぶつぶつと言いながら、タバコをふかしていた。喫茶店『ジャズ』の入り口の扉の窓からは夕日が沈んでいくのが見えた。もう二時間以上、話し込んでいる。私は最後の質問をサンタにした。

「それで、何故、どうやって、マサトさんは、ヨウコさんを殺したんだ。そして、トモミさんを殺そうとしたんだ？」

サンタはそれを聞くと、急に黙ってしまった。

「マサトさんが、何故、ヨウコさんを殺すことになったのか？ 動機はあまりよく解らない。おそらく実の娘との不倫のことを知ったヨウコさんが、そのことを誰かに話して、自分の立場が危うくなるなんて思ったけど、それで娘のヨウコさんを殺すつても考えにくい。」

トモミさんを殺そうとしたことについては、マサトさんのヨウコさん殺害に、トモミさんも協力したんじゃないかな？ でも愛が冷めて、今度はトモミさんがじゃまになり、殺そうとした。ちょっと動機としては弱いと思う。何年も一緒に暮らしてきた娘を自分の手で殺す。そして、愛した娘も自分の手で殺す、マサトさんは、まるで悪魔のように人間の血が通っていない人なのだろうか。

俺にはそんな表面的な動機だけでなく、もっと深い動機があるよ。うな気がする。でもこれはマサトさんに聞かなきゃ解らない」

私はまた、あのヨウコさんの葬儀で見たマサトさんを思い出していた。あの時は、疲れきって、やつれていた。とても、そんな殺人をするような人に思えなかった。

「あと、どうやってヨウコさんを殺したんだ。ヨウコさんは睡眠薬を飲んで、それが気管につまって窒息死した。部屋の扉は中から鍵がかかっていて、完全な密室だった、それはどう説明するんだ？」

サンタはめんどくさそうに答える。

「それこそ、マサトさんが犯人なら、いくらでもやりようがある。」

例えば、マサトさんがヨウコさんと一緒に夜、お酒を飲む。

マサトさんは、ヨウコさんのお酒の中に睡眠薬を入れておく。ヨウコさんが、眠ったら、ヨウコさんの部屋に連れて行って、ありったけの睡眠薬と、お酒を強引にヨウコさんの口に入れる。それで、ヨウコさんが逝ったのを見届けて、部屋の扉を閉めて、鍵をかける。マサトさんはその鍵を持って、書斎に行つて朝まで過ごす。

次の朝、ヨウコさんが起きてこないの、母親はヨウコさんの部屋に行くが、鍵がかかっている。いつも台所の戸棚に置いてあった鍵もない。母親のシズヨさんは、書斎のマサトさんを起こす。マサトさんはヨウコさんの部屋のドアに体当たりをして、ドアを破つて中に入る。そこで二人はヨウコさんが倒れているのを発見する。シズヨさんは、気が動転していただろう。隙をみて、マサトさんは鍵をヨウコさんのテーブルの上に置く。これで密室ができた」

クワタ刑事がついにキレた。

「あんだねえ、さつきから黙って聞いていれば、想像ばかりじゃないの。証拠はあるの？ミステリーの読みすぎなんじゃない。証拠もなしにマサトさんを殺人犯つて決め付けることが、どんなに重大な意味を持つか、解っているの？」

私には、クワタ刑事は決して黙って聞いていたとは思えなかったが、サンタは、クワタ刑事の方を見て、少し怯えた顔をしたような気がした。しかしそれは、私の見間違え科も知れない。

「だから、クワタさん、最初に言ったでしょ。これは、俺の想像だつて。そのつもりで聞いて欲しいって。俺もこんなことは話したくないんだよ。でもミツヤさんに頼まれて、ミツヤさんなら、話そうと思つたんだ。クワタさんが来ることは想定外だったんだ」

「まあ、あんたの話は半分くらいは何となく、当たつてるような気もしないでもないのよねえ」

「俺が、警察がやるような捜査ができれば、想像の裏づけができて、証拠も見つかるはずだ。ハッカーの言うことも信じてくれないようだしね」

「何言ってるのよ。あなたには百年早いわ」

クワタ刑事はそう言って、鼻からタバコの煙を吐き出した。

とにかく、マサトさんとトモミさんが何か話してくれるのを願うばかりだ。サンタの中では、ほとんど事件は解決しているようだが、私はマサトさんがヨウコさんを殺した本当の理由が知りたい。そして、あの樹海で聞いたヨウコさんの声、あれは本当に幻聴だったのだろうか？

外側。

わたしは外側にいるの。

ヨウコさんはそう言った。その言葉は私の頭の中に直接響いた。

私はヨウコさんは、まだどこかにいるような気がしてならない。外側　　というのはどういう意味だろう。

マサトさんの話

タバコを吸ってもかまいませんか？

ああ、すみません。この部屋は禁煙では？

ああ、そうですか、ありがとうございます。

えっ、そうですか、トモミの記憶が……。戻ったのですか？

はあ、そうですか。何か話しましたか？

……そうになると、僕もいつまでも黙っているわけにはいきませぬ。ね。

サンノミヤさんをお願いします。

ええ、サンノミヤさんです。彼に話します。

警察の取り調べって、もっと厳しいかと思っていました。

いえ、この刑事さんが優しいとかそういう事ではなく、テレビドラマで刑事さんが机を叩きながら、告白を強要するシーンなんかを見たものですから、そんなふうに厳しくやられるのかと思っていました。

そうですね。いくら相手が殺人犯とはいえ、暴力はいけませんよ。ね。

まあ、元々隠すつもりはなかったので、サンノミヤさんにすべて話しますよ。

サンノミヤさん、どこか似ているんです。僕の好きだった小学校の頃の先生に。あの先生はサンノミヤさんみたいに聞き上手で、僕

はいろんなことを話しました。先生はいつもよく聞いてくれました。ああ、懐かしいな。あの先生どうしてるかな？

ああ、先生の話ではなく、僕の話ですね。簡潔にまず結論から言いましょ。

僕がヨウコを殺しました。
それで、トモミを殺そうとしました。その後、僕も死ぬつもりだったけど、死にきれませんでした。
ええ、間違いありません。僕がヨウコを殺しました。

ああ、ありがとうございます。美味しいお茶ですね。静岡のお茶？
そうですか。

はい、わかりました。

では、まず理由は置いておいて、ヨウコを殺した日のことを話します。

あれは、六月の、あれ、おかしいな、何日だったかな？
だめだ、思い出せない。

さつきまで、覚えていたはずなんですけど、だめですね、こんな重要なことを忘れてしまっただけ。とにかく六月のあの日、ヨウコは仕事で少し遅くなって、夜九時頃帰宅しました。

僕の家は妻のシズヨとヨウコの三大家族で、いつもは夜八時くらいに夕食になるんです。

僕とヨウコは少しビールを飲みます。会話は妻とヨウコが主で、テレビドラマの話なんかをしています。僕も適当に会話に加わりましたが、あまりテレビを見ないため、中々話についていけません。でもそれなりに、会話はいつも楽しかったですよ。

その日は、ヨウコが遅くなつて、僕と妻のシズヨは先に夕食を済ませていました。僕は書齋で会社から持ち帰った仕事をしていました、と、というか、仕事をするふりをしていたのか。

シズヨは夕食は済んだのだけど、ヨウコの夕食を準備して、しばらく二人で何か話していたと思います。僕も書齋から出て、食堂に行きました。しかし、彼女達の会話には加わらなかつたです。ヨウコの姿を確かめただけです。

僕はその時、もう決心していました。

今日、やろう、と強く思っていました。

その後、僕は、ヨウコが夕食を終えて、シズヨが食堂からいなくなる時間を見計らつて、また食堂へ行きました。その時、手にブランドーを持っていました。この日のために、珍しい高級な酒を買っていたのです。

「ヨウコ、ちょっと、飲もうか？」

そう言つて テーブルに座りました。ヨウコは、お父さん、仕事じゃないの？つて不思議そうな顔をしていました。

僕とヨウコはよく一緒に酒を飲みました。妻のシズヨはまったくお酒が飲めませんでした。ヨウコは結構飲みました。特にブランドーやウイスキーなどの洋酒が好きでした。休みの日の前などは、よく二人で飲んだものです。ほとんど家で飲んでましたね。そういえば、外でヨウコとお酒を飲んだことは一度もないかな？

お酒を飲むとシズヨがいる時より、くだけた話をしました。

ヨウコの愚痴を聞いたり、時には恋人の話なんかもしました。そうですね。僕とヨウコは仲が良かった。殺しておいて、いまさら言うのもおかしいですが。

ああ、すみません。もう大丈夫です。

急に涙が出てしまいました。すみません。

その時は、ヨウコとお酒を飲みながら、トモミの話をしたと思い

ます。トモミの話はもう何回もしていました。

ヨウコは、はっきりと意見を言う子でした。あの日もはっきり言われました。

お父さん、間違ってる、って。

その言葉を聞いて、僕の決心はますます固くなりました。もう殺すしか、可哀想だけど、ヨウコには死んでもらうしかないと思いました。そうしなければ、僕とトモミは幸せになれないと、強く思いました。

それで、準備していた睡眠薬を、ヨウコのブランデーグラスに入れたのです。睡眠薬はネットで手に入れました。かなりの量がありました。まずハルシオンを粉状にしておいたのを、ヨウコのグラスに少し入れました。

ヨウコはブランデーをロックで飲んでいました。ヨウコはお酒の味がおかしいのに、すぐに気づいたようです。あれ、なんか変な味がするよって言っていました。でも、僕が、ヨウコのグラスを取って、少し口に含み、この酒はこんな味なんだよって言うと、そうかな？って首を傾げながら飲んでいました。ヨウコは食堂で、二、三杯、ハルシオン入りのブランデーを飲んだのだと思います。

「お父さん、眠くなっちゃった。もう寝るね」

ヨウコがそう言ったのは、午前〇時頃だと思えます。その時、ヨウコは僕の顔を見て、少し微笑んでいました。

お父さん、わたしを眠らせて、どうするつもり？

ヨウコのそんな言葉が聞こえたような気がしましたが、本当に言ったのかどうか、僕はよく覚えていません。でも、僕がしようとしていることが、ヨウコにはすべて解っているような気がしました。その後、ヨウコは自分の部屋に戻っていきました。シズヨは寝室でテレビを見ているようでした。僕は寝室に行つて、今日は書斎で仕事をすると、シズヨに言いました。時々、こんなことがあるので、

シズヨはまったく気にしていませんでした。

そして、それから一時間後、僕はシズヨが寝ているのを確認した後、ヨウコの部屋に行ったのです。あの日の仕事を仕上げるためです。

僕は睡眠薬を多量に飲むと、眠ったまま苦しまずに死んでいくのだと、そう思っていました。だから睡眠薬で殺すことを考えたのです。ヨウコにはできれば苦しんでほしくなかったのです。

でも、実際は違いました。ヨウコはとても苦しんで、苦しんで、死んでいったのです。

僕はハルシオンの残りの粉末と、ブランデーと、あともう名前は忘れましたが、多くの睡眠薬、これらは、粒状のもの、カプセルのものなどいろいろありましたが、すべて取り出してビニール袋にまとめて入れていました、を持って、ヨウコの部屋に入りました。ヨウコの部屋は鍵が付いていたけど、普段、ヨウコは鍵を使っていますでした。

ヨウコの部屋は六畳ほどのフローリングで、ヨウコはベッドで寝ていました。さつき着ていた服は脱ぎ捨てて、Tシャツとスエットという格好でした。ヨウコはどちらかというと几帳面な正確なので、服を脱ぎ散らかすことはなかったと思います。よっほど眠かったのでしょうか。

僕は、まずヨウコの鼻をつまんで、ハルシオンの粉と、ブランデーを口から流し込みました。ヨウコはむせて、ゴホゴホと咳をしましたが、ブランデーを飲み込んだようでした。

次にビニール袋の中から、二、三錠の睡眠薬を取り出し、これもブランデーで流し込みました。しかし、ヨウコは喉に薬を詰まらせたようで、苦しそうに起き上がりました。目は虚ろで意識は朦朧と

しているようでしたが、薬を吐き出そうとしました。

僕は夢中で、ヨウコの口を押さえ、さらにブランデーを注ぎました。ヨウコは苦しそうで、恐ろしいほどの力で、僕を突き飛ばそうとしました。僕はヨウコにこんな力があるのかと驚きましたが、必死になってヨウコをベッドに押さえつけました。

このままではヨウコを押さえつけるだけで精一杯で、とてもブランデーと薬を飲ませるなんてできませんでした。しかし僕も必死でした。僕はヨウコの体を両手で押さえ、自分の口にブランデーを含み、ヨウコに口移しで飲ませました。

睡眠薬をヨウコの口に入れて、ブランデーを強引に注ぎ込む。ヨウコが暴れると、それを押さえつけて、口移しでなおも飲ませる。そんな格闘みたいなことをやっている、やがてヨウコがぐったりとして、動かなくなりました。

今、考えると、僕は、よくやったもんだと思います。それほどヨウコが憎かったのか？

よく解りません。あの日は、僕は、どうかしていたのだろうと思います。

さつき、どうかしていたのだろって言いましたが、僕は決して自分を見失っていたわけではありません。しっかりとした意思を持ってやったことです。自分がよく最後までやれたことに対して言ったことで、自分がやろうと決心したことに対して言ったことではありません。

しばらくすると、ぐったりしていたヨウコが、薬とブランデーを吐き始めました。僕はヨウコはそのまま眠って、息を引き取るのだと思っていたので、驚きました。

ヨウコはげえげえと、ベッドの脇に吐いていました。ブランデーと胃液、睡眠薬も見えました。僕は呆然とそれを見ていました。

ああ、失敗したのだなって、思いました。薬とブランデーを吐い

てしまったら、睡眠薬の飲みすぎによって死ぬことはない、そう思いました。しかし、吐いているヨウコに向かって、これ以上、何もすることはできませんでした。いくら飲ませても吐いてしまうのだから。

しばらくするとヨウコの様子がおかしくなりました。何回目かに吐いた後、急に苦しみだしました。ヨウコはベッドの脇で、口に手を入れて、ゴロゴロと転がりながら、体をバタバタさせていました。僕は一瞬何が起こったのか、解らなかつたです。

いえ、本当です。どうしたのだらうと、ただ見ているだけでした。

そのうちヨウコの動きが止まりました。口を半開きにしたまま、上を向いています。僕がおそるおそる近づいてみると、ヨウコは白目を見せて失神しており、意識はなく、呼吸もしていませんでした。この時になって、ようやく、僕はヨウコが吐瀉物を喉に詰まらせて、失神したのだと理解しました。

ヨウコは死んでいました。

ええ、ヨウコは死んでいました。

僕はブランデーと残った睡眠薬をテーブルの上に置いて、ヨウコの部屋から出ました。思えばあれだけ格闘したのだから、妻のシズヨも目を覚ましてもおかしくないと思いますよね？

僕は妻のシズヨにも睡眠薬を飲ませていました。寝室でテレビを見ているシズヨのウーロン茶にハルシオンを入れておきました。だから、シズヨはぐっすりと眠っていたのでしよう。でもあれだけヨ

ウコとバタバタとして、よく目が覚めなかったのか、今思うと少し不思議です。

僕は、食堂の戸棚に置いてあったヨウコの部屋の鍵を取り出し、ヨウコの部屋に鍵をかけて、後は朝まで書斎にいました。あの日は一睡もしませんでした。

朝になって、シズヨがヨウコが起きてこない、部屋に鍵がかかっている、書斎の僕を呼びにきました。これは僕の描いたシナリオ通りでした。僕はシズヨのいる前で、ヨウコの部屋の扉に体当たりして、扉を破り、中に入りました。

ヨウコの部屋の惨状を見たシズヨは、相当なショックを受けているようで、しばらく立ち尽くしていました。そのうち、「いやー」と叫んでヨウコの体を起こし、ヨウコ、ヨウコと何度も呼びかけました。僕はそれをじっと見ていました。ヨウコが目を覚ますのではないかと、一瞬思いましたが、心配する必要はありませんでした。ヨウコは確かに死んでいました。僕は、ヨウコの部屋の鍵を、ブランデーと睡眠薬の置いてあるテーブルに置きました。

警察に電話すると、すぐに救急車とパトカーがやってきました。二〇分くらいかなあ。

僕は警察や鑑識の人がヨウコを自殺だとしてくれるか、少し心配でした。あれだけヨウコを押さえつけたり、強引にブランデーや睡眠薬を飲ませていたのだから、何か不自然な証拠が出てくるかもしれない、そう思っていました。しかし、運良くそういった証拠

は出てこなくて、状況から判断してヨウコは自殺ということになりました。

ああ、ありがとうございます。ちょうど喉が渴いたところでした。まず事実をありのままに話しました。今度は僕の気持ちを話しましょう。

サンノミヤさん、もうご存知かもしれませんが、トモミは僕の実の娘なんです。トモミは、今の妻のシズヨとは別の女性との間にできた子供です。

トモミは。

トモミは、僕の娘であり、恋人でもあるのです。

おかしいですよ。ええ、解ります。普通に考えたら、親子で恋人なんて。それに僕には妻もいるので、不倫だ。まったくとんでもない男ですよ。

いろいろあつたんです。こんな、とんでもなく無責任な男ですが、いろいろあつたんです。

サンノミヤさん、本当に、人生って、何があるか解りませんね。

あ、ありがとうございます。ちょっと眠くなってきたところでした。
ブラックでお願いします。

ああ、もう〇時を過ぎましたね。刑事さんも大変ですね。こんな

に遅くまで……。

残業手当はつくのですか？

はあ、そうですね？

そんなふうになっていたんですか。

ああ、そんなことはどうでもいいですよね。

そう、トモミのことでした。

僕の実家は福井県の方で、自動車部品を作る工場をやっています。高度成長時代って言うんですか？昭和三十年？四十年にかけて

、あの時代はかなり工場が大きくなったみたいです。

その後、バブル景気もあって、さらに業績が良くなって、東京に支店を出しました。バブルがはじけても、業績は良かったです。

トモミの母親であるアケミと知り合ったのは、僕が高校性の頃のことです。僕の親は、僕を大学に行かせ、ゆくゆくは会社の跡取りにしようと思っていました。それで、勉強にはとても厳しかったのです。

僕はまあまあ成績で、東京の一流と呼ばれる大学に現役で入学できそうでした。

ええ、毎日、毎日、勉強ばかりの生活で、楽しくはなかったです。

そんな生活の中、となりの女子高に通うアケミと偶然知り合って親の目を盗んでは、よく会うようになりました。苦しい受験勉強だけの生活の中で、アケミと会うことは、僕にとって夢のような時間でした。

それで、それで、できてしまったのです。アケミが妊娠していることが解りました。

僕はまだ子供で、自分の子供ができるなんて、夢にも思わなかったです。

まあ、子供を作ることやっっておいて、そんなことを言うなんて無責任ですね。

アケミはただ泣いて、どうしよう、どうしようと言っただけで、僕はどうしていいのか解りませんでした。

僕は勉強ばかりしていて、そんなことを相談できる友達がいまませんでした。アケミもどちらかというと孤独で、友達も少なかったようです。

僕は、考えに考えて、結局、父親に相談しました。いずれは父親に解ってしまうことだろうと思ったのです。

親父は顔を真っ赤にして、僕を罵倒しました。

「今、そんなことをしている場合か？」

「自分の立場が解っているのか」

そんなようなことを、何回も、何回も、言われました。

母親がアケミの家に、そのことを連絡しました。

アケミの家は母子家庭でした。何故かアケミの母親がアケミを連れて、僕の家には謝りにきました。

その時、僕はなんだかおかしいなあと思いました。

親父はもちろん、子供はおろすんだなっと言っていました。ひどい親父です。

しかし、もう、おろすこともできないって、アケミの母親と僕の母親が言っているのを聞きました。

僕は子供をおろすなんて考えていませんでした。僕はアケミが好きだったので、高校を卒業したら、結婚しようかと考えていました。

大学なんて行かないで、働こうと思っていました。

いえ、本当ですよ。親父の会社を継ぐことなんて、本当はあまり興味がなかった。

アケミと一緒に暮らせるなら、そのほうが僕にとって幸せだと、その時は、本当にそう思っていました。

甘かった。僕は甘かったんです。

親父はそんなことは許してくれませんでした。おまえは馬鹿か？おまえに子供が育てられるわけがない。大学へ行かないのなら、勘当する、そう言いました。

僕はそれでもかまわないと、思いました。

しかし、しかし。

それも許されないことが解りました。

アケミの弟のことです。アケミには中学生の弟がいて。その弟が、そいつがとんでもないやつだったのです。

その弟が、何人もの近所の幼い女の子に、性的ないたずらをして、警察につかまり、少年院に入っているということが解りました。僕はまったく知りませんでした。

それで、アケミの母親は、あんなに謝っていたのでしょうか。弟のことで、世間に顔向けできない。さらに娘が会社社長の息子の子供を妊娠した。

それで、アケミの母親は、あんなに謝っていたのでしょうか。

アケミはまったく悪くない。

アケミはまったく悪くない。

でも、変質者のいる家族を受け入れることは、僕の親父にとって絶対に許されないことでした。

地元では少しは名のある会社でしたので、例え勘当した息子でも、変質者の弟のいる娘と結婚したら、世間のうわさになるでしょう。

僕は、アケミの弟の事を聞いて、はっきり言うと、戸惑いました。アケミの事は好きだったけど、そんな弟がいたことは知らなかった。サンノミヤさん、どうします？
サンノミヤさんなら、愛をつき通しますか？

僕は、若かった。おそらくアケミも悩んでいたのだと思います。だから、アケミを連れて逃げようと思いました。どこか遠い町で二人だけで暮らす、だから許してくれって、親父に頼みました。

しかし、僕の親父にはそんな言葉は通用しませんでした。

親父は、僕とアケミの中を強引に引き裂きました。アケミは学校をやめ、母親とともに、どこか遠くの町へ引っ越していきました。おそらく僕の親父が金を渡して、すべて内密に処理したのでしよう。

可哀想ですよ。僕は結局アケミに何もしてあげられなかった。酷いですよね。こんな人生ってあるんですよ。

アケミの弟は、少年院から出てきても、また同じようなことをして捕まりました。

その時は、成人していたので、顔も公開されました。もともと僕は、その前に、あいつの写真を何枚か手に入れていて、その顔を頭に焼き付けていました。

こいつさえいなければ、僕とアケミは幸せになれたんだ。
僕はそう思っていたけど、今、考えるとまったく違いますね。
僕にもっと行動力があれば、アケミを探すことだってできたし、
一緒になることもできたんですよ。
僕は心のどこかで、あんな弟のいるアケミから、さめてしまっ
ていたのかもしれない。
差別ですよ。僕はそんな人間です。

僕はその事があって、大学受験に失敗しました。親父は怒りまし
たね。すごかったです。

でも、何とか一浪することを許されて、東京の予備校に行くこと
になりました。この予備校は全寮制の厳しいところで、遊んでいる
暇はなかったです。

何とか東京の一流と呼ばれる大学の工学部に入ることができまし
た。ぼくはアケミの事があってから、女性恐怖症みたいな感じにな
っていました。だから、大学では勉強ばかりしていて、女性と付き
合うことはなかったです。

女性恐怖症っていうのは言いすぎですね。女性を愛することが怖
かった。愛した女性がまたどこか遠くに行ってしまうのではないか
という不安がありました。男らしくないですね。

卒業して、福井に戻り、親父の会社に入りました。一部上場はし
ていませんでしたが、従業員は五百人くらいで、それなりに業績も
良かったです。

最初は、設計や製造の現場でひととおりやり、ものつくりについ
て経験をしました。親父は、現場を知らない人は経営もできない、

まず、現場を知れと言っていました。

その頃、見合いで、今の妻のシズヨと結婚したのです。まあ、親が決めたようなものです。僕にはアケミ以来、好きな人がいなかったし、その頃はアケミの事も忘れかけていました。

ひととおり、現場を経験した後、僕は東京勤務になりました。東京支社では幹部候補でした。

僕は営業部の課長だったかな？まだ二〇歳代でしたから、すごい昇進だと思います。

同族経営なんて、そんなもんですよ。

営業の仕事は嫌いではなかったです。毎日、他の会社に行つて、商談をまとめるのですが、僕はこの仕事が中々好きでした。

あれは夏の日のことです。新しい会社の商談で、僕は静岡の方に出張していました。その時は部下も上司もいなくて、僕一人だったと思います。中々商談がまとまらなくて、一週間くらい、毎日、静岡まで出張でした。

営業は、約束の時間に遅れるのはダメです。でも早すぎるのも失礼なんです。それで、僕は少し早めにその会社について、会社の近くの公園で時間をつぶし、約束の時間の五分前くらいに会社の受付に行くようにしていました。

僕はその頃、ほぼ毎日、公園のベンチに座っていたのですが、小学校低学年の可愛い女の子が、よく一人で遊んでいました。親や友達と一緒にではなかったので、目に付いたのだと思います。

ある日、僕がぼうつと、公園のベンチで座つて、缶コーヒーなんかを飲んでいたら、女の子の悲鳴のような声が聞こえました。見ると、ジャンブルジムの近くに、あの女の子が倒れていました。僕は

ジャングルジムから落ちたのだと思い、急いで女の子の近くに行つて、大丈夫か？と声をかけました。

女の子は何か立ち上がったようでした。僕は怪我が心配で女の子の手を取ろうとしましたが、女の子は怯えた顔をして、僕を避けます。

知らないおじさんに声をかけられたら注意するように言われているでしょう。僕はもう一度、女の子の手を取りました。女の子は僕の手を払いのけました。その時、僕は女の子の手に青あざがついているのを見つけました。今ついたあざなのかと思いましたが、よく見ると、女の子の手や足に、青あざや赤い傷が無数についています。

僕は驚いて、女の子の傷を調べようとすると、女の子は僕から避けて、公園の出口の方へ走って行ってしまいました。女の子が走れるくらい元気だったため、僕はあの青あざや傷はジャングルジムから落ちてついたものではないと思いました。

いじめ、虐待、そんな言葉が頭に浮かび、僕は女の子を追いかけて、公園の周りの狭い道路に出ました。

見ると、女の子の向こう側に、痩せた男がいて、何か話しています。男は女の子に対して叱っているように見えました。

僕は近づいて、男の顔を見ました。

刹那、僕の体に電流が走り、僕の頭に、あいつー、アケミの弟の変質者の顔が浮かびました。

あいつに間違いない。

僕はそう思い、その男に近づき、その名前を呼びました。

男は驚いて、一瞬、惚けた顔をしました。僕は男に大声で問いただしました。あいつは大人には弱く、僕が凄むと、すべて話しまし

た。

女の子と一緒に住んでいるということ。

女の子はアケミの子供、つまり僕の子供であるということ。

そして、そしてー、その子供にしたこと。

僕はそれを聞いて、あいつの顔面を二、三回殴りました。あいつは全く抵抗しませんでした。

僕は、本当は殺してやりたいくらいでした。こいつは、アケミにも、アケミの母親にも迷惑をかけて、さらにアケミ子供にもつらい思いをさせている。こんな人間は生きていく価値がないと、そう思いました。

しかし、そんな人間を殺して、僕が罪を背負うのも馬鹿らしく思いました。それで、警察に電話して、あいつのことを話しました。警察はあいつを逮捕しました。その時、トモミは独りであいつのアパートに帰って、暗い部屋で震えていました。

僕は、その後、アケミが死んだことを警察から聞きました。まったく知らなかったのです。それで、トモミが可哀想で、可哀想で、何とかしてやろうと思ひ、いろいろ手を尽くして、できるだけいい環境で暮らせるようにしました。

そうですね。僕が引き取って育てるのが一番良かったかもしれ
ません。

でも、それができなかつた。僕は親父の会社に勤めていたし、親父の選んだ人と結婚していた。

情けない話ですが、親父がまだ怖かつたのです。今の安定した暮らしを捨てるのが怖かつたのです。

ああ、情けない。本当僕は自分勝手な男ですね。

次にトモミと会ったのは、二年くらい前のことです。僕の方から会うということはしませんでした。これも本当に偶然なのです。

運命って、不思議ですよ。

でも、このことを話す前にヨウコのことを話さなければなりません。

えっ、もうそんな時間ですか。

すみません。つい夢中になりました。

サンノミヤさん、昨日は遅くまで話してしまって、すみませんでした。

ええ、体調はいいですよ。それより、シズヨはどうしてますか？

はあ、そうですね。おそらく読んだのでしょう。僕はシズヨ宛に遺書を書いています。僕が死んだ後、読んでくれたらと思います、自宅に隠しました。おそらくそれを見つけて、読んだのだと思います。

彼女にとっては信じがたい話だと思いますよ。僕も今さら彼女に対して、どう接したらいいか分かりません。まったく自分勝手な酷い男ですよ。

ええ、もし彼女が面会に来るなら会いますが。

……、どんな顔をして会えばいいのかな。

えーと、ヨウコのことですよ。

そうですね。もうお解かりかと思いますが、ヨウコは僕の血のつながった子供ではありません。シズヨとも血が繋がっていません。

ヨウコは僕達の子供ではないのです。

僕達夫婦には子供ができませんでした。ヨウコは養子で、僕達は里親なのです。

シズヨは子供が好きで、僕達は結婚したらすぐにも子供を作る予定でしたが、中々、子供ができませんでした。結婚して二年目になって、病院に行つて、検査をしたのです。

不妊の原因はシズヨの方にあつたようです。僕の方は正常でした。シズヨの方は、子宮内の血液の循環が悪く、卵子が成長しないのだと医者は言っていました。

まあ、僕は、高校生の頃、アケミとの間にトモミという子供があるので、おそらく正常であるということは解っていましたが、もちろん、シズヨはそんなことは知りません。

シズヨは相当ショックを受けたようでした。自分がそんな体なのだということは、まったく知らなかったようです。

ええ、それから、二年間、いろいろな不妊治療をしました。僕もできる限り協力しました。何とか子供が授かるといいなあと思っていました。しかし、二年間も治療したのですが、シズヨは妊娠しませんでした。

シズヨは本当に子供が好きで、治療を行っている時も、友達が勤めている児童養護施設でボランティアをして、子供たちと接していました。シズヨは本当に子供が好きだったので。自分の子供が欲しい、その思いは、僕にもひしひしと伝わってきました。

二年間、あらゆる治療をしても、子供ができない。シズヨは、もう、自分で子供を産むのをあきらめたようでした。僕は当時、シズヨが可哀想で何とかしてやりたかったのですが、こればかりはどうしようもありませんでした。

そんな頃です。シズヨから養子里親の話をされました。シズヨは、ボランティアをしている養護施設のある女の子を引き取って育てたい と、そう僕に言ったのです。

僕は驚きました。まさかシズヨはそこまで考えていたとは、夢にも思いませんでした。

シズヨが言うには 。

その女の子は八歳で、両親は行方不明。いわゆる孤児。とても良い子なのだけど、自閉症 、いや今では、アスペルガー症候群というらしく、「知的障害がない自閉症」なのだそうです。シズヨはその子を引き取って、育てたい、その子の心を開きたいと、そういうのです。

はあ、アスペルガー症候群ですか？実は僕にもよくわかりません。いろんな症状があるらしいです。養護施設の人にはヨウコのことを、そう言っていたけど、本当にヨウコがアスペルガー症候群なのか？僕には疑問なんですよ。

サンノミヤさん、ところで里親制度って、知っていますか？

ああ、そうですね。

シズヨの話は突然で驚きましたが、僕はシズヨの思いに答えることにしました。里親になるには、児童相談所への申請、面接、家庭訪問などを経て、審議会が行われ都道府県知事が認めて、その後、里親研修を受講して、ようやく里親登録となります。

書類もたくさんあって、手続きが結構大変なんですよ。それでも、僕はシズヨのためにいろいろと協力しました。

その間に、何度かヨウコとも会いました。始めて見た時は、目がパッチリと大きくて、人形のように可愛らしい子供だと思いました。

しかし、ヨウコは僕と話をしてくれませんでした。八歳で、知的障害がないのであれば、僕の話した言葉の意味は汲み取っているはずです。しかし、ヨウコは僕が話しかけると、一瞬は僕の顔を見ますが、すぐに目をそらして、僕に話しかけてくれることはなかったです。

僕たちの苦勞が実り、ヨウコがやってきたのは、それから半年後のことでした。僕の家は、3LDKのマンションでした。ヨウコのために、それまで住んでいた2DKのマンションから引っ越したのです。

僕のマンションにやってきても、ヨウコは相変わらず一言も話しません。いや、何か独り言のようなことは聞いたことがあります。飼っていた猫とは仲良くなって、猫に向かって何か言っていたのも、覚えています。人間との会話を避けていたという感じでした。

ええ、親父は大反対でした。でも僕は今回は自分の思いを押し通しました。それは、シズヨの気持ちに痛いほど解っていたからです。それに僕にはトモミという子供がいるのだということを、シズヨには隠しているという負い目もありました。

親父はトモミのことを知っていたかもしれませんが、その時は何も言いませんでした。

僕の家にはヨウコがやってきて、半年が過ぎましたが、ヨウコは相変わらず、話をしてくれませんでした。学校には行かせていました。特殊学級、今で言う、特別支援学級でしょうか？これもいろいろ調べて、ヨウコに合った体勢が整っている学校を探して、編入させました。ちょっと遠かったのですが、僕が、シズヨが車で送り迎えをして

いました。

ええ、大変でしたが、子供がいるっていうことが、励みになりました。生活は子供中心に変わって、毎日が新しい発見の連続で、ヨウコのが、どんどん好きになっていきました。

サンノミヤさん、お子さんは？

だったら、解りますよね。子供は宝ですよ。あの笑顔で親はすべて参ってしまいます。

そうです。

そんなヨウコとの生活の中で、僕はトモミのことを忘れたことはありません。いつも心のどこかでトモミのことを考えていたような気がします。だから、ヨウコは中々心を開いてくれなかったのですよ。

あれは、ヨウコが九歳になった頃のことです。ヨウコが僕たちの家に来てから、既に一年以上がたっていました。

僕の家では、猫を飼っていました。ピースケという名前のミケネコでした。ヨウコはピースケと仲がよく、ピー、ピーといっちは、よく一緒に遊んでいました。

そのピースケが、ある日、僕の家からいなくなってしまいました。僕の家はマンシヨンだったので、ほとんどピースケは家から出る事はありませんでした。たまに外に出る事がありました。すぐに帰ってきました。

しかし、その時は、三日たっても、四日たっても、ピースケは帰ってきませんでした。僕たちも心配でしたが、ヨウコも遊び相手がいなくなつて、落ち込んでいるようでした。

「ピースケ、死んじゃった」

ある日の夕食の時、突然、ヨウコが言ったのです。

「ねえ、ピースケ死んじゃった。死んじゃった」

そう言って、ヨウコは大粒の涙を流し、わんわんと泣き出しました。

僕たち夫婦は、啞然としました。ヨウコが初めて言葉らしきものを話したのです。確かに猫は死が近づくと、自分で死に場所を選ぶのだと言います。

僕たちは、驚きましたが、ヨウコが泣くので、必死に説得しました。

「ピースケ、まだ、どこかにいるよ。そのうち帰ってくるよ」

僕たちがそう言っても、ヨウコはただ泣くばかりでした。

しかし。

しかし、その後、奇跡が起こったのです。ヨウコが言葉を話すようになった。

「お父さん」

「お母さん」

そう言ってくれたのです。今度は僕たちが涙を流して喜びました。結局、ピースケは帰ってこなかったけど、僕たちはピースケに感謝しました。ピースケの死が、ヨウコに何をもたらしたか解りませんが、ピースケがいなくなってから、ヨウコはそれまでとは打って変わり、よく話し、よく笑い、時には怒ったり、感情を表すようになりました。

私たちの家庭はいつきに明るくなり、シズヨもとてもうれしそうでした。

ヨウコがコミュニケーションを出来るようになり、先生とも相談して、普通学級に編入しました。僕たちは最初は心配だったが、ヨウコは別人のように活発になり、友達も出来て、明るく可愛らしい、魅力ある女性に成長していったのでした。

嘘みたいな話でしょ？でも本当なんですよ。何がヨウコを変えたのか？僕たちにはまったく解らなかつたけど、もうそんなことはどうでもよくなつていました。

ヨウコは、頭が良く、勉強も良くできました。元々知能は健常者より高かつたのです。

そんな時、会社が名古屋支社を作る事になり、僕は名古屋支社に転勤になりました。名古屋支社では、次長待遇でした。この頃になつても会社の収益は好調で、優秀な人材も多く、親父は僕に会社を継がせるという思いも、だんだんと薄れてきていたと思います。役員クラスにはなれるかもしれませんが、会社のことを考えると、僕なんか社長になるより、もっと経営手腕を持った人材が社長になるほうが、会社のためには良いと言ふ事が親父にも解つたのでしよう。だから、親父は昔のように厳しくはなかつたです。

でも、僕はそのほうが気が楽でよかつたです。

高校生になつてもヨウコの成績はよく、僕とシズヨは大学に入るように進めましたが、ヨウコは早く社会に出て働きたいと言いました。僕たちは少し残念だつたけれど、ヨウコの意見を尊重しました。それで、ヨウコは三河にある自動車部品メーカーに就職しました。

その会社は僕の会社なんかより大きな一流企業で、安定した優良企業でした。

そうですね。恐ろしいほどの偶然です。その会社にはトモミも就職していたんです。そして、ヨウコとトモミはその会社で知り合い、同じ部署になりました。それで、友達、親友になつたのです。

ああ、こんなことがあるのですね。僕の人生は、こんな偶然が何度も何度も続きました。なんとという数奇な運命なのでしょう？今、話していても、本当に不思議です。

ヨウコがトモミを僕の家に連れてきた日のことは忘れません。三年前のことです。ちょうど、僕が会社から帰って、家の玄関に入る時に、ヨウコとトモミが出て行くところで、玄関でトモミの顔を見ました。

ええ、すぐに解りました。

トモミと最後に会ったのは、トモミが八歳の頃でしたが、大人に成長したトモミの顔には、その頃の面影がはつきりと残っていました。

トモミはショートヘアで、あまり化粧をしていなかった。服装もどちらかという地味で、最近の若い女性にしては珍しいなと思いました。でも顔立ちは整っていて、奇麗だと感じました。その顔を見た瞬間、僕の背筋がぶるぶると振動するような感覚を覚えました。まさしく、その女性は、僕の子供、トモミであると、確信しました。

トモミも僕の顔を見て、呆然といていました。トモミにも解ったのでしょうか。僕が父親だということが。

その時は、お互い、何も話さずに別れました。ヨウコがいましたし、出会いが突然すぎて、何をしたらいいのか、解りませんでした。僕はトモミとは二度と会うことはないだろうと思っていました。しかし、突然再会したことで、僕はトモミと話したくなった。とにかく、僕のことを謝りたいと思った。トモミは許してくれないかもしれない。それにそんなことをしたら、シズヨやヨウコに、トモミと僕の関係がばれてしまう。そうしたら、今の安定した幸せな家庭が崩れてしまうかもしれない。

しかし、僕は我慢できずに、トモミの連絡先を調べて、会ってく

れるようにお願いしたのです。トモミは僕を恨んでいるのだと思っ
ていました。だから、会ってくれと言われた時、とてもうれしか
ったのですが、反面、怖かった。複雑な心境でした。

トモミとは、名古屋の喫茶店で会いました。最初はお互い無言で
した。まず僕が謝りました。

「本当にすまなかった。君の今までの苦労はすべて僕の責任だ。だ
から、だから」

しかし、その後の言葉が続きませんでした。だから、許してくれ
と言いたかったけど、それは、とても無責任で、ずうずうしい。僕
は本当に苦しかった。何もしてやれなかった自分が、人間として最
低だったと思った。

しかし、トモミは、笑顔になつて、言ったのです。

「あなたは、あの時、わたしを救ってくれました。わたしはあなた
を探して、お礼を言いたかったのです。でも施設の人はあなたの居
場所を教えてくださいませんでした。こうして会えて、良かったです。

あの地獄のような生活から、救ってくれて、本当にありがとうございました
いました」

僕は涙を流しながら、トモミの話を聞いていました。トモミは僕
を責めることはしませんでした。むしろ、感謝しているようでした。

それから、何度かトモミと会いました。そのうち、トモミの態度
が変わってきました。トモミはあれ以来、男性恐怖症で、男の人と
話すのはできなかつたけど、僕だけには、何でも話せるって言うて
いました。だから、いろいろな相談事も聞きました。トモミの会社
のことが主でした。

トモミは僕を父親として見ていませんでした。それは無理もあり
ません。一緒に暮らしていたことはないし、会ったのは、幼少の頃、

公園でトモミを救った日だけです。その時もトモミは僕のことを父親だと思っただけでいかなかったのです。

男性恐怖症だったトモミが初めて心を開いて話ができる、それは父親だからなのか？

よく解らない、よく解りませんが、トモミは僕を男、たった一人、心を開くことができる大人の男。

それが、父親かもしれませんが、トモミは僕を父親であるとともに、一人の男性として感じていたと思います。それは愛なのか？親子の愛と男女の愛が交錯した複雑なものだったと思います。

サンノミヤさん、解らないですよ。僕も解りません。そんな愛の形があるのか？

しかし、僕も同じだったんですよ。自分の成長した娘に、女を感じていたのですよ。ずっと離れ離れになっただけで、親子の感情は薄れ、彼女を一人の大人の女性として見ていたのだと思います。

それで、僕とトモミは、禁断の愛の道に進みました。どちらから誘うとか、そういうことではなく、自然に、いや自然ということはおかしいかもしれませんが、体の関係を結んでしまいました。

おかしいですよ。解っています。しかし、感情が抑え切れませんでした。それはトモミも同じだったと思います。

親として、子供を愛おしいという気持ち、それと、大人の女性の魅力に対する感情。それが、交錯して、僕は実の娘であるトモミとセックスしました。

トモミもそれを望んでいました。

許されない、と思います。でも、感情、気持ちが抑え切れませんでした。

僕とトモミはその関係を隠すしかありませんでした。僕にはシズヨという妻がいます。ヨウコという血はつながっていないけれど、娘もいます。だから、ひたすらトモミとの関係を隠しました。

しかし、ヨウコは、ヨウコは気づいたのです。

ヨウコは不思議な力を持った子でした。彼女に対して、隠し事はほとんどばれてしまう。まるで、他人の心の中が見えるような、するどい直感を持った子でした。それはヨウコが子供のころからで、よく、お父さん、それ嘘だよねっと、あっさり嘘を見抜かれました。

「お父さん、お父さんが浮気をしたとしても、わたしはお母さんにばれなければ、それもいいと思う。それが、わたしの友達でも、わたしは、お母さんには秘密にしておく」

「でも、わたしは知っているの。トモミは、トモミはお父さんの娘なのよ」

ヨウコは何もかも知っていました。どうして知ったのか、それは解りません。いくら親友でもトモミが話すとは思えませんでした。

「お父さん、実の娘とそんな関係をこれからずっと隠して続けているの？お母さんはどうするの」

「だから、トモミとは、トモミとは別れるべき。トモミは悲しむかもしれないけど、わたしが何とかする」

「もし、お父さんがトモミと別れないのなら、すべてをお母さんに話す。おじいさんにも話す。これはそれほど大きなことなのよ」

ヨウコがトモミのこれまで生い立ちを、知っているのかどうかは解りませんでした。もしかしたら知っていて、言っていたのかもかもしれません。

確かにトモミとのこんな関係が長く続くとは、僕にも到底思えませんでした。しかし、トモミには僕しか見えていない。別れることを切り出したら、トモミはまた暗く、辛い人生を送ることになってしまうのではないか？

僕は悩みました。そして決心して、トモミにも言いました。このまま関係を続けていっても、本当に幸せになることはない。僕とトモミは親子だから、絶対に結婚できない。

しかし、トモミはそれでもいいと、泣きながら言いました。僕と別れても、一生他の男のことを好きになることはない、そう言いました。

僕はその時、閃いてしまいました。

ヨウコがいなければ。

このことを知っているヨウコがいなければ。

例えば結婚できなくても、トモミとの関係を続けることができる。許されない関係だが、トモミはそれで幸せだという。

それで。

散々悩みましたが、僕は養子のヨウコより、自分の妻のシズヨリ、自分の娘であり、恋人であるトモミを取りました。

それで、ヨウコを自殺に見せかけて殺すことにしたのです。

その考えは、もう止めることができなくなりました。

もうそれしかない、それしかないのだと、日々、その思いは固く僕の心を占有していったのです。

今、思えば、トモミと別れて、トモミが他の男と幸せに暮らすこともあったかもしれないが、僕はもうトモミを愛していて、その選択はないのだと思っていました。だから、もう、ヨウコにいないってもらおう、そう決心しました。

自殺に見せかけると言っても、ヨウコには自殺する理由がありません。そこで僕はインターネットの掲示板にヨウコを中傷することを書きました。ええ、すべて僕が書きました。トモミから職場のこ

とは何となく聞いていました。後は他の掲示板を見て、なるべく酷いことを書きました。

掲示板やブログに書かれた中傷や、悪口で、自殺した人がいるっということを、ニュースで見た記憶があつて、これを自殺の原因にしようかと思つたのです。

そして、掲示板のことをトモミに話しました。その時はヨウコを殺すなんてトモミには話していませんでした。トモミから会社の人達に伝えてくれるように仕向けたのです。

実際、トモミの職場の人達もその掲示板を見たようです。

ああ、ヨウコも見たかもしれませぬ。それにトモミの職場の人もおもしろがつて、いくつか書き込みをしたかもしれませぬ。

ああ、すみませぬ。

もう、お昼ですね。あと少しで僕の話は終わります。

ヨウコを自殺に見せかけて殺したのですが、トモミには解ってしまいました。僕がヨウコを殺したということにとてもショックを受けます。

ヨウコはトモミと僕のことを知っていて、トモミに話していたのです。やはり、ヨウコはトモミにも僕と別れるように言っていました。

それで。

トモミは、もう死にたいと言い出しました。

もう、何もかも嫌になつたと。

僕にとっては誤算でした。まさかヨウコがトモミに話していると

は思いませんでした。

僕はもうだめだと思いました。ヨウコが死ねば、トモミとの関係が続けることができると思っていました。僕がヨウコを殺してしまったのをトモミが知ってしまった。

僕は、もう何が何だか解らなくなって、トモミと一緒に死ぬことにしました。このまま生きていても、もう、トモミは幸せになれない。僕はそれでは、僕の生きていく価値もない、そう思いました。

それで、二人で死のうと決意しました。死ぬ場所は、トモミが富士の樹海がいいというので、樹海で首を吊ることにしたのです。

僕の手で青木ヶ原まで行って、富岳風穴あたりから樹海に入りました。一緒に首を吊ろうと思いましたが、中々うまくいかず、トモミが、まず私の方からと言ったので、ロープを首に巻いて、近くの木に吊るしました。横に生えている木にロープを結び、トモミの体が斜めになるようにしました。これなら、苦しくなって、意識がなくなってから、苦しまずに死ねる。トモミがそう言ったのです。

トモミは目を瞑って段々と息が荒くなってから、今度を自分の首にロープを巻こうと思った時、遠くの方に光が見えました。

僕は目を疑いました。夜の樹海で、僕たちはどこにいるのか、まったく解っていませんでした。誰かが通報したのでしょうか？

僕は。

僕は、それを見て、そこから逃げ出してしまいました。トモミを置いて、逃げ出してしまったのです。何故そんな行動をしたのか、解りません。

本当に、本当に、無責任で臆病な、最低の男です。

その後、おそらくトモミは死んでいなくて、近くの病院にいるの

だと思い、電話帳で病院に片っ端から電話をかけて、スズキ病院を突き止めました。僕はトモミと一緒に死ねなかったことに罪悪感を感じていました。それで、もう一度、心中を図ろうと、トモミを病院から連れ出したのです。

しかし、結局、また失敗に終わりました。

そうですか。トモミは無事ですか。意識もはっきりしている？

結局、これで良かったのですかね。

トモミは何も悪くありません。すべて僕が悪いのです。

僕がこんなことを言える立場ではありませんが、トモミは生きていて良かった。

うん、そうです。

生きていて良かった。人生何が起こるか解りません。

トモミもこれから幸せを見つけられるかもしれません。

シズヨもそうです。

僕のことなど忘れて、幸せになって欲しい。

こんなこと言える立場じゃないんですけど……。

僕の話はこれで終わりですよ。

サンノミヤさん、長々と聞いてくれてありがとうございます。

エピソード

ようやく梅雨があけたのは、もう八月も迫る七月の最終週だった。私は愛知県警のサカキバラ警部とクワタ刑事から、今回の事件の概要を聞いた。それは私にとって、想像を絶するものだった。

トモミさんの過去。

ヨウコさんの過去。

マサトさんの過去。

それらの結果として現れたヨウコさんの死。

すべてが、私の想像を超えていた。人生というものの、運命というべきか、細く、長い糸が複雑に絡み合い、結果、ヨウコさんの死という悲劇を生んだ。

これまで、何事もなく、のうのうと生きてきた私にとって、それは筆舌に尽くしがたい、悲しい物語だった。

私は富士吉田から戻った後、しばらく有給を取って、会社を休んでいた。

樹海での恐ろしい経験、そして、サンタから聞いた事件のあらまし、そんなことで心労が重なって、しばらくベッドから立ち上げられなかった。

そして、その後、サカキバラ警部から、トモミさんの話やマサトさんの話を聞いて、本当に神経が参ってしまった。仕事などまったくやる気になれなかった。

トモミさんの自殺やマサトさんがヨウコさんを殺したことは、新聞にも載ったし、週刊誌は面白おかしく取り上げていた。会社ではその話題が飛び交っているだろう。当事者の一人である私は、とても会社に行く気にはなれなかった。それで、病院に行つて、うつ病の診断書を書いてもらい、休職することにしたのだった。

休職している間はほとんど自宅のアパートに引きこもっていた。最初の一週間は何もやる気になれなかった。

一週間が過ぎ、ようやく事件のことを少しは考えられるようになった。不思議なことに、私はヨウコさんを殺したマサトさんに対して、それほど憎悪を感じなかった。マサトさんの生い立ち、トモミさんの過去を聞いて、マサトさんに少し同情しているのだろうか？しかし、人を殺したことは大きな罪である。なんらかの罰を受けることになるのである。

駅から大学まで、だらだらとした坂道をあがっていく。

八月の空は晴れていて、強い日光が照りつけていた。梅雨時に比べると、空気はいくらも乾燥していたが、日差しは強く、私はハンカチで汗をぬぐいながら、大学までの坂道をゆっくりと歩いた。

先生を訪ねるのは、六月の終わり、サンタと初めて会った日以来のことだ。私は事件のことを、先生にあれこれ相談しようとは思っていなかった。ただ、久しぶりに先生に会って、話をしたかった。先生の懐かしい顔を見たかった。それで、この暑い中、先生のいる大学まで、訪ねてきたのである。

先生のいる研究室のドアを軽くノックして、ドアを開けると、先生は机の上にあるデスクトップパソコンを操作していた。

先生は、私に気づくと、ずり落ちた眼鏡を上げて、おやつという、少し驚いたような表情をした。

「やあ、君か。久しぶりだな」

「どうも、ご無沙汰していました」

私は先生の席の後ろに置いてあるパイプ椅子に腰掛けた。先生は椅子をぐるりと回して、私の方を見た。

「君、サンタにすいぶん引っぱき回されたいではないか」

先生は、少し笑いながらそう言った。

「いえ、サンタ君には、いろいろとお世話になり、むしろ感謝していますよ」

「ほう、そうか。あの男が役に立ったか？それは以外じゃのう」

先生は不思議そうな顔をしていた。

「あの男は人間的に未熟じゃ。だから過度な期待をしない方が良い」
先生は、サンタと初めて会った日に、私に言った台詞を繰り返した。

「先生、ひとつ訊いていいですか？」

「君が訊きたいのはひとつだけなのか？」

先生はニコニコしながら、やさしい眼差しを私の方に向ける。

「先生とサンタは、その、どんな関係なのですか？」

先生は、しばらく目を閉じて、腕組みをしていた。

「サンタは、君に言わなかったのか？」

「ええ、親戚だと言っていました」

「その通りじゃよ」

私はその答えに納得できなくて、もう一度訊いた。

「あの、サンタという少年はいつたい何者なんですか？高級車乗り回したり、そうかと思えば、怪しげな保護者がいたり」

「ははは、と先生は笑った。

「わしもサンタのことはよく知らんのじゃよ。じゃが、あの男にあまり深入りしない方が良い。ろくなことがない」

その時、先生のデスクトップパソコンからびっぴつという音がした。

先生は椅子を回転させて、パソコンの画面を見た。

「ふむ、もう計算が終わったのか。最近のコンピュータの処理速度は速くなったもんじゃの」

そう言って、先生はキーボードを操作して、パソコンに何か入力し、また椅子を回して私の方を向いた。

「先生、もうひとつ訊きたいことがあります」

「ふむ、やはりひとつじゃなかったのう」

「かまわず、私は続けた。

「先生、人は人を裁くことができるのですか？」

私はこのところ疑問に感じていたことを先生に訊いた。こういったことは先生の専門分野ではないことは解っていた。先生はどう答えるだろうか？

「できるも、何も、もう人は人を裁いておる。人が作った法律で、人は裁かれておるではないか」

「ああ、そうですね。質問の仕方が違いました。人は人を裁いて良いのですか？」

私はそう言い直した。

先生はまた腕組みをして、目を閉じている。しばらくして、目を開けて、話し出した。

「人が人を裁かなかつたら、誰が人を裁く？神か？そんなものはおらん。だから人が裁くのじゃ。そして裁かなかつたら、裁かなかつたら、人類の存続期間は短くなるであろう」

「それは、人は人を裁かなくてはいけないということですか？」

「そうかもしれぬ。人間は種の存続のために、社会を営み、社会から外れたものを裁く。気がつかないうちに種の存続の意思が働いているかもしれないのじゃ」

先生は、いつかも種の存続という話をしていた。ヨウコさんの死の後だ。人間は何のために生きるか？その答えが種の存続だった。

先生は、続けて話す。

「ただ、良いこと、悪いことに絶対的な解はない。人を殺すことは今の法律ではかなりの罪になるが、人をたくさん殺して、勲章をもらった人もいる。戦争ではそうじゃった。時代が違えば、法律も、善悪も異なる。そして、それを決めるのは強い人間なのじゃ。所詮、人間も弱肉強食の世界に生きているということなのじゃよ」

私は複雑な気分になった。そう言われてみれば確かにそうだ。善悪など人間が決めている。その時代の力のあるものが、法律を作り、裁きを行うのである。

私が黙っていると先生はなおも続けて話し出した。

「だから、君が誰かを裁きたいと思つたら、強くなることじゃな。今の時代では、強いということは、腕力があることではない。最も簡単に強くなるには、金をたくさん集めることじゃ。そうすれば確実に強くなれる」

先生は、ニコニコ笑っていた。私は冗談かと思ったが、少し考え
ると、それは、まともなことのように思えた。

マサトさんは、これから、裁きを受けるのである。それは、現在
の法律によるものになる。

時代が違えば、罪も違う。先生は、そう言った。私はますます人
間という生き物が解らなくなった。善と悪が解らなくなった。

「先生、それでは、先生は、善と悪をどういう基準で判断している
のですか？」

先生は不思議そうな顔をした。

「そんなものは、ない。わしにとって、そもそも、善、悪がないの
じゃよ。好きか嫌いかわ、それがすべてじゃ」

先生は何故か悲しそうな顔をしていた。

わたし@アウトサイド

```
From - Sun Jul 27 10:51:49 2008
X - Account - Key:
X - UIDL:
X - Mozilla - Status:
X - Mozilla - Status:
X - Mozilla - Keys:
Return - Path: > xxx@xxx.xxx.n
e.jp<
Received:
X - MD - RCP:T: xxxxx@xxx.xxx.n
e.jp
To: mitsuya@xxx.xxx.jp
X - MD - ISSUE:
Reply - To:
From: yoko
Subject:
MIME - Version: 1.0
Content - Type: text/plain;
charset="iso-2022-jp"
Content - Transfer - Encoding: 7bit
Message - Id:
Date: Sat, 9 Aug 2008 07:10:26
+0900 (JST)
```

わたし@アウトサイド

わたしです

ヨウコです

ミツヤ君のいる世界の外側にいます
アウトサイドって、なんかカッコいいでしょう

いろいろあつて大変だったね！！

わたしは、お父さん、マサトさんがわたしを殺すんじゃないか
って思っていました

でも、それを受け入れました

何でかな？わかりません

トモミは案外強いから、大丈夫だよ

お母さんはちよつと心配だけど、まあ大丈夫だよ

ミツヤ君が一番心配だったので、メールで連絡しました
マサトさんを許してあげて

そして、わたしの分まで、強く生きてね！

人間って、何だと思っ？

物質？

こころって、何だと思っ？

物質？

魂って、何だと思っ？

物質？

ミツヤ君にもそのうちわかると思うけど、人間は物質だけど、魂は
物質じゃないのよ

わたしの魂はミツヤ君といつも一緒にあります
ミツヤ君が生まれる前からそうなのです。

だからわたしがいなくなつたなんて思わないでね

永遠なの

わたしとミツヤ君は永遠なのよ

時間と空間

そんな次元を超えて、わたしたちは存在するの

だからずっと待っていた

ミツヤ君が生まれて

わたしのもとに来るのを待っていたの

これからもずっと一緒

わたしはこちらに来たけど、ミツヤ君はそっちでもう少しがんばって！！

ミツヤ君は何かできるはず

そう、だから勇気を出してね

わたしはいつも見守っているよ

-

Y O K O

O u t s i d e

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4112o/>

わたし@アウトサイド

2010年11月5日00時25分発行